荒砥島原遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1980

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

島原遺跡　正誤表

ページ	行	誤	正
例言	30行	中山五郎	中村五郎
P 5	左14行	中期後半から初頭に	中期後半から後期初頭に
P11	周辺の遺跡90		○印トル
	〃　91	牛荻1号墳	牛伏1号墳
P19	左29行	1～5	3・5～8
	左31行	東隣・東壁	西隣・西壁
	〃	6．7	1．4
	左32行	西壁	東壁
	〃	8	2
P32	右38行	周溝は検出されなかった	周溝は巾10～15cm深さ3～13cmでほぼ完周する
P108	左31行	各水路の配水	各水田の配水
P114	左14行	褒	窓
	左17行	堆積	埋積
P127	文献36	牛荻	牛伏
	文献56	中東耕志	中東耕志
P117～119　本文中の第138図～第144図は第140図～第146図に順次ずれる			

資料 No. 1-2456
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成2年3月31日
01-353
166-1
(7)

荒砥島原遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1980

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

▲1．浅間B層下水田址(手前)と方形周溝墓群(後方)

▼2．3号方形周溝墓出土の装身具(ガラス玉・勾玉・管玉)

3．A区9号住居址出土遺物

4．C区7号住居址出土遺物

5．E区16号住居址出土遺物

序

赤城山南麓に位置する前橋市荒砥地区は、県内有数の古墳密集地域であり、その他の埋蔵文化財も多く分布する所であります。一方、近年農業の機械化、近代化は著しく、近代経営に合わせた圃場整備の必要性も増し、この地域でも土地改良事業が計画、実施されております。これら事業の実施に伴って、埋蔵文化財の保護対策も必要となり、その一環として発掘調査を実施し、遺跡・遺構の様子を記録保存することにいたしました。本冊子で報告する島原遺跡も、荒砥南部土地改良事業に伴って発掘調査を実施したものの一つです。

上野国二之宮である赤城神社の南に位置するこの遺跡では、弥生時代から平安時代にかけての住居址をはじめ、火山爆発に伴う降灰によって埋没し、自然災害のおよぶ範囲とその強大さを物語ると共に、当時の生産の様子を今に止めていた水田跡等、この地域の人々の生活の跡をたどる上での多彩な資料が発見されました。

これも、本遺跡の調査、そして本報告書刊行にいたるまでの間、終始御指導、御協力をいただいた群馬県農政部の関係機関、荒砥南部土地改良区関係者と地元地権者の方々、発掘調査や整理に直接たずさわっていただいた担当者をはじめとする多くの方々の総力が結集された結果であり、ここに厚く感謝の意を表します。

この様にして出来た本報告書が多くの人々に有効に活用され、後の世に生かされていくことを念じ序といたします。

昭和56年3月26日

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　清　水　一　郎

例　　言

1. 本報告書は1980（昭和55）年度の県営圃場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書である。
2. 遺跡は前橋市二之宮町1571番地他に所在する。
3. 発掘調査は1980（昭和55）年11月6日より開始され、翌1981（昭和56）年3月31日で現地作業を終了した。
4. 発掘調査は、当事業団が県農政部および県教育委員会と委託契約を締結し、実施した。
5. 調査組織は以下のとおりである。

事務担当　小林起久治、沢井良之助、近藤平志、国定　均、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子
野島のぶえ、並木綾子

調査担当　石坂　茂（群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査研究員）
小島敦子（　　〃　　）
徳江秀夫（　　〃　　）

6. 本書作成の担当者は次のとおりである。

編　　集　石坂　茂
本文執筆　石坂　茂（Ⅰ－1・2、Ⅱ）、小島敦子（Ⅲ）、徳江秀夫（Ⅰ－3～5）
土器観察表　徳江秀夫
新井悦子
レイアウト　石坂　茂、新井悦子
図版作成　皆川正枝、高橋フジ子、田村栄子、大友幸江、保坂雅美、萩原弘子
遺構写真　石坂　茂
遺物写真　佐藤元彦

7. 出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
8. 遺物の石材鑑定は、飯島静夫氏（群馬県地質学協会員）の手をわずらわせた。
9. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略、アイウエオ順）

飯田陽一、飯塚卓二、石塚久則、井上唯雄、岩崎泰一、内田憲治、大西雅広、坂井　隆、坂口　一、佐藤明人、辻口敏子、中沢　悟、中山五郎、能登　健、橋本博文、原　雅信、平野進一、藤巻幸男、松本浩一

凡　　例

1. 本調査は工事用基準杭を使用して遺跡全体に6×6mグリッドを設定し、東西をアラビア数字、南北をアルファベットで呼称した。各グリッドの名称は南西隅をあてた。また、グリッドの国家座標上の位置は全体図中に記載したが、グリッドの傾きは座標北より東偏(+)1°02′20″であった。
2. 掃図中に使用した方位は磁北で、真北からの偏角は西偏(−)7°52′20″である。また、真北方向角は東偏(+)0°23′45″である。
3. 本書における遺構番号は、発掘調査時に付されたものをそのまま使用したため、住居址については欠番が生じている。
4. 住居址の遺構図面の縮尺は平面・断面図が1/40、竈土層断面図が1/20で統一した。他の遺構については図面中に示してある。
5. 住居址・方形周溝墓および水田区画面積の算出については、住居址が1/40、方形周溝墓が1/40、水田址が1/40平面図上でプラニメーター（ローラー極式・レンズ式）による3回計測平均値を使用した。なお、小数点以下3桁は四捨五入してある。
6. 遺構の方位は炉付住居および方形周溝墓は長軸線に、また竈付住居は竈付設壁にそれぞれ直交する軸線の方位である。
7. 遺物実測図の縮尺は、石製模造品・ガラスおよび石製装飾品は1/1、坏・高坏・ミニチュア・破片拓本等の土器および鉄製品と石器は1/3、甕・壺・甑の土器と円筒埴輪は1/4を原則としているが、これと異なるものについては図中の遺物番号後尾に(　)で縮尺を記入した。
8. 遺物実測図中におけるスクリントーンは次のことを表わす。

   内黒処理の内黒部分　　燻燃成の燻部分　　灰釉陶器の施釉部分

   磨耗部分
9. 土器実測図中の→印は胎土中の砂粒の動いた方向を示す。
10. 土器観察表の記載方法は次のとおりである。
    - a 土器分類は、土師器については記載していないが、その他のものは記載してある。
    - b 法量の項目中の略語は、高＝器形の高さ、口＝口縁の直径、胴＝胴部の最大径、底＝底部の直径、または脚部下端部の直径をそれぞれ表わす。
    - c 胎土中の砂粒の大きさは、＞2㎜＝礫、2〜0.2㎜＝粗砂、0.2〜0.02㎜＝細砂、0.05〜0.02㎜＝微砂とした。
    - d 須恵器の焼成については、酸化焼成および還元焔焼成の別を記した。
    - e 色調については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖に基づいている。
    - f 出土状態については、床面に密着して出土したものは「床直」、床面より若干浮いていたものは床面からの高さ、埋没土層中から出土したものは「埋土中」とそれぞれ記載した。
11. 石製模造品、装飾品、鉄製品、石器、不明遺物の説明については、本文中に記載した。
12. 第1図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（前橋・大胡）、第3図は同じく2万5千分の1地形図（大胡）をそれぞれ使用した。
13. 第4図は前橋市発行の5千分の1現形図（№65・66）を使用した。

目　　次

巻頭図版

序

例　言

凡　例

I　発掘調査と遺跡の概要

1　調査に至る経緯 ……1
2　遺跡の位置と地形 ……3
3　周辺の遺跡 ……5
4　調査の方法 ……13
5　遺跡の基本層序 ……14

II　調査の内容

1　調査された遺構 ……15
2　住居址 ……15
A区11号住居址 ……16
A区21号住居址 ……18
A区15号住居址 ……19
A区9号住居址 ……19
A区26号住居址 ……20
C区4号住居址 ……22
C区6号住居址 ……23
C区8号住居址 ……24
C区9号住居址 ……25
C区10号住居址 ……26
B区4号住居址 ……28
B区11号住居址 ……30
C区7号住居址 ……32
B区5号住居址 ……34
E区3号住居址 ……35
A区4号住居址 ……36
A区2号住居址 ……37
A区7号住居址 ……38
A区8号住居址 ……39
A区13号住居址 ……40
A区14号住居址 ……41
A区18号住居址 ……42
A区16号住居址 ……43
A区28号住居址 ……44
A区23号住居址 ……47
B区2号住居址 ……48
B区7号住居址 ……51
B区8号住居址 ……52
B区12号住居址 ……54
E区12号住居址 ……57
B区13号住居址 ……58
C区1号住居址 ……58
C区2号住居址 ……59
C区3号住居址 ……60
C区5号住居址 ……63
E区5号住居址 ……64
E区9・10号住居址 ……66
E区16・17号住居址 ……68
E区7号住居址 ……71
A区24号住居址 ……73
A区1号住居址 ……74
A区19号住居址 ……76
A区20号住居址 ……78
B区9号住居址 ……79
B区1号住居址 ……80
B区3号住居址 ……82
B区6号住居址 ……83
E区4号住居址 ……84
E区15号住居址 ……85
E区8号住居址 ……86
A区5・6号住居址 ……87
A区10号住居址 ……87
A区12号住居址 ……88
A区17号住居址 ……89
A区22号住居址 ……89

A区25号住居址……90
A区27号住居址……90
E区2号住居址……91
E区6・14号住居址……92
B区10号住居址……94
E区1号住居址……95
E区11号住居址……96
3 方形周溝墓 ……98
A区4号方形周溝墓 ……99
A区5号方形周溝墓 ……101
A区2号方形周溝墓 ……101
A区3号方形周溝墓 ……103
A区1号方形周溝墓 ……105
A区6号方形周溝墓 ……106
4 浅間B層下水田址 ……107
(1) 水田の地形 ……107
(2) アゼの走行と区画 ……107
(3) 水田の面積 ……107
(4) 取配水方法 ……108
(5) 足跡 ……110
(6) 出土遺物 ……110
5 掘立柱建築遺構 ……111
B区1号掘立柱建築遺構 ……111
6 溝状遺構 ……112
B区1号溝 ……112
B区2号溝 ……112
B区3号溝 ……112
C区1号溝 ……112
C区2号溝 ……112
C区3号溝 ……112
C区4号溝 ……112
C区5号溝 ……112
C区6号溝 ……112
C区7号溝 ……113
C区8号溝 ……113
D区1号溝 ……113
D区2号溝 ……113
E区1号溝 ……113
7 土坑 ……114
8 包含層の出土遺物 ……117
縄文時代の遺物 ……117
弥生時代の遺物 ……118
古墳～平安時代の遺物 ……121
中・近世の遺物 ……122

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡の位置……2
第 2 図　遺跡周辺の地形区分……3
第 3 図　周辺の遺跡分布……4
第 4 図　発掘区の配置……13
第 5 図　遺跡の基本柱状土層……14
第 6 図　A区11号住居址……16
第 7 図　A区11号住居址出土遺物……17
第 8 図　A区21号住居址出土遺物……18
第 9 図　A区21号住居址……18
第 10 図　A区15号住居址出土遺物……19
第 11 図　A区15号住居址……19
第 12 図　A区 9 号住居址……19
第 13 図　A区26号住居址……20
第 14 図　A区 9 ・26号住居址出土遺物……21
第 15 図　C区 4 号住居址出土遺物……22
第 16 図　C区 4 号住居址……22
第 17 図　C区 6 号住居址出土遺物……23
第 18 図　C区 6 号住居址……23
第 19 図　C区 8 号住居址……24
第 20 図　C区 9 号住居址……25
第 21 図　C区10号住居址……26
第 22 図　C区 8 ・ 9 ・10号住居址出土遺物……27
第 23 図　B区 4 号住居址……28
第 24 図　B区 4 号住居址出土遺物……29
第 25 図　B区11号住居址……30
第 26 図　B区11号住居址出土遺物……31
第 27 図　B区11号住居址出土遺物……32
第 28 図　C区 7 号住居址……32
第 29 図　C区 7 号住居址出土遺物……33
第 30 図　B区 5 号住居址……34
第 31 図　B区 5 号住居址出土遺物……34
第 32 図　E区 3 号住居址……35
第 33 図　E区 3 号住居址出土遺物……35
第 34 図　A区 4 号住居址……36
第 35 図　A区 4 号住居址出土遺物……37
第 36 図　A区 2 号住居址……37
第 37 図　A区 7 号住居址……38
第 38 図　A区 2 ・ 7 号住居址出土遺物……38
第 39 図　A区 8 号住居址……39
第 40 図　A区13号住居址……40
第 41 図　A区 8 ・13号住居址出土遺物……41
第 42 図　A区14号住居址……41
第 43 図　A区18号住居址……42
第 44 図　A区14・18号住居址出土遺物……42
第 45 図　A区16号住居址……43
第 46 図　A区16号住居址出土遺物……43
第 47 図　A区28号住居址……44
第 48 図　A区28号住居址出土遺物……45
第 49 図　A区28号住居址出土遺物……46
第 50 図　A区23号住居址……47
第 51 図　A区23号住居址出土遺物……47
第 52 図　B区 2 号住居址……48
第 53 図　B区 2 号住居址出土遺物……49
第 54 図　B区 2 号住居址出土遺物……50
第 55 図　B区 7 号住居址……51
第 56 図　B区 7 号住居址出土遺物……51
第 57 図　B区 8 号住居址……52
第 58 図　B区 8 号住居址出土遺物……53
第 59 図　B区12号住居址……54
第 60 図　B区12号住居址出土遺物……55
第 61 図　B区12号住居址出土遺物……56
第 62 図　E区12号住居址……57
第 63 図　E区12号住居址出土遺物……57
第 64 図　B区13号住居址……58
第 65 図　C区 1 号住居址……58
第 66 図　C区 2 号住居址……59
第 67 図　C区 3 号住居址……60
第 68 図　B区13号住居址、C区 1 ・ 2 ・ 3 号住居址出土遺物……61
第 69 図　C区 3 号住居址出土遺物……62
第 70 図　C区 5 号住居址……63
第 71 図　E区 5 号住居址……64
第 72 図　C区 5 号・E区 5 号住居址出土遺物……65
第 73 図　E区 9 号住居址出土遺物……66
第 74 図　E区 9 ・10号住居址……66
第 75 図　E区 9 ・10号住居址出土遺物……67
第 76 図　E区16・17号住居址……68
第 77 図　E区16号住居址出土遺物……69
第 78 図　E区16・17号住居址出土遺物……70
第 79 図　E区 7 号住居址……71
第 80 図　E区 7 号住居址出土遺物……71
第 81 図　A区24号住居址出土遺物……73

第 82 図　A区24号住居址……73
第 83 図　A区 1 号住居址……74
第 84 図　A区 1 号住居址出土遺物……75
第 85 図　A区19号住居址……76
第 86 図　A区19・20号住居址出土遺物……77
第 87 図　A区20号住居址……78
第 88 図　B区 9 号住居址……79
第 89 図　B区 9 号住居址出土遺物……79
第 90 図　B区 1 号住居址……80
第 91 図　B区 1 号住居址出土遺物……81
第 92 図　B区 1 号住居址出土遺物……82
第 93 図　B区 3 号住居址……82
第 94 図　B区 6 号住居址……83
第 95 図　B区 3 ・ 6 号住居址出土遺物……83
第 96 図　E区 4 号住居址……84
第 97 図　E区15号住居址……85
第 98 図　E区 4 ・15号住居址出土遺物……85
第 99 図　E区 8 号住居址出土遺物……86
第 100 図　E区 8 号住居址……86
第 101 図　A区 5 ・ 6 号住居址……87
第 102 図　A区10号住居址……87
第 103 図　A区12号住居址……88
第 104 図　A区 5 ・ 6 ・10号住居址出土遺物……88
第 105 図　A区17号住居址……89
第 106 図　A区22号住居址……89
第 107 図　A区25号住居址……90
第 108 図　A区27号住居址……90
第 109 図　A区17・22・25・27号住居址出土遺物……91
第 110 図　E区 2 号住居址……91
第 111 図　E区 6 ・14号住居址……92
第 112 図　E区 2 ・ 6 ・14号住居址出土遺物……93
第 113 図　B区10号住居址……94
第 114 図　B区10号住居址出土遺物……94
第 115 図　E区 1 号住居址出土遺物……95
第 116 図　E区 1 号住居址……95
第 117 図　E区11号住居址……96
第 118 図　E区11号住居址出土遺物……96
第 119 図　A区 4 号方形周溝墓 ……98
第 120 図　A区 4 ・ 5 号方形周溝墓出土遺物 ……99
第 121 図　A区 5 号方形周溝墓 ……100
第 122 図　A区 2 号方形周溝墓と出土遺物 ……101
第 123 図　A区 3 号方形周溝墓 ……102
第 124 図　A区 3 号方形周溝墓出土遺物 ……103
第 125 図　A区 1 号方形周溝墓 ……104
第 126 図　A区 1 号方形周溝墓出土遺物 ……105
第 127 図　A区 6 号方形周溝墓と出土遺物 ……106
第 128 図　天之宮遺跡の溜井群と浅間B層下
水田址 ……109
第 129 図　天之宮遺跡の 1 ～ 4 号溜井 ……110
第 130 図　A区浅間B層下水田址の出土遺物……折込
第 131 図　A区浅間B層下の水田址……折込
第 132 図　B区堀立柱建築遺構・3 号溝 ……111
第 133 図　B区 1 号溝、C区 1 ・ 7 ・ 8 号溝、
D区 1 号溝出土遺物……折込
第 134 図　B区 1 ・ 2 号溝、C区 1 ～ 8 号溝、
E区 1 号溝……折込
第 135 図　D区 1 号溝 ……113
第 136 図　D区 2 号溝 ……113
第 137 図　B区 1 ～ 7 号土坑 ……114
第 138 図　A区 1 ～ 6 号・B区 1 号土坑と出土
遺物……115
第 139 図　B区 2 － 7 号土坑と出土遺物 ……116
第 140 図　包含層出土遺物（縄文時代） ……117
第 141 図　包含層出土遺物（縄文時代） ……118
第 142 図　包含層出土遺物（弥生時代） ……118
第 143 図　包含層出土遺物（弥生時代） ……119
第 144 図　包含層出土遺物（弥生時代） ……120
第 145 図　包含層出土遺物（古墳～平安時代） ……121
第 146 図　包含層出土遺物（中・近世） ……122

写 真 図 版

PL 1－1 遺跡周辺の景観（後方赤城山：南より）
1－2 B区遺構検出状況（西より）
1－3 C区遺構検出状況（南より）
PL 2－1 A区11号住居址
2－2 炉周辺の遺物出土状況（№1・2）
2－3 遺物出土状況（№5）
2－4 遺物出土状況（№6）
2－5 遺物出土状況（№3）
PL 3－1 A区21号住居址
3－2 遺物出土状況（№7）
3－3 A区9号住居址
3－4 遺物出土状況（№1・3～8）
3－5 遺物出土状況（№2）
PL 4－1 A区26号住居址
4－2 堆没土層（A－A′）
4－3 遺物出土状況（№1・3・6）
4－4 C区4号住居址
4－5 遺物出土状況（№2）
PL 5－1 C区6号住居址
5－2 遺物出土状況（№1・2）
5－3 C区8号住居址
5－4 遺物出土状況（№4）
5－5 C区10号住居址
5－6 遺物出土状況
PL 6－1 B区11号住居址
6－2 遺物出土状況
6－3 遺物出土状況（№8・15・18）
6－4 遺物出土状況（№2・13・17・20）
6－5 E区3号住居址
6－6 遺物出土状況
6－7 遺物出土状況（№1・2・5・6）
6－8 遺物出土状況（№4）
PL 7－1 C区7号住居址
7－2 遺物取り上げ後の状況
7－3 遺物出土状況
7－4 遺物出土状況（№7・12・14・15）
7－5 遺物出土状況（№3・8）
PL 8－1 B区4号住居址
8－2 遺物出土状況
8－3 遺物出土状況（№4～6・12）
8－4 遺物出土状況
8－5 B区12号住居址
8－6 遺物出土状況
8－7 竈　　址
8－8 遺物出土状況
PL 9－1 A区4号住居址
9－2 遺物出土状況（№4）
9－3 A区8号住居址
9－4 遺物出土状況（№4）
9－5 A区24号住居址
9－6 遺物出土状況（№1）
PL 10－1 A区28号住居址
10－2 竈　　址
10－3 貯 蔵 穴
10－4 遺物出土状況（№5・7・12・13）
10－5 遺物出土状況（№12・13）
PL 11－1 B区2号住居址
11－2 遺物出土状況
11－3 竈址と遺物出土状況（№17）
11－4 貯蔵穴と遺物出土状況（№16）
11－5 遺物出土状況（№2・5・12）
PL 12－1 B区5号住居址
12－2 遺物出土状況（№1～4）
12－3 B区8号住居址
12－4 貯 蔵 穴
12－5 竈　　址
12－6 旧 竈 址
12－7 B区13号住居址
12－8 遺物出土状況（№1）
PL 13－1 C区1号住居址
13－2 遺物出土状況
13－3 C区2号住居址
13－4 竈　　址
13－5 C区5号住居址
13－6 竈　　址
13－7 遺物出土状況
13－8 遺物出土状況（№1）
PL 14－1・C区3号住居址
14－2 遺物出土状況
14－3 竈　　址
14－4 遺物出土状況（№8）
14－5 遺物出土状況（№1）

PL 15－1 E区5号住居址
15－2 竈址と遺物出土状況（№3・4・8・10）
15－3 遺物出土状況（№5・7）
15－4 E区10号住居址
15－5 遺物出土状況（№1・4）
PL 16－1 E区7号住居址
16－2 遺物出土状況
16－3 竈　　址
16－4 遺物出土状況（№1・4）
16－5 E区9号住居址
16－6 竈址と遺物出土状況（№12）
16－7 遺物出土状況（№1・4）
16－8 遺物出土状況（№6・8）
PL 17－1 E区16号住居址
17－2 竈址と遺物出土状況（№12・13・17・18・20）
17－3 遺物出土状況（№3・8・11・14・15）
17－4 遺物出土状況（№3・14）
17－5 遺物出土状況（№1・13）
PL 18－1 A区1号住居址
18－2 遺物出土状況（№4）
18－3 A区16号住居址
18－4 遺物出土状況
18－5 B区3号住居址
18－6 竈址と遺物出土状況（№1・2）
18－7 B区6号住居址
18－8 遺物出土状況
PL 19－1 B区1号住居址
19－2 遺物出土状況
19－3 竈址と遺物出土状況（№1・14）
19－4 B区9号住居址
19－5 遺物出土状況（№3）
PL A区5号住居址
20－2 貯蔵穴と遺物出土状況（№1）
20－3 A区22号住居址
20－4 竈　　址
20－5 A区25号住居址
20－6 竈　　址
20－7 E区1号住居址
20－8 貯蔵穴と遺物出土状況（№3）
PL 21 A区方形周溝墓群（後方横名山：東より）
PL 22－1 A区3号方形周溝墓（後方5号：東より）
22－2 主　体　部
22－3 周溝内遺物出土状況（№17）
22－4 埋没土層（A→）
22－5 埋没土層（←A′）
PL 23－1 A区4号方形周溝墓（東より）
23－2 埋没土層（B→）
23－3 埋没土層（A→）
23－4 A区5号方形周溝墓（西より）
23－5 埋没土層（A→）
23－6 埋没土層（←B′）
PL 24 A区浅間B層下の水田址（北より）
PL 25－1 A区浅間B層下の水田址
25－2 水田址と浅間Bの堆積状況
25－3 水田耕作土と浅間B
PL 26－1 水田面とアゼの状況
26－2 アゼ上の水口
26－3 水田面上の痕跡
PL 27－1 B区1号掘立柱建築遺構と3号溝
27－2 C区7号溝
27－3 D区1号溝
PL 28－1 C区1～3号溝（北より）
28－2 C区5～7号溝（南より）
28－3 C区4号溝埋没土層
PL 29－1 B区土坑検出状況
29－2 B区1号土坑
29－3 B区2号土坑
29－4 B区3号土坑
29－5 B区4号土坑
29－6 B区5号土坑
29－7 B区6号土坑
29－8 B区7号土坑
PL 30 A区11・21号住居址出土遺物
PL 31 A区9号住居址出土遺物
PL 32 A区26号住居址、C区4・6号住居址出土遺物
PL 33 C区8・10号住居址、B区4・5号住居址出土遺物
PL 33 B区4号住居址、E区3号住居址出土遺物
PL 35 B区11号住居址出土遺物
PL 36 C区7号住居址出土遺物
PL 37 A区2・4・7・8・14・18・23・24号住居址出土遺物
PL 38 A区28号住居址出土遺物
PL 39 B区2号住居址出土遺物

PL 40	B区2・7・8号住居址出土遺物
PL 41	B区10・12号住居址出土遺物
PL 42	C区3号住居址出土遺物
PL 43	E区5・7号住居址出土遺物
PL 44	E区9・10号住居址出土遺物
PL 45	E区9・12・14・16号住居址出土遺物
PL 46	E区16号住居址出土遺物
PL 47	A区1・16・19・20号住居址出土遺物
PL 48	B区1・3・6・9・号住居址、E区4・8・15号住居址出土遺物
PL 49	A区5・6・10・17・22・25号住居址、E区1・2・6・11・14号住居址出土遺物
PL 50	A区1～6号方形周溝墓出土遺物
PL 51	A区浅間B層下水田址、A区1号土坑、B区1号溝、B区4号土坑、C区1・8号溝、D区1号溝、包含層出土遺物
PL 52	包含層出土遺物

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1　調査に至る経緯

県内における圃場整備事業は、これまで急ピッチに進められてきた。これは、1975（昭和50）年度に発表された群馬県新総合計画に基づいた農用地総合整備事業の一つとして行なわれてきたものであり、1976（昭和51）年から1980（昭和52）年の5カ年間で総事業量7,050haの圃場整備事業が策定されたことによる。

前橋市荒砥南部地区における県営圃場整備事業は、1974（昭和49）年から実施され、1981（昭和56）年度で終了予定の総事業量が900haに及ぶ県下最大規模の圃場整備事業である。

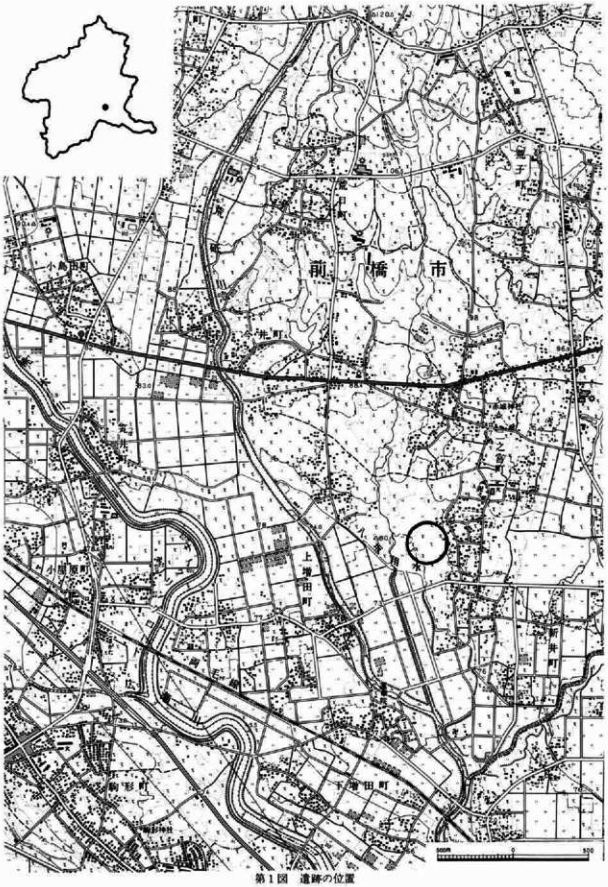
この地区は赤城山南麓末端に位置する前橋市の東部旧城南村地域であるが、考古学的には、多数のポイントを出土した石山遺跡、敷石住居址の検出された学史的に著名な笂井遺跡や、古墳時代では国指定の荒砥三・二子山古墳をはじめとする多くの古墳群が点在し、いわゆる上毛野の本拠地と目されて旧来より注目されている。1974（昭和49）年度から事業が実施されるに及んで、県農政部と県教育委員会との間で文化財保護を前提とした協議が行なわれ、埋蔵文化財の包蔵地を圃場整備事業から除外地区にすることが不可能で、かつ工事によって破壊される区域においては、事前の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は原則として、新たに計画される道水路と低・台地の切り土部分を対象とすることが合意された。

県営の圃場整備事業であるために、当初は県教育委員会が発掘調査を実施していたが、1978(昭和53)年度以降は同年7月に設立された当埋蔵文化財調査事業団が調査を担当することになった。

1980（昭和55）年度の荒砥南部圃場整備事業は、飯土井町東部および二之宮町・上増田町を中心として、約92haの広大な範囲に及ぶものであった。当該年度の発掘調査は、当事業団が担当し、全調査経費の79%を県農政部との間で委託契約を、また残りの21%を文化庁の補助金として県教育委員会との間で委託契約をそれぞれ締結した。

発掘調査された遺跡は、二之堰・島原・天之宮・宮西・洗橋の5遺跡であり、二之堰遺跡が5月7日～9月20日、島原・天之宮・宮西・洗橋の4遺跡が11月6日～翌1981（昭和56）年2月末と調査時期を相互にずらして実施された。当初の調査対象地区の面積は、二之堰・島原・天之宮・宮西遺跡を合わせて約15,000㎡であったが、事業者側の工事変更等により、破壊される包蔵地が拡大して、二之堰遺跡は15,000㎡に、また島原・天之宮・宮西遺跡は新たに洗橋遺跡を加えて35,000㎡となった。これは当初の調査計画を3倍強も上回るものであり、9カ月という短い調査期間の中で、極めて困難な調査をせざるを得なかった。

島原遺跡は実質2カ月の期間で約15,000㎡の範囲が調査され、弥生～平安時代にかけての住居址66軒、古墳時代の方形周溝墓6基、平安時代の水田址18面、時期不明の掘立柱建築遺構1棟、土坑13基、溝状遺構13条が検出された。



第１図　遺跡の位置

2　遺跡の位置と地形

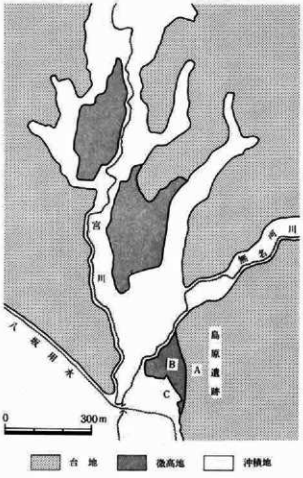
島原遺跡は群馬県前橋市二之宮町1571番地を中心に所在し、国鉄両毛線駒形駅から北東へ約2kmのところに位置する。

県北部に位置する赤城山（最高峰黒檜山：標高1,828m）は、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山である。北西麓は比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵地形であるが、南麓では浅い輻射谷と緩やかな原形面からなる広大な裾野地形となっている。南麓は、標高500m地帯で山地帯から丘陵性台地への地形変換点がみられ、200mより下位の地域は低台地化している。また、その末端は旧利根川の侵食による崖線が形成され、利根川の氾濫原によって南側の前橋台地と隔絶されている。

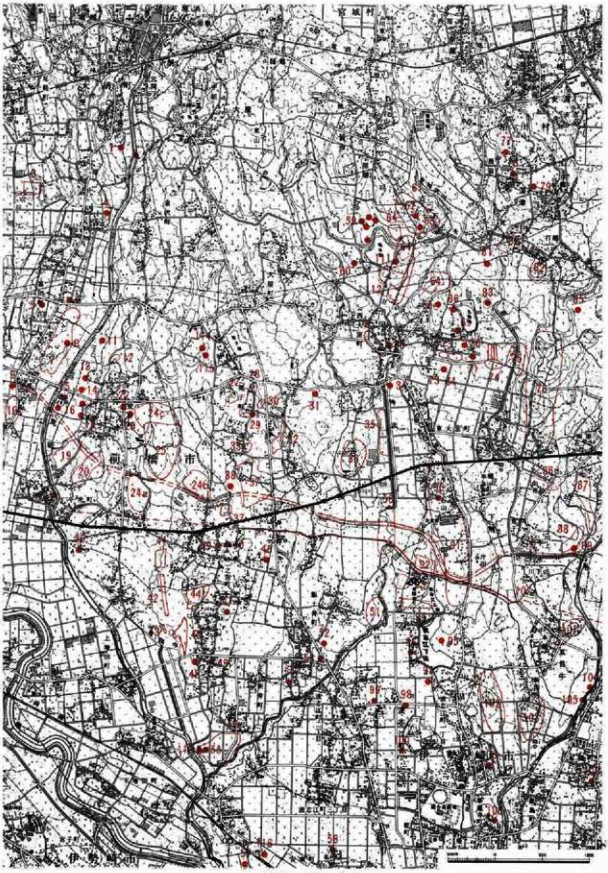
荒砥南部地域は、この赤城山南麓の端部にあたり、基盤層は赤城山起源の泥流層である。地表面はローム台地の原形面とロームの二次堆積である砂壌土性の微高地のほかは、沖積地に分類される。微高地の成因は、赤城山の山体が降雨災害などによって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速の衰える山麓端部に再堆積したものと考えられ、河川沿いのローム台地に接している場合が多い。この地帯では砂壌土下に網状の乱流層が多くみられる。このほかに風などによる侵食で移動したロームによって形成された微高地もあるが、前者との区別は難しい。また沖積地には河川流域に発達するものと湧水池下に形成されるものがある。後者は比較的小規模で現在は流水がないものが多い。侵食による河床の低下などで地下水流の変化があり、取り残された可能性もある。

島原遺跡の西側を流れる宮川は、旧利根川の第三次支川で、荒砥川に合流した後に旧利根川筋の桃ノ木川から現利根川へ流下する。現在では、水田灌漑のために中流域で「深堀」と称する用水に接続されて他地域から水補給が行なわれており、上流域の旧流路は判然としない。流路幅は2～4mで侵食谷の奥行きは約5kmであるが、中流域には両岸に1km前後の奥行きを有する小支谷を合わせており、この部分の沖積面は幅300mにも達している。また下流域左岸には奥行き2kmの小支谷があり、この谷では無名の河川を伴っている。下流域は、前述した台地・微高地・沖積地が混在し、台地はローム層の堆積している赤城山原形面であり、微高地は砂壌土の堆積によって形成されている。

島原遺跡は宮川下流左岸末端の台地（A）及びそれと接する微高地（B）と、両者に挟まれるように形成された湧水をもたない沖積地（C）に立地している。台地の標高は約80mで、宮川に面する沖積地に向って緩やかに傾斜しているが、高位部とは約2mの比高差を有している。また微高地の標高は台地よりも3m低い77mで、沖積地はそれよりも0.5mほど低い。台地・微高地では弥生～平安時代にかけての住居址・墓址などが検出され、沖積地には平安時代の水田址が検出された。



第2図　遺跡周辺の地形区分



第３図　周辺の遺跡分布

3　周辺の遺跡

(1)　縄文時代

前期初頭と中期後半から後期初頭にかけての集落址が、沖積地に面した台地上に点在している。前期の集落址は小規模なものが多く、中・後期では比較的大規模な集落址の立地が見られる。注目される遺跡としては、前期諸磯期の集落址や、中期加曽利E期から後期堀ノ内期にかけての柄鏡形住居による集落址の検出された荒砥二之堰遺跡、中期加曽利E期から堀ノ内期にかけての大集落の検出された赤堀村曲沢遺跡がある。

(2)　弥生時代

弥生時代の中期後半から初頭にかけての遺跡としては荒口前原や荒砥前原遺跡をあげることができる。これらの遺跡からは中部高地や北陸系の土器も出土している。後期に入ると遺跡数は多少増加しているが、沖積地を臨む台地の縁辺に立地する傾向はかわらない。いずれにしても現在のところ、荒砥地域においては、西毛の清里庚申塚遺跡や高崎市新保遺跡のような大規模な集落址は検出されていない。

(3)　古墳時代

古墳時代前期の遺跡は一段と増加している。出土土器の様相はバラエティ豊かで石田川系、五領系、赤井戸系、櫛描文系の土器が混在している。西大室遺跡群中の住居址や方形周溝墓からは、櫛描文土器（いわゆる樽式土器）と小型器台等の伴出が認められる。

後期の鬼高期の遺跡は、前期・中期の立地を継承する形で拡大する傾向にある。この背景には、荒砥天之宮遺跡で検出された湧水を利用した溜井の構築にみられるような新しい農耕技術の導入と、用水系の再編があったと考えられる。

首長の墓域としての古墳は、島原遺跡の周辺にも多数つくられており、『上毛古墳綜覧』においては荒砥村として356基が記載されている。おそらく、実数はこれをはるかに上回るものであろう。しかし、この地域には、前期古墳が現在まで確認されていない。この時期の墓址は、居住域と近接した立地傾向を示す方形周溝墓が多く調査されている。

赤堀茶臼山古墳と今井神社古墳は5世紀の古墳であり、被葬者はそれぞれの小地域圏の統括者と考えられる。その後、荒砥全域に古墳群が形成されている。形成時期は6世紀中頃以降が多いが、古墳群の構成内容・形成期間等で細かな相違点がみられる。

荒砥二之堰遺跡と赤堀村午伏中畑遺跡は、神沢川を挟んで立地する遺跡で、ともに鬼高期後半の居住域が墓域に変化し、後期の群集墳を形成している。土地利用の変遷を追究する上で注目される遺跡である。

古墳は、赤城山南麓の樹枝状に開析された沖積地を生産基盤として生活していた人々により形成されたと考えられるが、居住域と生産域および古墳を含めた墓域との相互の関連性の追究は、まだその途上にあるといえる。

(4)　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は各台地ごとに普遍的に立地するとともに、台地の中央部にまでその範囲を押し広げ、重複の傾向も著しいものがある。また、沖積地には浅間B軽石により埋没した水田址が、多くの地点で検出されている。

東山道が当地域内を通過しており、宮川遺跡の道路状遺構や、鶴谷遺跡および荒砥洗橋遺跡の出土遺物の中に墨書土器が多く認められることも重要な点であろう。

女堀遺跡の調査は開削時の土木技術や作業工程を復元するための多くの資料が得られただけでなく、その開削が12世紀中葉に渕名荘によって行なわれたと考えられることから、古代末期から中世にかけての政治史上に大きな問題提起をしている。

(5)　中・近世

中世の城郭址としては大室城・大室元城・今井城・赤石城・新土塚城などがあげられる。

第1表　周辺の遺跡一覧

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他	
1	大胡町5・6号墳	古墳			○	円墳	舌状台地の南端に位置する小円墳。ともに3基の竪穴式石室をもち、外部施設に葺石をもつ。
2	茂木古墓	中・近世			○		板碑の台や五輪塔、蔵骨器を出土している。
3	鄭殿山古墳	古墳			○		大泉坊川の右岸台地上に立地する。一部は既に破壊されている。鏡・刀子・櫛・金環などが出土した。
4	荒砥355号墳	古墳			○	前方後円墳	
5	大塚古墳（富田町高石）	古墳			○	前方後円墳	現在は前方部のみ残存。詳細不明。
6	荒砥347号墳	古墳			○	前方後円墳	荒砥川右岸の台地上に立地する。周辺には円墳がある。
7	富田遺跡群	弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	○ ○ ○ ○		○ ○	正法院跡	荒砥川左岸の台地上の遺跡群で、弥生後期の住居址が3軒確認されている。古墳は16基あり、うち2基は竪穴式石室であった。
8	おとうか山古墳	古墳			○	円墳	径29m。葺石が存在する。周堀は「渡り」状遺構をもち、埋土中にはFA層が確認されている。
9	少将塚古墳	古墳			○	前方後円墳	荒砥川右岸の台地上に立地する。全長50m。前方部幅15mを測る。
10	大泉坊遺跡	古墳	○				大泉坊川の左岸に立地し、石田川期の土器を出土する。
11	大道古墳	古墳			○	円墳	荒砥川左岸段丘上に存在したが消滅。両袖型横穴式石室を有していた。
12	荒砥諏訪遺跡	古墳			○	方形周溝墓	荒砥川左岸の洪積台地の西斜面に群集する。
13	荒砥諏訪西遺跡	古墳 平安 中・近世	○ ○	○ ○	○	土坑・溝 水田址 館址	荒砥川左岸の砂礫土の低台地上に立地する。
14	赤城神社遺跡	古墳	○				荒砥川左岸の洪積台地上にあり、宮田遺跡と一連の遺跡と考えられる。石田川・鬼高期の遺物を出土する。
15	権現山古墳	古墳			○	前方後円墳	全長70mで、前方部の幅40mの古墳である。
16	荒砥前田遺跡	古墳 奈・平 近世		○ ○		溝・畝状遺構・水田址 掘立柱建物	荒砥川左岸に位置する。
17	荒砥333号墳	古墳			○	円墳	直刀が出土している。
18	荒口前原遺跡	弥生 平安	○ ○				昭和44年群馬大学が調査。荒砥川左岸の台地上に位置する。弥生時代の住居址は中期後半から後期初頭の時期と考えられている。

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他	
19	荒砥北原遺跡	縄文 古墳 奈・平	○ ○ ○	○	○ ○	土坑 方形周溝墓	荒砥川左岸の洪積台地上に立地する。
20	荒砥北三本堂遺跡	先土器 縄文 弥生 古墳 奈・平 中世	○ ○ ○ ○		○	石器 土坑 円墳	
21	今井城址	中・近世				城館址	荒砥川右岸に立地し、荒砥川とその支流との間に構築されている。
22	大道古墓B	奈良			○		石槨型の火葬墓が数ヵ所に確認されている。
23	大道古墓A	奈良			○		石製蔵骨器5個を出土している。
24	荒砥大日塚遺跡群	弥生 古墳 奈良 平安 近世	○ ○ ○ ○	○		溝 土坑 水田址 井戸	
25	鶴谷遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世	○ ○ ○ ○			土坑 井戸	宮川とその支流により形成された台地上にある。住居は各時期ごとにやや立地の中心を移しながらも、石田川期から真間期、国分期に至るまで間断なく続いている。但し、真間期、国分期においては部分的に集中する傾向も認められる。
26	今井神社古墳	古墳			○	前方後円墳	全長71m。竪穴系の主体部を有すると考えられる。周辺には27基の円墳が群集している。
27	荒砥下押切遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○		○	円墳	鬼高期、真間期、国分期の住居址と主体部に横穴式石室をもつ円墳1基が存在。
28	荒砥中屋敷遺跡	古墳 平安	○ ○	○		溝 鍛冶工房 水田址	鬼高期と国分期の住居址。
29	阿久山古墳群	古墳			○	前方後円墳	小台地の西縁に沿って群集する。阿久山古墳は全長28mの小型前方後円墳で、横穴式石室を有していたと考えられる。
30	荒砥舞台西遺跡	中・近世				井戸	道路を挟んで南東に荒子の砦跡があり、当遺跡との関連性が考慮される。
31	荒子の砦遺跡	中・近世				城館址	東西80m、南北120mの単郭堡をもつ。
32	荒砥荒子遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○	○		溝・水田址	

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他	
33	荒砥中屋敷Ⅰ遺跡	古墳 近世	○				洪積台地の東側縁辺に位置する。
34	牛島古墳	古墳			○		神沢川とその支流が合流する舌状台地の先端に4基存在したが、現在は消滅している。
35	荒砥東原遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○				神沢川の右岸の微高地上に立地する。石田川期～国分期の住居址と、遺跡の西端から神沢川の旧流路が確認された。
36	天神山古墳群	古墳			○		独立丘陵上に円墳を主体として60基以上が群集していたが、現在はほとんど消滅。
37	荒砥上ノ坊遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世	○ ○ ○ ○ ○	○	○	方形周溝墓 堀	宮川の支流により形成された2つの洪積台地に広がっている。
38	新屋遺跡	古墳	○				石田川期の住居址が1軒検出されている。
39	塔心礎址	中・近世				石造物塔址	赤城神社境内にある。周辺の畑からは布目瓦片が出土している。
40	宮本古墳	古墳			○	方墳	台地の縁辺に構築されていたと考えられるが、現在は水田中にある。一辺30mで高さ7m。
41	荒砥洗橋遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○			掘立柱建物址・井戸	宮川右岸に位置し、両側を沖積地にはさまれた低台地上に立地する。鬼高期から真間期、国分期の住居址等を検出している。周辺の沖積地には浅間B軽石の堆積が確認され、その直下に水田耕作面上がある。
42	宮川遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○	○ ○	○	畠・円墳 水田址	宮川左岸の微高地上に立地している。石田川期、鬼高期、真間期、国分期の住居址と円墳および浅間B軽石下の水田址を検出している。
43	宮原遺跡	古墳	○		○	円墳	宮川右岸の洪積台地上に立地。石田川期の住居址と円墳4基を確認した。
44	荒砥天之宮遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○	○		水田・溜井	宮川の左岸、島原遺跡の北方に近接する。鬼高期に出現する住居址は台地一面にひろがる。西縁辺には溜井が構築されており隣接した沖積地には浅間B層下に水田址を検出している。
45	荒砥島原遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中・近世	○ ○ ○ ○	○	○	土器・石器 方形周溝墓 水田址 土器片	本報告の遺跡
46	つくば山古墳				○	下方上円墳	
47	青柳遺跡	奈・平	○			溝・土坑・井戸	島原遺跡の立地する台地の東縁辺に位置する。二之宮小学校内でも遺跡の存在が確認されている。

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他	
48	地獄塚	古墳			○		宮川の左岸台地上にある。大正14年に発掘された。
49	荒砥291号墳	古墳			○	円墳	径15m、高さ3mの円墳。周辺には10数基が存在していたと考えられている。
50	二本松遺跡	縄文 古墳 奈・平	○ ○ ○			掘立柱建物	神沢川右岸の自然堤防状の微高地上に立地する。住居址は平安時代のものが84軒検出されている。
51	二之塚遺跡	縄文 古墳	○ ○			土坑 ○ 方形周溝墓	縄文は諸磯・加曽利E・称名寺II期の住居址と土坑であり、称名寺期の住居址は全て納鍵形を呈している。その他に石田川・鬼高期の住居址、方形周溝墓群もある。古墳は後期の群集墳である。
52	城山遺跡	中・近世				城館址	
53	赤石城跡	中・近世				城館址	高さ4mの土居を周した本丸と、西側に鍵曲輪をもっていた。
54	ツボロ山古墳	古墳			○	円墳	神沢川右岸の舌状台地の先端に位置する。径8mの円墳。
55	柳塚	古墳			○		荒砥川左岸の台地縁辺に位置する。規模は径40m、高さ6mである。
56	荒砥前原遺跡	縄文 弥生 古墳 奈・平	○ ○ ○ ○		○	土坑 円墳	荒砥川と神沢川の合流点にあたる舌状台地の先端部に位置する。遺構は神沢川に面する縁辺部に多く確認されたが、台地全面にひろがるものと考えられる。十王台式土器を出土する住居址がある。台地南端部からは多量の手づくね土器が出土している。
57	西太田遺跡	弥生 古墳 奈・平 近世	○ ○ ○			砂鉄・粘土 集積遺構 井戸	荒砥川左岸段丘上に位置する。弥生中期・後期、和泉期には小規模の集落であったが、鬼高期に拡大し真間・国分期へと続く遺跡である。お富士山古墳と近接する。
58	中根遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○		○	方形周溝墓	荒砥川左岸の平坦面上の微高地に立地する。石田川期の方形周溝墓が検出されており、遺跡は南北に広がると思われる。
59	西大室遺跡群 荒砥村68号墳 荒砥村70号墳 荒砥村72号墳 七ツ石1号墳 七ツ石2号墳	 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳			 ○ ○ ○ ○ ○		乾谷沼の北側、台地の南斜面にある。68号墳は径34mの円墳。前庭状遺構をもつ横穴式石室である。70号墳・72号墳の主体部も横穴式石室であるが側張りがある。さらに72号墳には玄門の施設が認められる。七ツ石2号墳は箱式石棺状の石室を主体部にもっていた。
60	雷電山古墳 (92号)	古墳			○	円墳	神沢川左岸の台地上、西側斜面に立地する。主体部は横穴式石室。周辺に5基程の古墳があったが全て消滅。
61	西大室遺跡群 上縄引遺跡	縄文 古墳 平安	○ ○			集石 ○ 方形周溝墓 ・円墳	神沢川右岸の台地上の東側斜面に立地し、遺構はこの部分に集中している。縄文時代の住居址は諸磯b式の時期にあたる。
62	荒砥村64号墳	古墳			○		周堀外周径56m。埴輪を伴っている。

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構					遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他		
63	荒砥村62号墳	古墳			○			神沢川右岸、標高150mの洪積台地の中央部に位置する。周堀外周径55m。埴輪を伴っている。
64	西大室遺跡群	弥生	○					神沢川により形成された沖積地と、乾谷沼に続く沖積地に挟まれた洪積台地上の遺跡。標高は120～140mにあたる。弥生～古墳時代初頭の土器を出土する住居址は縁辺部に集中。
		古墳	○		○		方形周溝墓	
		奈良	○					
		平安	○					
		中世			○			
65	後二子付小古墳	古墳			○		前方後円墳	全長30mの小型古墳である。
66	後二子古墳	古墳			○		前方後円墳	全長76m。両袖型横穴式石室を有する。
67	大室城跡	中・近世					城館址	現在、大室神社が鎮座する。本丸、二の丸、ささ曲輪などの遺構があった。
68	伊勢山古墳群	古墳			○			前方後円墳である伊勢山古墳は全長90m。主体部には長さ4.8mの横穴式石室を有しており、周辺には10数基の円墳が群集していた。
69	中二子古墳	古墳			○		前方後円墳	全長65mで周堀を有し、一部は二重になっている。
70	前二子古墳	古墳			○		前方後円墳	全長71m。袖無型横穴式石室を有する。桂川と神沢川にはさまれた台地上に立地し、周辺には中・後二子ほか10数基が集中する。
71	西大室遺跡群	古墳	○					桂川右岸の台地上に立地し、数地点に分かれる。
		平安	○					
72	荒砥上諏訪遺跡	縄文	○					樹枝状に開析された地形を東西に調査しており、遺構は台地上に立地。実際は数遺跡に区分されるものと思われる。荒砥54号墳の周堀と諸磯期、鬼高期の住居址も確認されている。
		古墳	○		○			
		平安	○					
		中・近世					土壇・溝・掘立柱建物	
73	大室小学校校庭遺跡	古墳	○					昭和27年、群馬大学で調査。石田川・真間・国分期の住居址4軒を検出。地形的には、周辺に遺跡はひろがっていると考えられる。
		奈良	○					
		平安	○					
74	荒砥五反田遺跡	古墳	○					荒砥上諏訪遺跡と隣接する。石田川期、鬼高期、真間期、国分期の住居址が検出されている。
		平安	○					
75	荒砥上川久保遺跡	縄文					配石・土壇	桂川右岸の台地上にある。住居址は200軒にも及ぶ、赤井戸式土器を出土する住居址も検出されている。
		弥生	○					
		古墳	○		○		方形周溝墓	
		平安	○					
76	多田山古墳群と骨壺群	古墳			○			多田山の東斜面に立地する。古墳は切石の石棺を用いていた。この南からは12基の蔵骨器が発見された。
		奈・平			○			
77	聖天古墳	古墳			○			柏川村58号は径14m、59号墳は径19mである。
78	福荷山古墳	古墳			○		円墳	径10m。石室については不詳。柏川村60号墳。
79	堀ノ内・坂田城跡	中・近世					城館址	深津城跡とも呼ばれ、堀の一部が残存している。

地域上の番号	遺跡名	時期	遺構				遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他	
80	丸山古墳	古墳			○	円墳	径40m。柏川村第63号墳
81	丸塚古墳	古墳			○	円墳	径10m。柱川の右岸台地上に立地する。
82	高山古墳群	古墳			○	前方後円墳・円墳	群馬大学により、数基の調査が行なわれている。円墳が主体で、A号墳は横無の横穴式石室をもつ前方後円墳。
83	反料山古墳	古墳			○		三二子古墳の北東の小丘陵上に立地する。
84	大室小学校農場遺跡	古墳	○				小学校校庭遺跡と一連の遺跡と考えられる。
85	赤堀茶臼山古墳	古墳			○	前方後円墳	多田山丘陵の北方、同一台地上につくられており、東側に沖積地を隔む。全長59m。軌立貝式で竪穴式石室を有する。
86	向井上師遺跡	古墳 平安	○ ○			掘立柱建物	鬼高期、国分期の竪穴住居を検出。平安時代の大規模な掘り方をもつ掘立柱建物址群が調査されている。
87	今井南原遺跡	縄文 古墳 平安	○ ○ ○		○	掘立柱建物址・土壙	柏川の右岸に立地し、川上遺跡と近接する。縄文時代諸磯期、石田川期、鬼高期の竪穴住居址。土壙は石田川期、国分期のものがあり、平安時代のものは馬の埋葬址である。
88	川上遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○			掘立柱建物址(寺院址)	石田川期、鬼高期、国分期の住居址。国分寺系の礎石を含む柱穴列は布目瓦を伴っている。
89	稲荷廃寺跡	平安				寺院址	昭和45年群馬大学で調査。布目瓦、瓦塔、礎石を検出した。
90	石山遺跡	先土器	○		○		相沢忠洋氏により調査がおこなわれ、百余点の尖頭器を初めとして多数の遺物を出土している。
91	片田山古墳群	古墳			○	前方後円墳・円墳	赤城山残丘上全体に分布する。現存するものは少ない。祝堂古墳は角閃石安山岩使用の横穴式石室を有した大円墳であるが、これらや牛状1号墳等もこの古墳群中に含まれる。
92	牛伏中畑遺跡	縄文 古墳	○ ○		○	石器 土壙 円・方墳	
93	宮貝戸古墳群	古墳			○		牛伏中畑遺跡の南方、同一台地上にある。古墳群の形成時期から考えると牛伏中畑遺跡の古墳群と同一グループに入ると思われる。
94	今宮遺跡	縄文 古墳 奈良	 ○		○	土壙 円墳	神沢川左岸の牛伏古墳群や宮貝戸古墳群と同じ台地上に立地。
95	大沼上遺跡	不明	○				1軒検出されている。
96	宮貝戸下遺跡	奈良	○				神沢川右岸の台地西縁辺に立地。住居址1軒を検出。
97	大沼下遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○			溝 井戸	波志江沼の西側、大沼上遺跡と同じ台地に立地する。石田川期、真間・国分期の集落である。

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

地図上の番号	遺跡名	時期	遺構					遺跡の概要
			住居址	生産址	墓址	その他		
98	関屋敷遺跡	中世				城館址		東西、南北ともに150m、四周の堀と北部の土居が残っている。
99	中屋敷遺跡	中世				城館址		東西100m、南北130mの範囲をもつ。
100	西稲岡遺跡	古墳				溝		和泉期の溝である。
101	岡山遺跡	縄文 古墳	○ ○					柏川右岸の赤城山の残存丘陵上にあり、縄文早・前・中期の住居址と土坑が調査される。古墳は北側をのぞく斜面に分布。絵覧には17基の円墳が記載されている。
102	蟹沼東古墳群	縄文 弥生 古墳	○ ○ ○			○	方形周溝墓 円墳	間之山、大穴の台地上に位置し、地蔵山古墳と沖積地をはさんで対峙する。横穴式石室を有する円墳が主体となり、50基以上が群集する。 縄文・弥生・石田川期の住居址も検出されている。
103	地蔵山古墳群	縄文 古墳	○ ○			○		赤城山の残存丘陵上にあり地蔵山・栗手塚古墳をはじめ5～8世紀に至る古墳55基が群集する。沖積地を挟み、西側の台地上には蟹沼東古墳が位置する。
104	阿弥陀面遺跡	中近世	○					蔵骨器、板碑が出土
105	本関町古墳群	古墳				○	円墳	柏川村左岸に位置し、絵覧によると円墳を主体として多数が集中している。
106	台所山古墳群	古墳				○		柏川の右岸、華蔵寺北方の台地上に立地する。
107	推定東山道							旧町村域、現況の地割、航空写真、地籍図等から推定したもので、金坂清則氏の所見より地図上に復元した。
108	御獄山古墳	古墳				○	円墳	
109	上植木廃寺跡	奈良					寺院址	7世紀中～後半の創建と推定され、榆前郡君と深い関係にあった寺院と考えられている。山田系、上野国分寺系の瓦を出土する。
110	女堀	平安					用水堀遺構	前橋市上泉町付近の旧利根川を取水点として終点の東村国定まで幅15～20m、深さ3～7mで標高95mの等高線に沿って開削されている。昭和55年の当事業団による調査をはじめとして数地点で調査がおこなわれ、未完成であったことが判明した。
111	鹿登塚古墳 (49号)	古墳				○	円墳	群馬大学が調査。径11m。主体部は竪穴式石室で、全長175cmである。
112	大室元城跡	中・近世					城館址	大室城址の北西500m、台地の南端に位置する。明治時代まで単郭の遺構が残っていた。前橋市教育委員会によって調査された。
113	新土塚城跡	中・近世					城館址	宮川の左岸台地上に位置する。東西150m、南北200mの規模で本丸、二の丸、三の丸が存在した。
114	中鶴谷古墳B	古墳				○		
115	中鶴谷古墳A	古墳				○	馬蹄型古墳	
116	お富士山古墳 (伊勢崎市)	古墳				○	前方後円墳	全長180m。現在、後円頂部に長持形石棺がおかれている。葺石、埴輪列があり、石製模造品も出土している。

4 調査の方法

圃場整備事業における発掘調査は、一地域における相互に関連する遺跡群の悉皆的調査となることから、調査を開始するにあたり、まず確固とした基本方針の策定に入った。

島原遺跡の立地する赤城山南麓は、樹枝状に延びる開析谷が発達しており、平安時代の埋没水田も確認されている。またそれに隣接する台地、微高地上には、多くの古代集落址が立地している。こうした地域の特性を踏えて、調査のメインテーマとして、農業発達史的視点のもとに集落址の変遷と農耕地との関連性の追究を据えた。この分析を可能にするために、次の３つの方針が決定された。

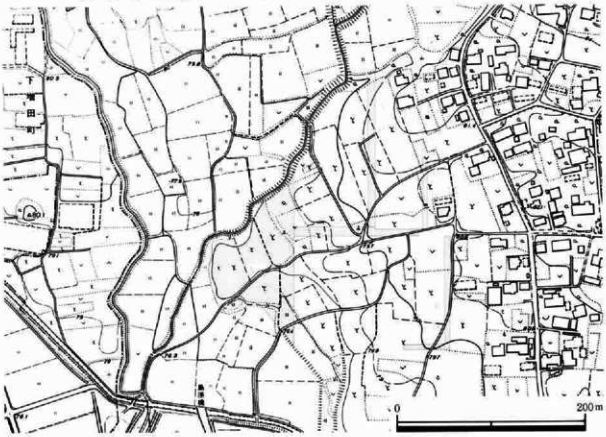
①詳細な遺跡分布調査を実施し、各遺跡のうちで道水路および切り土工事によって破壊・消滅する部分の全てを発掘調査する。

②居住域および農耕適地を把握するために、分布調査と合わせて宮川下流域の沖積地内にテストピットを配置し、堆積土層の観察から詳細な地形区分を行なう。

③旧地割りや水系などの記録および地域住民を対象とした農耕に関する伝統や、慣行などの聞き取り調査を実施する。

その結果、台地・微高地上は居住域であり、沖積地内には浅間Ｂ層の検出とともに、水田址の存在が想定された。こうした所見を踏えて、島原遺跡では道水路と切り土部分に幅１ｍのトレンチを適宜配置したところ、ほぼその全域から遺構の検出を見た。このため、調査対象地区全域における遺構確認面までの排土を、掘削重機により行なうことにした。

発掘調査は、切り土となる台地西側をＡ区とし、相互に交差する道水路部分については、Ｂ～Ｅの発掘区を設定した。各発掘区の位置関係を把握するために、工事用ベンチマークを基本として６×６ｍの方眼を全区域に設定した。また今後の発掘調査に備えて、この方眼の位置を国家座標上にプロットした。



第４図　発掘区の配置

5　遺跡の基本層序

A～E区にわたる発掘区は、A区の北半が微高地と台地で、南半が沖積地となり、B～E区が台地として地形区分される。以下、各地形区分ごとの堆積土層の説明を加える。

台　地　現在の地目が桑園となっているために土壌攪乱がかなり下位まで及び、各発掘区内でも堆積状態は一様でない。状態の良好なC区で観察すると下記のような堆積土層となる。

Ⅰ層：現在の耕作土で黒褐色を呈する。天明3（1783）年と天仁元（1108）年の浅間山爆発によって降下した浅間A・B軽石を含む。約40～50cmの厚さで堆積している。

Ⅱ層：浅間Bの純層。1部で堆積が確認されているが、大半はⅠ層に鋤込まれている。遺存良好な地点で5～10cmの堆積が確認された。

Ⅲ層：黒色土層。少量の浅間C（4世紀中葉の浅間山爆発による降下軽石）を含む。20～30cmの厚さで堆積している。

Ⅳ層：黄褐色のローム層。若干くすんだ色調を帯びる。上面が遺構の確認面である。

微高地　現在の地目は台地と同様の桑園であるため土壌攪乱が著しく、確認し得た土層はⅠ～Ⅲ層のみである。

Ⅰ層：黒褐色土層。現在の耕作土で、浅間A・Bを含む。約50cmの厚さで堆積している。

Ⅱ層：灰褐色砂質土層。約60cmの厚さで堆積している。上面が遺構の確認面である。

Ⅲ層：灰白色粘質土層。シルト質の土で粘性をもつ。

沖積地　現在の地目は水田となっている。全体的に堆積土層の保存状態が良好であった。地表より1m下位に水田址が検出されている。

Ⅰ層：黒褐色土層。現在の水田の耕作土で、浅間Aを含む。約50cmの厚さで堆積している。

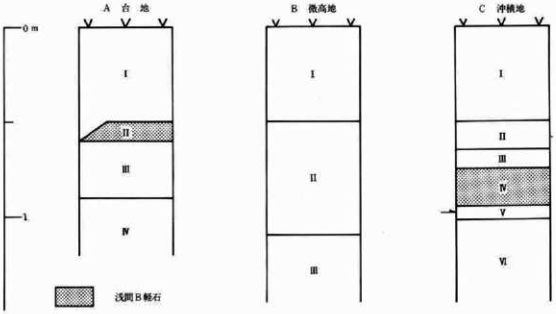
Ⅱ層：茶褐色土層。水田耕作による鉄分・マンガンの沈積層である。約15cmの厚さで堆積している。

Ⅲ層：黒色土層。粘性に乏しい砂質の土である。約10cmの厚さで堆積している。

Ⅳ層：浅間Bの純層。約10～20cmの厚さで堆積する。

Ⅴ層：黒色粘質土層。粘性を帯びた土で、水田址の耕作土である。7～10cmの厚さで堆積している。

Ⅵ層：灰褐色土層。やや粘性を帯び、全体的に鉄分の沈積が認められる。



第5図　遺跡の基本柱状土層

II　調査の内容

1　調査された遺構

島原遺跡では、道水路および切り土工事部分を含めた約15,000m²の範囲が発掘調査の対象となった。発掘調査によって検出された遺構は、弥生時代から平安時代にかけての住居址と平安時代の水田址、および時期不明の掘立柱建築遺構・溝状遺構・土坑など多岐にわたっている。島原遺跡を含め、1980（昭和55）年度の荒砥南部圃場整備事業にかかわる遺跡群調査の中で注目されるのは、弥生時代から平安時代にかけての集落の中における居住域と生産域、およびその相互の関連が想定あるいは確認できたことである。

弥生時代　微高地と台地にわずか２軒ではあるが、住居址が検出された。時期的には弥生時代の中でも中期後半に位置付けられる。他の遺構は検出されていないが、水田址等の生産域が当遺跡西側の宮川沿いの沖積地内に想定される。

古墳時代　前期と後期の２つに大別されるが、前期では居住域と墓域とが確認されている。前期の住居址は13軒で、他に方形周溝墓が６基と土坑が１基検出された。後期は住居址が26軒検出されている。生産域については、前期は弥生時代と同様、宮川沿いの沖積地が想定されるが、後期では平安時代の水田址が検出された地点においても、出土土器等から水田址の存在したことが想定できる。

奈良・平安時代　奈良時代の遺構は、住居址が11軒検出された他は存在していない。平安時代では13軒の住居址と、浅間Ｂ層下の水田址が約850m²にわたって検出された。水田址からは奈良時代の土器片も出土しており、奈良時代においても水田として使用されていた可能性がうかがえる。

時期不明　明確な伴出遺物がないために時期の決定できない遺構として、住居址１軒、掘立柱建築遺構１棟と柱穴群、溝状遺構14条、土坑13基がある。溝状遺構の中には、規模や走行方位などから相互に何らかの関係をもつ可能性があるものも見うけられる。また土坑についても、その分布状態から相互の関連を想定できるものがある。

2　住　居　址

検出された住居址は66軒で、Ａ区からＥ区の発掘区にまたがって分布している。

これらの住居址の時期の内訳は、弥生時代中期後半（竜見町期）のものが２軒、古墳時代前期のものが13軒（石田川期８軒＋和泉期５軒）、同後期（鬼高期）のものが26軒、奈良時代（真間期）のものが11軒、平安時代（国分期）のものが13軒、時期不明のものが１軒の計66軒となる。

また66軒の住居址の立地を地形区分別に見ると、沖積地には全く存在せず、微高地内にわずか３軒、他の63軒の全てが台地上に立地している。このうち、古墳時代鬼高期や、奈良・平安時代の住居址は発掘区のほぼ全域に認められるが、弥生時代の住居址は、沖積地により近接したＡ区の台地・微高地に立地し、古墳時代石田川期のものも比較的沖積地に近接して集中した分布となる傾向を見せている。

出土遺物は、壺・甕・甑・坏・高坏などの土器を中心として、紡錘車・砥石・滑石製模造品などの石製品の他に、馬具などの鉄製品が見られる。

住居内からの出土土器の総量は、60×37×15cmの遺物収納箱に50箱分であるが、その内資料化されて本文中に掲載されたものは約400個体である。

A区11号住居址

位　置　Q－6　　**写　真**　PL2－1～5、30

形　状　長軸を東西にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は若干の膨らみをもち、長辺7.0×短辺5.3mを測る。西壁は上層からの攪乱によって検出できなかった。

面　積　37.88m²　　**方　位**　N－36°－E

床　面　砂壌土を12～28cm掘り込んで床面としている。若干踏み固められているが、特に堅い面はない。中央の炉の周辺がやや低くなる。

柱　穴　炉の周辺に深さ8～17cmの小穴を5個検出したが、柱穴と断定できるものはなかった。

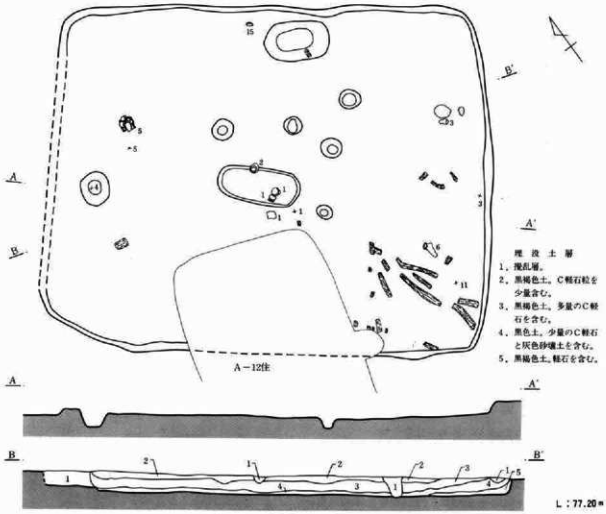
炉　址　住居のほぼ中央に位置している。隅の丸い長方形を呈し、長辺130×短辺55cmで深さ7cmを測る。焼土はわずかに見られる程度である。

貯蔵穴　西壁のほぼ中央に近接して存在する。長径53×短径45cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。

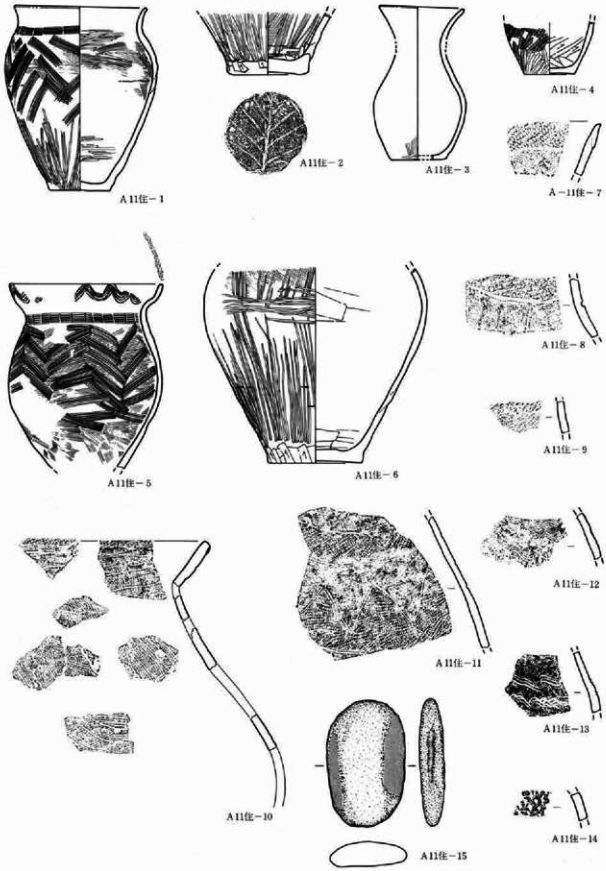
遺　物　炉および貯蔵穴の内部や周辺から多数の土器が出土した。2～5・7の土器は、床面に密着していたものであり、3は押しつぶされた状態でまとまって出土した。15の自然石も床面密着の遺物で、両側面が磨滅している。他の土器は埋土中から出土したものである。東半分の床面上には多数の炭化材が検出されており、このことから本住居址は焼失家屋であったと考えられる。(土器観察表：1・2頁)

重　複　南側を12号住居址によって切られている。

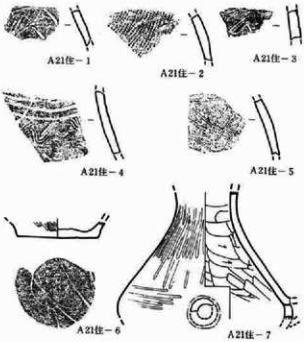
備　考　周溝は検出されなかった。



第6図　A区11号住居址



第7図　A区11号住居址出土遺物



第8図　A区21号住居址出土遺物

A区21号住居址

位　置　C′－15　　**写　真**　PL3－1～2、30

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。長辺7.4×短辺5.3mを測る。

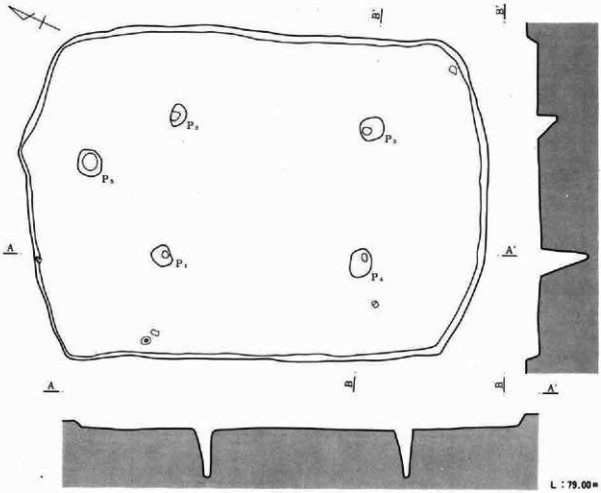
面　積　35.98㎡　　**方　位**　N－65°－E

床　面　砂壌土を9～21cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、中央部がやや低くなる。

柱　穴　住居の対角線上に4個、北壁に接して1個の計5個が検出された。P_1～P_4の柱穴心々間の距離は3.2×2.2mである。各柱穴の深さは、P_1：74cm、P_2：56cm、P_3：62cm、P_4：75cm、P_5：19cmを測る。

遺　物　7の壺は床面に密着していたが、他は埋土中から出土したものである。（土器観察表：2頁）

備　考　炉・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。また埋土中から浅間Cの純層は検出されなかった。



第9図　A区21号住居址

A 区 15 号 住 居 址

位　置　H′—18

形　状　北壁の遺存が悪いために不明確であるが、長軸を東西にもった長方形を呈し長辺4.3×短辺3.6mを測ると思われる。

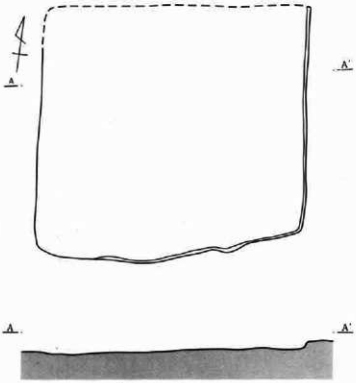
面　積　16.65m²　　**方　位**　N—11′—W

床　面　ローム土を3～13cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はない。

遺　物　土器は1の1点のみで、埋土中から出土したものである。他の遺物は検出されなかった。　　（土器観察表：2頁）

備　考　上層からの攪乱によって住居の遺存状況が悪いため、柱穴や炉は検出できなかった。

第10図　A区15号住居址出土遺物



第11図　A区15号住居址　　L：79.00m

A 区 9 号 住 居 址

位　置　Y—17　　**写　真**　PL3－3～5、31

形　状　やや歪んでいるが、正方形に近い形状を呈する。長辺3.2×短辺3.1mを測る。

面　積　9.41m²　　**方　位**　N—90°—W

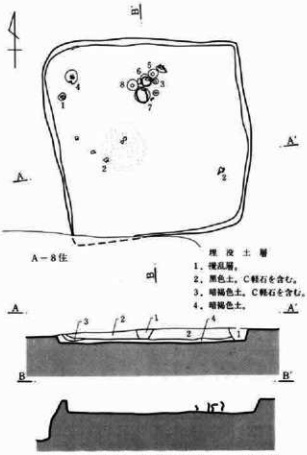
床　面　ローム土を11～20cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、中央がやや低くなる。

炉　址　中央よりやや西側に位置している。直径70cmの円形を呈し、深さ5cmの掘り込みをもつ。

遺　物　ほぼ完形の8個体の土器が出土した。このうち1～5の土器は、中央よりやや北側に口縁を下にして床にふせられた状態で一括出土した。またその東隣には東壁に接するように6・7の土器が出土し、やや距離を置いて西壁近くに8が出土した。8を除いて他の土器は、1～10cm前後床面より浮き上っていた。　　（土器観察表：2・3頁）

重　複　南側を8号住居址に切られている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。住居の埋没土は浅間Cを多量に含んでいるが、純層としては確認できなかった。



第12図　A区9号住居址　　L：79.10m

A 区 26 号 住 居 址

位　置　Z－15　　**写　真**　PL4－1～3、32

形　状　1辺が6.6mで、隅の丸い正方形を呈する。壁はほぼ直線的である。

面　積　42.32m²　　**方　位**　N－84°－E

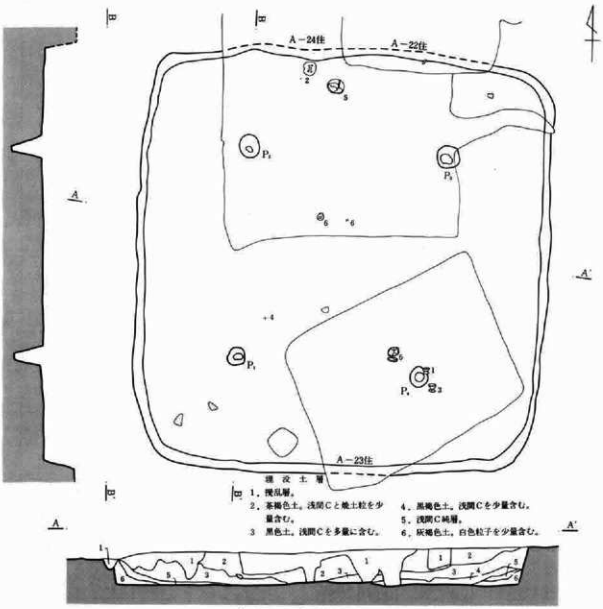
床　面　ローム土を40～55cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、西側がやや低くなる。

柱　穴　住居の対角線上に4個を配する。心々間を結んだ距離は、3.4×3.1mで南北に長軸をもつ。各柱穴の深さはP_1：42cm、P_2：48cm、P_3：44cm、P_4：41cmを測る。

遺　物　4・5・7の土器が床面より3cmほど浮いた状態で出土し、7は径6mmの棒状の鉄製品で埋土中より出土した。また南壁に近接して直径40cmの灰白色粘土塊が検出された。(土器観察表：3・4頁)

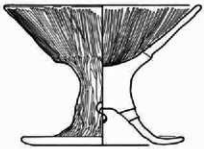
重　複　北側を22・24号住居址に、南側を23号住居址によってそれぞれ切られている。

備　考　埋没土層中より浅間Cの純層（5層）が検出されたが、その直下に灰褐色土の堆積がみられることから、浅間Cは住居が廃絶された後に、若干の時間経過を待って降下したものと考えられる。炉・周溝・貯蔵穴は検出されなかった。

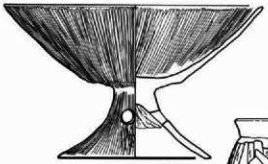


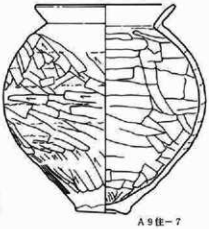
第13図　A区26号住居址

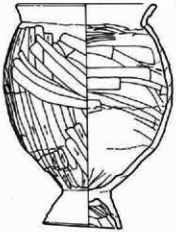
A 9住－1

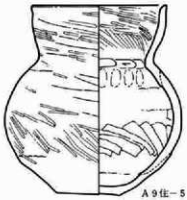

A 9住－2

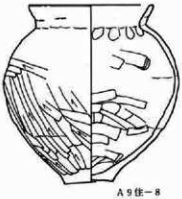
A 9住－3

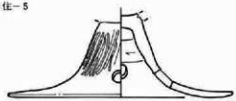

A 9住－4


A 9住－7

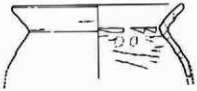

A 9住－6


A 9住－5


A 9住－8


A26住－2

A26住－1


A26住－4

A26住－3

A26住－6

A26住－7

A26住－5

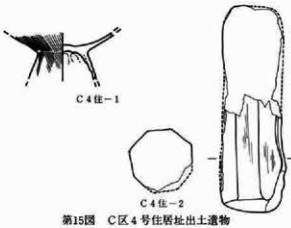
第14図　A区9・26号住居址出土遺物

C 区 4 号住居址

位　置　Q′−32　　**写　真**　PL 4 − 4 〜5，32

形　状　1辺が5.0mの隅の丸い正方形を呈するが、南北辺が約10cmほど長い。壁はやや膨らみをもつ。

面　積　24.81m²　　**方　位**　N−81°−E



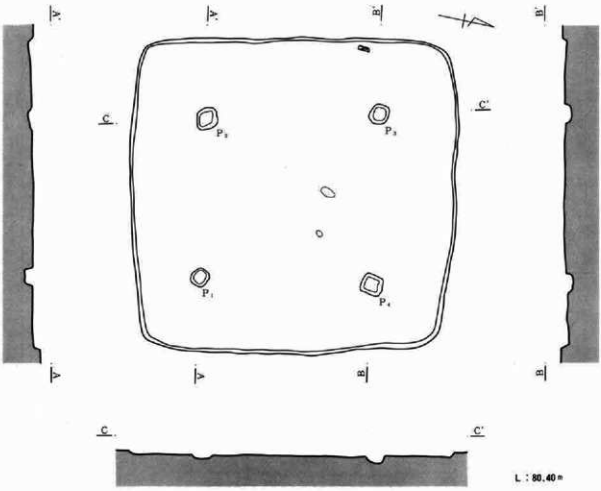
第15図　C区4号住居址出土遺物

床　面　ローム土を5〜14cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、北東側がやや低くなる。

柱　穴　住居の対角線上に4個を配している。心々間を結んだ距離は、2.8×2.7mで、南北に長軸をもつ。各柱穴の深さは、P_1：12cm、P_2：5cm、P_3：13cm、P_4：8cmを測る。

遺　物　2の砥石は頁岩製で、8面が使用されている。各砥面の中央部は若干窪んでいる。小口面には形どりのための擦痕が認められる。全体的に風化が激しく、砥面の半分が剝落している。ほぼ床面に密着した状態で出土した。1の台付甕は埋土中から出土したものである。このほかに、住居中央部において長径20×短径10cmの河原石が床面に密着して出土した。　　（土器観察表：4頁）

備　考　炉を想定させるような焼土痕は検出されなかった。周溝は存在しない。



第16図　C区4号住居址

C 区 6 号住居址

位 置 P′−31　　**写 真** PL 5 − 1〜2、32

形 状 長軸を東西にもち、隅が直角の長方形を呈する。壁は若干の膨らみをもち長辺5.4×短辺4.5mを測る。

面 積 23.19m²　　**方 位** N − 2°− E

床 面 ローム土を7〜23cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はなく、西に向って緩やかに傾斜している。

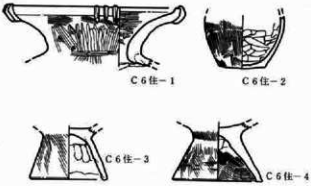
柱 穴 住居の対角線上に3個検出されたが、もう1個は7号溝によって切られて検出されていない。各柱穴の深さは、P_1：19cm、P_2：20cm、P_3：36cmで心々間の距離は3.3×2.2mである。

周 溝 西壁沿いで途切れて完全に一周していない。規模は幅12〜20cm、深さ4〜6cmを測る。

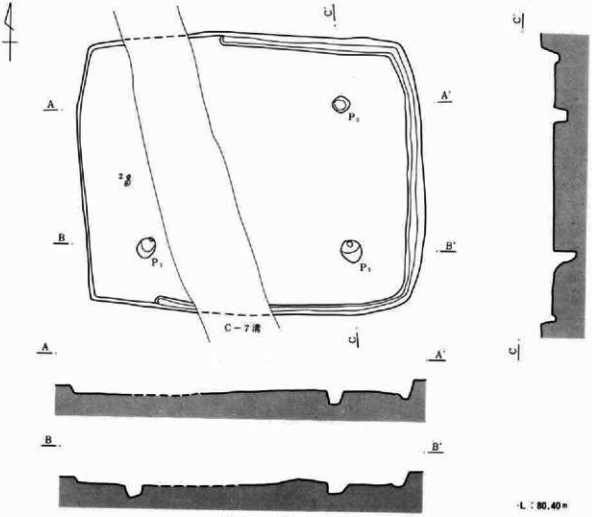
遺 物 1〜4の土器はいずれも埋土中から出土したものである。　　(土器観察表：4・5頁)

重 複 7号溝によって南北に切られている。

備 考 炉と想定される痕跡は認められなかった。



第17図　C区6号住居址出土遺物



第18図　C区6号住居址

C区8号住居址

位　置　J'−31　　**写　真**　PL5−3〜4、33

形　状　一辺5.5mの隅の丸い正方形を呈する。壁はやや膨みをもつ。

面　積　28.46m²　　**方　位**　N−17°−E

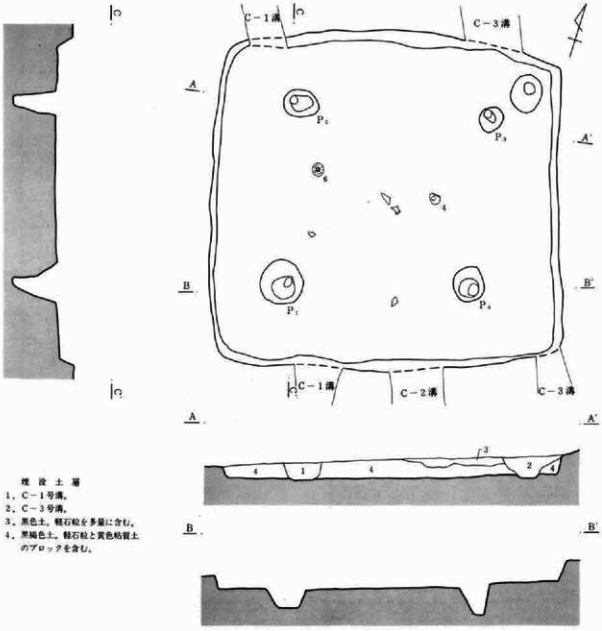
床　面　ローム土を18〜42cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はない。

柱　穴　住居の対角線上に4個検出された。柱穴心々間の距離は、各間とも約3mである。各柱穴の深さはP_1：70cm、P_2：68cm、P_3：74cm、P_4：47cmで、いずれも深く掘り込まれている。

貯蔵穴　北東隅に位置する。長径60×短径50cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。

遺　物　6の高坏が床面よりわずかに浮いていた他は、全て埋土中からの出土である。6は脚部が欠損しているが坏部は完形で、口縁を下にして逆位に出土した。　　（土器観察表：5頁）

備　考　炉と想定される焼土の痕跡は認められず、また周溝も検出されなかった。埋土中からは浅間Cの純層は検出されていない。



埋設土層
1、C−1号溝。
2、C−3号溝。
3、黒色土。軽石粒を多量に含む。
4、黒褐色土。軽石粒と黄色粘質土のブロックを含む。

第19図　C区8号住居址

C 区 9 号住居址

位　置　H′−31

形　状　南側を8号溝によって切られているために不明確ではあるが、長軸を南北にもち、隅が直角の長方形を呈するものと考えられる。長辺4.6×短辺3.5mを測る。

面　積　17.7m²　　**方　位**　N−83°−E

床　面　ローム土を10〜20cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はなく、ほぼ平坦な床面となる。

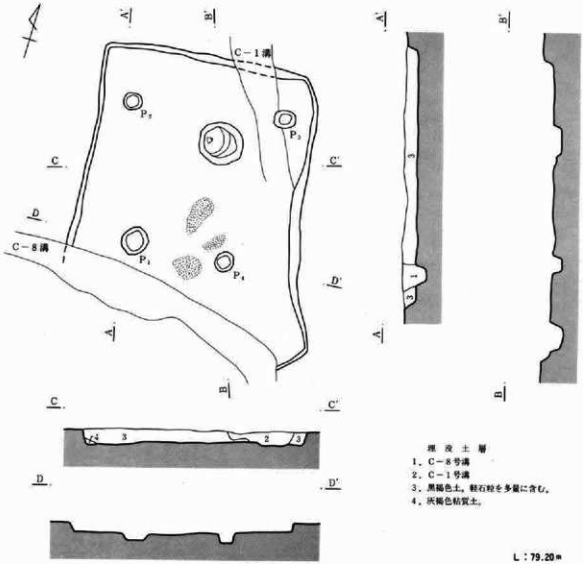
柱　穴　住居のほぼ対角線上に4個検出された。心々間を結んだ距離は、長軸の場合2.4mであるが、短軸は2.4mと1.5mとなり一定していない。各柱穴の深さはP_1：11cm、P_2：24cm、P_3：10cm、P_4：14cmを測る。

炉　址　焼土の分布が中央の南側に3個所みられるが、いずれが炉であるのかは断定できなかった。

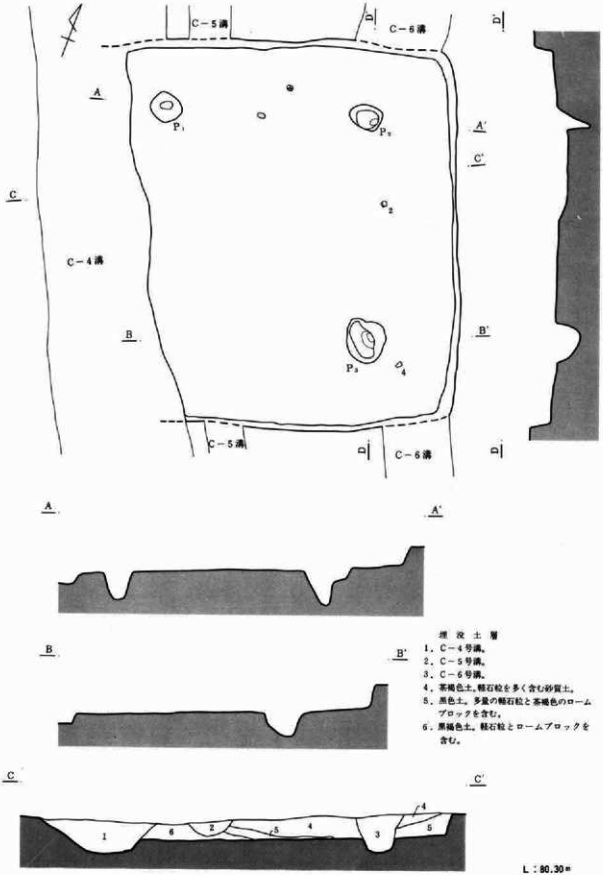
遺　物　いずれの土器も埋土中から出土したものである。　　（土器観察表：5頁）

重　複　北側を1号溝で、南側を8号溝でそれぞれ切られている。

備　考　中央の北側に長径180×短径130cm、深さ60cmの土坑が検出されている。坑内からは同期の土器片も出土しているが、これが貯蔵穴に該当するのかどうかは断定できなかった。



第20図　C区9号住居址



第21図　C区10号住居址

C 区 10 号 住 居 址

位 置 N′−30　　**写 真** PL 5 − 5 〜6、33

形 状 西側を4号溝によって切られているために明確ではないが、長軸を南北にもち隅が直角に近い長方形を呈すると思われる。長辺は6.1mを測る。

面 積 不 明　　**方 位** N−68′−E

床 面 ローム土を20〜35cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面はなく、西方へゆるやかに傾斜している。

柱 穴 4号溝によって切られているために、3個しか検出されていない。心々間を結んだ距離は、長軸3.5×短軸3.2mである。各柱穴の深さは、P_1：43cm、P_2：53cm、P_3：36cmを測る。

炉 址 明瞭な痕跡は認められなかった。

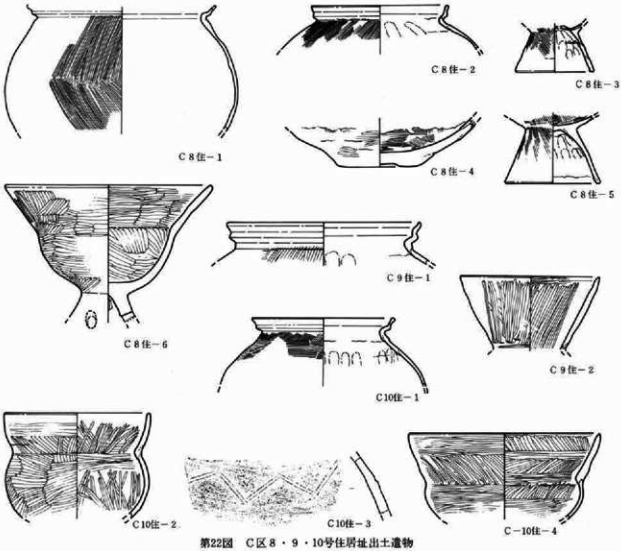
周 溝 検出されなかった。

遺 物 少量の土器が出土しているが、破片のみで完形品はない。4はほぼ床面密着で出土し、他は埋土中から出土したものである。

（土器観察表： 6頁）

重 複 南北方向に走る4〜6号溝によって切られているが、このうち5・6号溝の掘り込みは浅く、床面まで達していない。また4号溝は西壁を壊しているために住居の規模が不明となっている。

備 考 埋没土層はかなり多量の浅間Cを含んでいるが、純層としての浅間C層は検出されなかった。



第22図　C区8・9・10号住居址出土遺物

B区4号住居址

位　置　X－33

写　真　PL8－1～4、33、34

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は直線的で、長辺5.2×短辺4.4mを測る。

面　積　22.39m²

方　位　N－82°－E

床　面　ローム土を2～16cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はないが、中央部がやや高まりをもち、わずかながら壁へ向って放射状に低くなる。

柱　穴　長軸方向に2個検出されているが、他は確認できなかった。心々間を結んだ距離は2.9mである。各柱穴の深さは、P_1：24cm、P_2：18cmである。

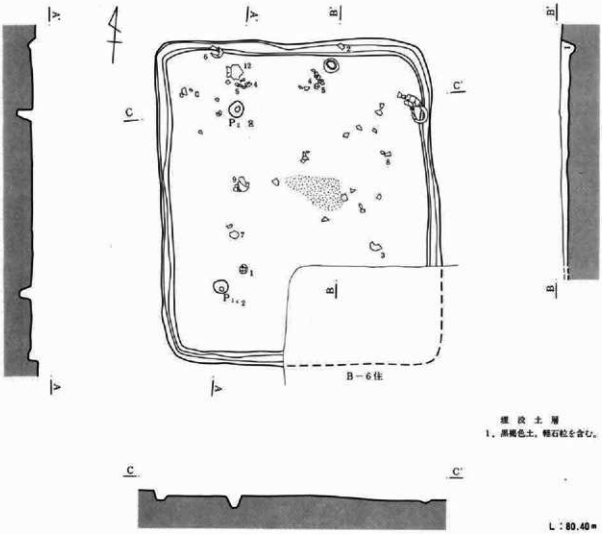
炉　址　ほぼ住居中央に位置している。長径100×短径40cmの楕円形状に焼土が分布し、深さ6cmの掘り込みをもつ。

周　溝　幅15～20cm、深さ4cmで壁に沿ってめぐっている。6号住居によって1部切られているが、完周していたものと思われる。

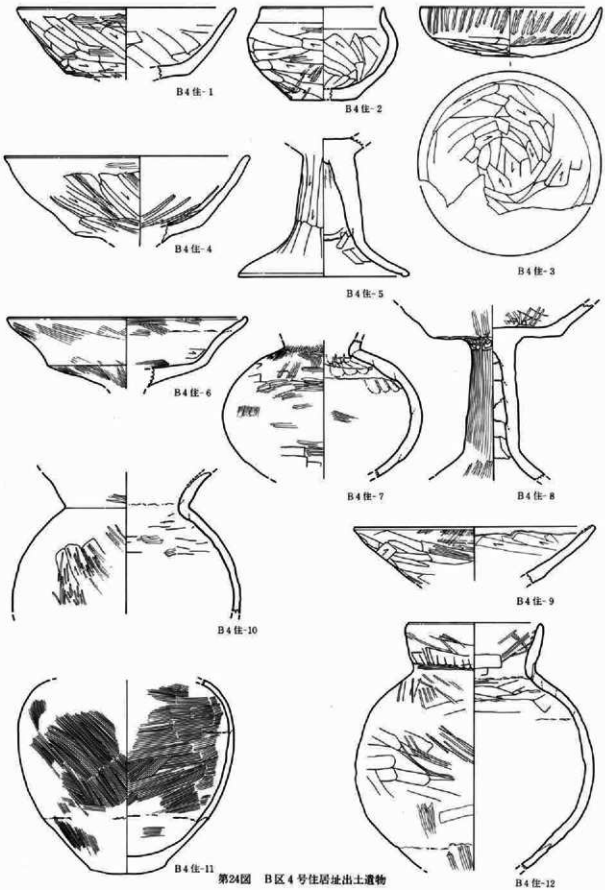
遺　物　完形の土器はないが、北側に比較的集中して出土した。1・2・4～9・12の土器はほぼ床面に密着し、他は床面より5cm前後浮いて出土したものである。　（土器観察表：6・7頁）

重　複　南側を6号住居址によって切られている。

備　考　住居の掘り込み面が地表から浅いために、壁の残存状態は悪い。貯蔵穴は検出されなかった。



第23図　B区4号住居址



第24図　B区4号住居址出土遺物

B区11号住居址

位　置　X－26　　**写　真**　PL6－1～4、35

形　状　一辺6.0mで隅の直角な正方形を呈する。壁はやや膨らみをもつが、ほぼ直線的である。

面　積　37.16m²　　**方　位**　N－73°－E

床　面　ローム土を18～32cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、ほぼ平坦である。

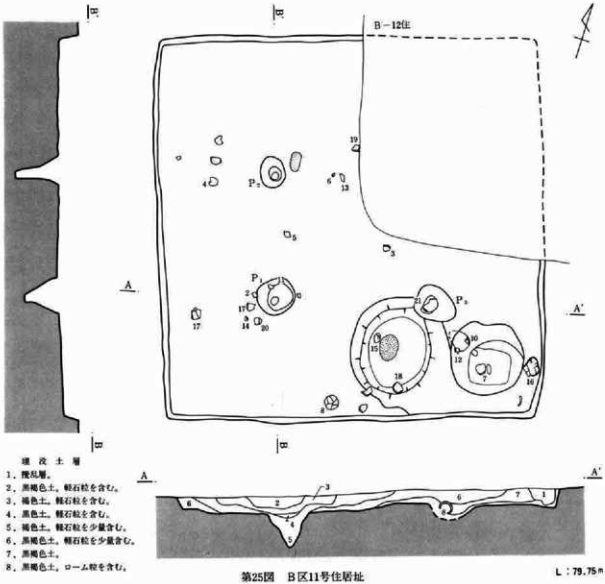
柱　穴　12号住居との切り合いによって3個しか検出されていないが、いずれも住居の対角線上に配されている。心々間を結んだ距離は、長軸2.5×短軸2.0mで東西に長軸をもつ。各柱穴の深さは、P_1：54cm、P_2：68cm、P_3：61cmを測る。

炉　址　中央南側の壁寄りに位置している。長径45×短径30cmの楕円形を呈し、深さ10cmの掘り込みをもつ。炉址を中心とした半径60cmの範囲は粘土によってドーナツ状に盛土され、他の床面よりも5cmほど高くなっている。

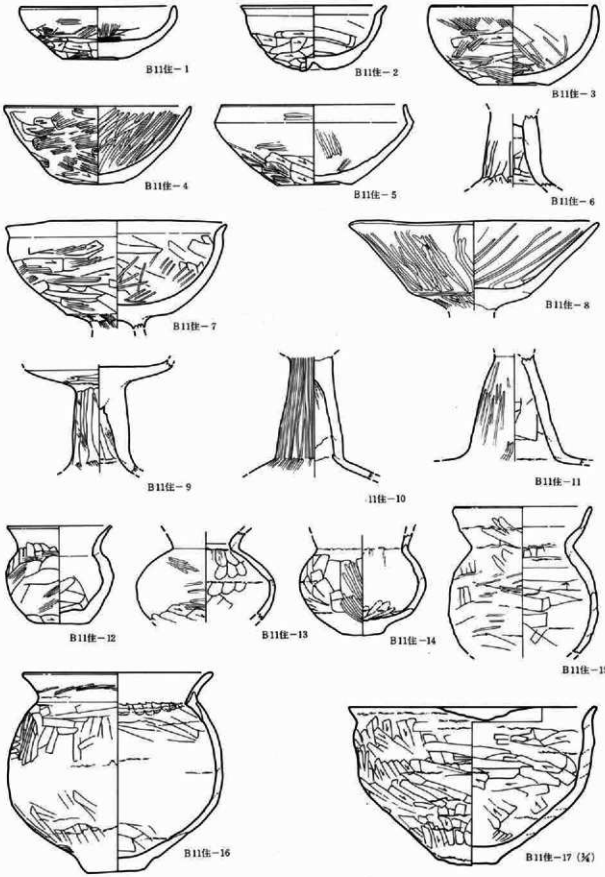
貯蔵穴　南東隅に位置している。長径130×短径75cmの楕円形を呈し、深さ92cmを測る。

遺　物　多量の土器が出土したが、この内床面に密着していたものは5・8・11・13・17・21で、21はP_3の柱穴直上より出土した。7・10は貯蔵穴内より出土し、他は床面より5～15cm浮いた状態で出土した。　　（土器観察表：7・8・9頁）

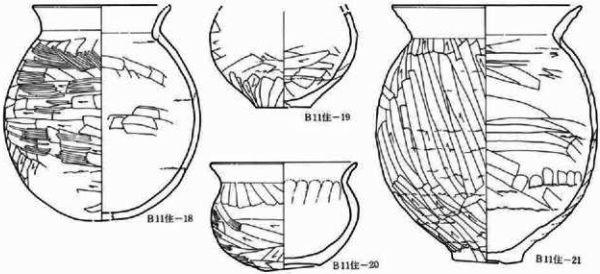
重　複　北・東壁の約半分を12号住居址によって切られている。



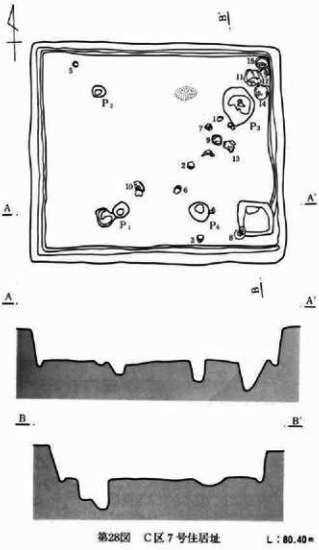
第25図　B区11号住居址



第26図　B区11号住居址出土遺物



第27図　B区11号住居址出土遺物



第28図　C区7号住居址　L：80.40m

C区7号住居址

位　置　Y－31

写　真　PL7－1～5、36

形　状　長軸を東西にもち、隅が直角の長方形を呈する。長辺4.1×短辺3.5mを測る。

面　積　14.02㎡　　**方　位**　N－3°－E

床　面　ローム土を42～56cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、ほぼ水平である。

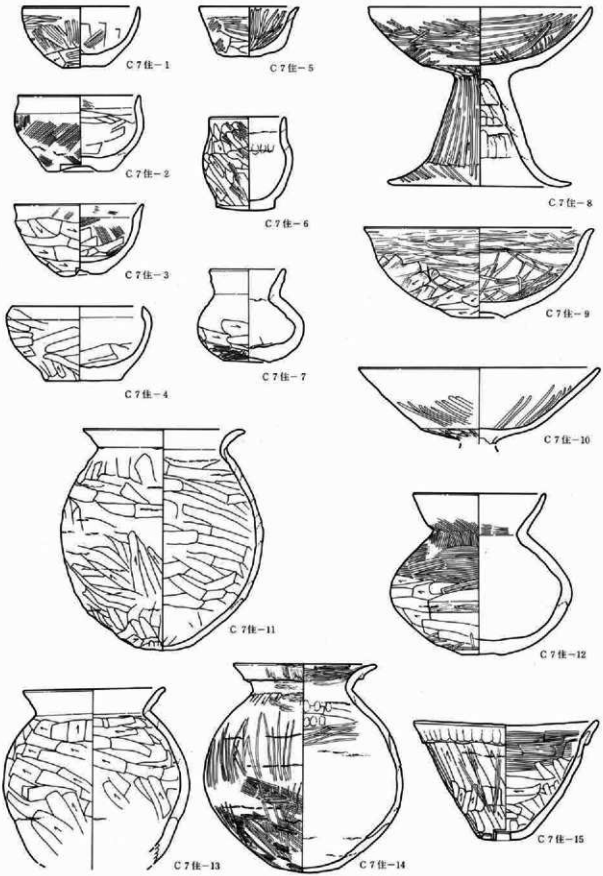
柱　穴　柱穴として確定できるものは3個のみである。P_1～P_3の配置は不規則で、住居の対角線上からずれている。各柱穴の心々間の距離はP_1～P_2：1.9m、P_1～P_3：1.3mで、各柱穴の深さは、P_1：14cm、P_2：27cm、P_3：34cmを測る。

炉　址　中央北側に40×20cmの楕円形状に焼土の分布があり、これが炉址に該当するものと思われる。深さ5cmの掘り込みを有している。

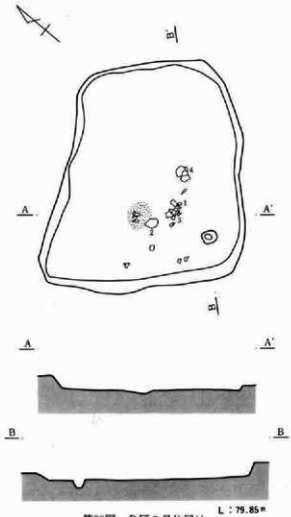
貯蔵穴　南東隅に位置する。一辺55cmの正方形を呈し、深さ47cmの掘り込みをもつ。

遺　物　床面に密着して出土した土器は、3・5・8・11・12・14・15で、他は10cm前後床面より浮いた状態で出土した。このうち11・12・14・15は口縁を下にして北東隅に倒置されていた。　（土器観察表：9・10・11頁）

備　考　周溝は検出されなかった。



第29図　C区7号住居址出土遺物



第30図　B区5号住居址

B区5号住居址

位　置　W−25

写　真　PL12−1～2、33

形　状　長軸を東西にもった不整方形を呈している。壁の立上りが明確でないが、長辺3.6×短辺3.2mを測る。

面　積　9.77m²　　**方　位**　N−48°−W

床　面　ローム土を7～29cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、西へわずかながら傾斜している。

柱　穴　南西隅に1個検出されたが、他は精査にもかかわらず、検出できなかった。直径24cm、深さ12cmである。

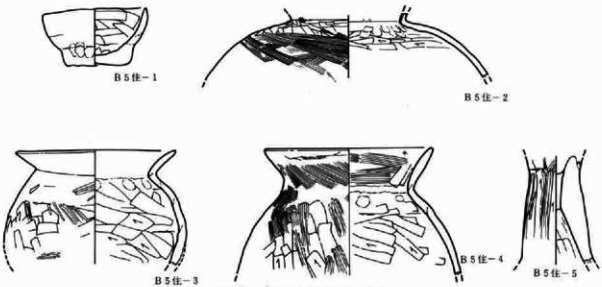
炉　址　中央西側に位置し、直径40cm、深さ4cmほどの掘り込みをもっている。内部はあまり焼けていない。

遺　物　3の甕形土器が床面密着の他は、全て5～10cm床面より浮いて出土した。完形の土器は無いが炉址の近辺に集中して出土している。

（土器観察表：11頁）

重　複　南壁の一部を1号住居址によって切られている。

備　考　貯蔵穴と周溝は検出されなかった。



第31図　B区5号住居址出土遺物

E区3号住居址

位　置　F－44

写　真　PL6－5～8、34

形　状　長軸を東西にもち、隅がほぼ直角の長方形を呈する。東壁に比べて西壁が短いために若干形状が歪んでいるが、壁は直線的で長辺4.2×短辺3.7mを測る。

面　積　14.59m²　　**方　位**　N－10°－W

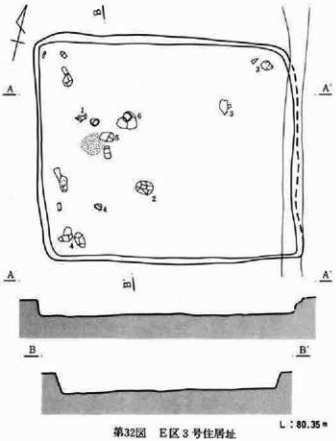
床　面　ローム土を21～32cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、南側がやや低くなる。

炉　址　中央西側に位置する。直径35cmの円形を呈し、深さ5cmの掘り込みをもつ。

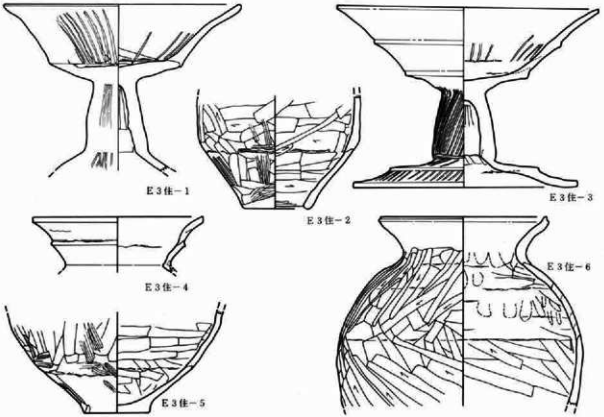
遺　物　1～6の土器の全てが床面に密着して出土した。3は完形土器で、押しつぶされた状態で出土した。(土器観察表：11・12頁)

重　複　東壁を1号溝に切られている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は不明。



第32図　E区3号住居址



第33図　E区3号住居址出土遺物

A区4号住居址

位　置　W−15　　**写　真**　PL9−1〜2、37

形　状　長軸を南北にもち、隅が直角の長方形を呈する。四壁はほぼ直線的で、長辺5.0×短辺4.2mを測る。

面　積　20.58m²　　**方　位**　N−79°−E

床　面　ローム土を21〜71cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められており、特に竈周辺は堅くなっていた。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置する。袖部は約40cm残存し、ローム土混りの褐色土で構築されている。燃焼部は幅40cm、奥行90cmで、壁内側に造り付けられる。また中央には自然石が支脚として使用されている。煙道は燃焼部から約45°の角度で立ち上る。

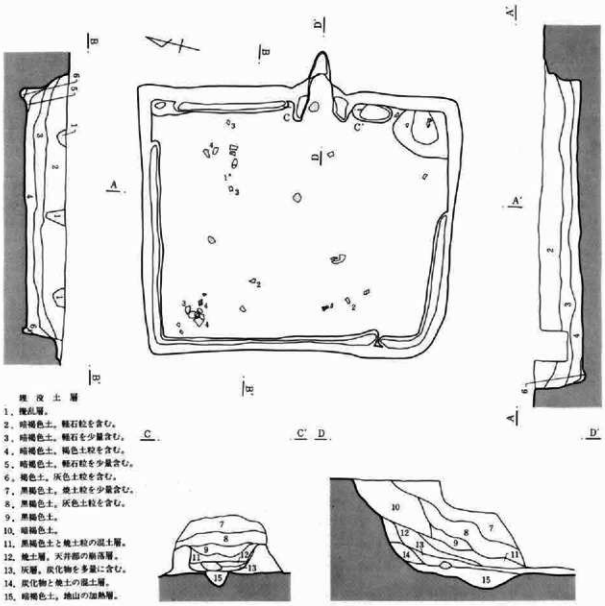
貯蔵穴　南東隅に位置する。長径85×短径70cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

周　溝　幅10〜25cm、深さ4〜9cmで、北東と南東隅を除いてほぼ完周する。

遺　物　1の坏は床面に密着して出土し、他は床面より5cm以上浮いた状態で出土した。

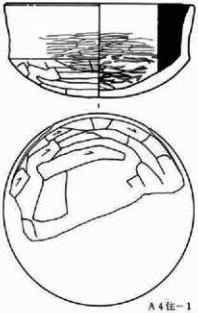
（土器観察表：12頁）

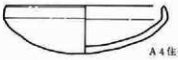
備　考　柱穴は検出できなかった。

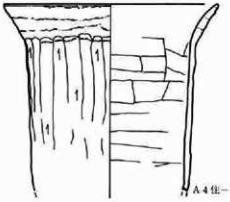


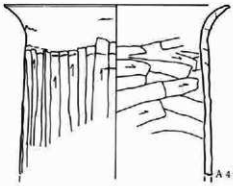
埋没土層
1．攪乱層。
2．暗褐色土。軽石粒を含む。
3．暗褐色土。軽石を少量含む。
4．暗褐色土。褐色土粒を含む。
5．暗褐色土。軽石粒を少量含む。
6．褐色土。灰色土粒を含む。
7．黒褐色土。焼土粒を少量含む。
8．黒褐色土。灰色土粒を含む。
9．黒褐色土。
10．暗褐色土。
11．黒褐色土と焼土粒の混土層。
12．焼土層。天井部の崩落層。
13．灰層。炭化物を多量に含む。
14．炭化物と焼土の混土層。
15．暗褐色土。地山の加熱層。

第34図　A区4号住居址









第35図　A区4号住居址出土遺物

A区2号住居址

位　置　X－11

写　真　PL37

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁はやや膨らみ、長辺3.1×短辺2.7mを測る。

面　積　8.08m²

方　位　N－76°－E

床　面　砂壌土を15～30cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、平坦な床面となっている。

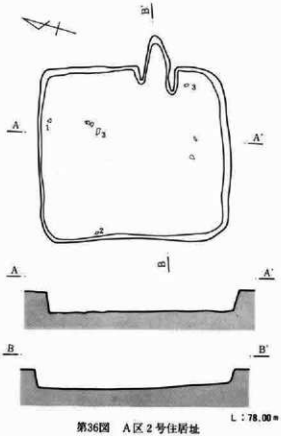
竈　址　東壁中央部のやや南側に位置する。袖部は25～40cm残存している。燃焼部は幅40cmで、壁内側に造り付けられるものと思われる。煙道は燃焼部からゆるやかに立ち上る。

遺　物　少量の土器が出土したのみで、ほとんどが小破片であった。1の坏が床面密着に近い状態で出土した他は、床面より10cm前後浮いて出土した。

（土器観察表：12頁）

重　複　西側で2号方形周溝墓を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第36図　A区2号住居址

A 区 7 号住居址

位　置　X−17　　**写　真**　PL37

形　状　一辺が3.5mの隅の丸い正方形を呈する。壁は若干膨らみをもつ。

面　積　11.88㎡　　**方　位**　N−80°−W

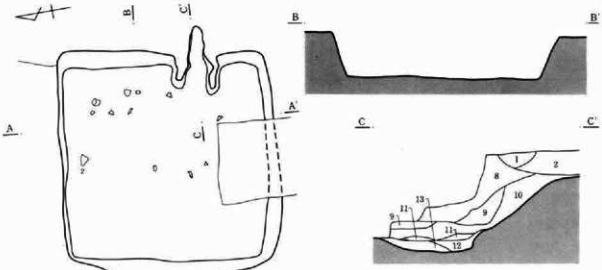
床　面　ローム土を60〜72cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、わずかではあるが、中央から壁に向って放射状に低くなる。

竈　址　東壁中央のやや南側に位置する。袖部は約50cm残存し、灰褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅40cm、奥行70cmで、壁内側に造り付けられている。焚口部およびその手前には、灰や炭化物が広がっていた。煙道は幅20cm、長さ60cmで燃焼部から約45°の角度で立ち上る。

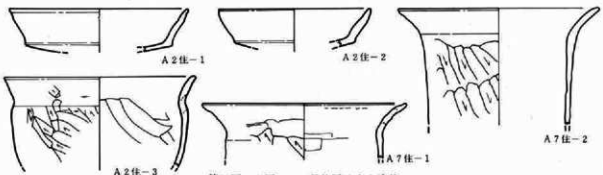
遺　物　出土土器は破片のみで、数量も少ない。それらのほとんどが、床面より10cm前後浮いた状態で出土した。　　（土器観察表：13頁）

重　複　北側において8号住居址を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第37図　A区7号住居址



第38図　A区2・7号住居址出土遺物

A区8号住居址

位　置　X−16

写　真　PL 9−3〜4、37

形　状　長軸を東西にもち隅の丸い台形を呈する。長辺4.1×短辺3.4mで、壁はやや膨らみをもつ。

面　積　15.68m²

方　位　N−70°−W

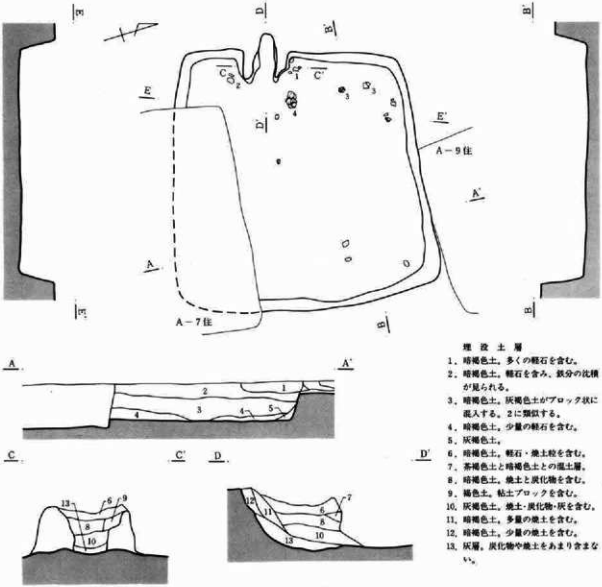
床　面　ローム土を50〜67cm掘り込んで床面としている。竈の周辺は堅く踏み固められているが、他は特に堅い面はない。東側が若干高まりをもち、西側へ向って緩やかに傾斜している。

竈　址　西壁中央のやや南側に位置する。袖部は約50cm残存し、灰褐色土によって構築されている。また燃焼部は幅40cm、奥行45cmで壁内側に造り付けられる。煙道は燃焼部から約60°の角度で立ち上る。

遺　物　完形の土器が3点出土した他に、少量の土器片が散在していた。2・3の坏は床面より4cmほど浮いていたが、4の鉢はほぼ床面に密着した状態で出土した。　（土器観察表：13頁）

重　複　南側を7号住居址によって切られているが北側で9号住居址を切って構築されている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



理　政　土　層

1．暗褐色土。多くの軽石を含む。
2．暗褐色土。軽石を含み、鉄分の沈積が見られる。
3．暗褐色土。灰褐色土がブロック状に混入する。2に類似する。
4．暗褐色土。少量の軽石を含む。
5．灰褐色土。
6．暗褐色土。軽石・焼土粒を含む。
7．茶褐色土と暗褐色土との混土層。
8．暗褐色土。焼土と炭化物を含む。
9．橙色土。粘土ブロックを含む。
10．灰褐色土。焼土・炭化物・灰を含む。
11．暗褐色土。多量の焼土を含む。
12．暗褐色土。少量の焼土を含む。
13．灰層。炭化物や焼土をあまり含まない。

第39図　A区8号住居址

A 区 13 号 住 居 址

位　置　J′—18

形　状　北側を流水によって侵食されているために不明な点が多いが、柱穴のあり方からみて長軸を南北にもつ長方形を呈すると考えられる。短辺は5.8mで、隅は直角に近く、直線的な壁となる。

面　積　不　明　　**方　位**　N—66′—E

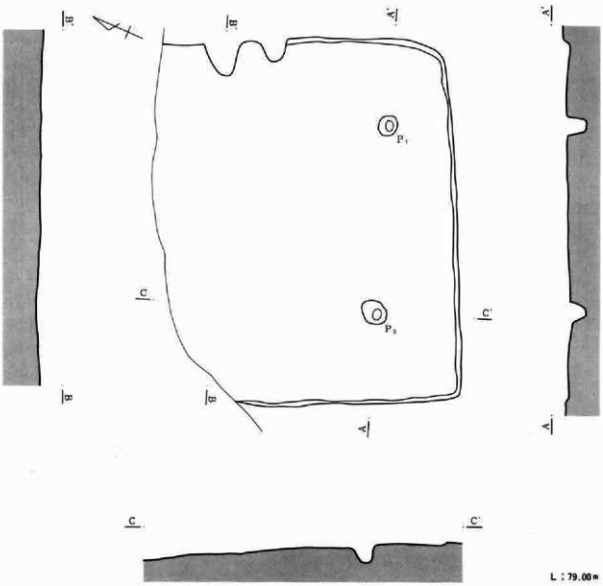
床　面　ローム土を4～10cm掘り込んで床面としている。よく踏み固められた堅い床面が一部に残存しているが、上層からの攪乱が床面にまで達しているため、大半が破壊されている。

柱　穴　2個が確認されているのみであるが、その心々間の距離は3.0mを測る。また各柱穴の規模はP_1が直径30cmで深さ31cm、P_2が直径40cmで深さ26cmとなる。

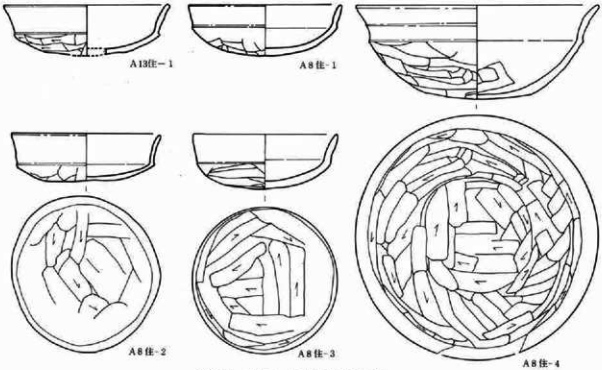
竈　址　東壁のほぼ中央に位置していたものと考えられるが、最下部しか確認できなかった。燃焼部や煙道の規模は不明である。

遺　物　出土した土器はごく少量で、いずれも小破片である。床面密着のものはなく、10cm弱床面から浮いた状態で出土した。　（土器観察表：13頁）

備　考　貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第40図　A区13号住居址



第41図　A区8・13号住居址出土遺物

A 区 14 号 住 居 址

位　置　H′—17　　**写　真**　PL37

形　状　西半分が上層からの攪乱によって破壊されているために明確でないが、隅はほぼ直角に掘られている。残存している東壁の長さは4.2mを測る。

面　積　不　明　　**方　位**　N—78°—E

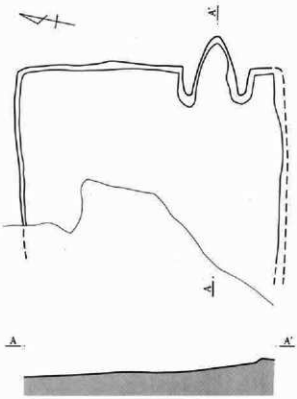
床　面　ローム土を12〜14cm掘り込んで床面としている。竈を中心とした東半分は、良く踏み固められている。

竈　址　東壁の南側に位置する。袖部は約40cmほど残存し、暗褐色土によって構築されているが、上半が上層から攪乱によって削平されている。燃焼部は幅50cmで、壁内側に造り付けられるものと考えられる。

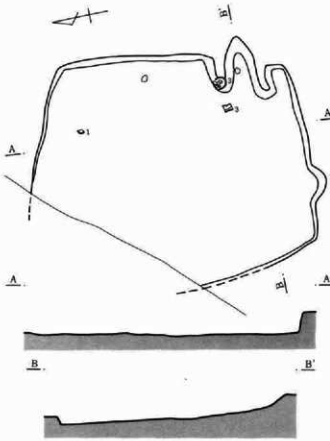
焼土や灰層はあまり認められなかった。煙道は燃焼部からゆるやかに立ち上る。

遺　物　床面に密着した遺物はなく、埋没土中から少量の土器片が出土した。（土器観察表 13・14頁）

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第42図　A区14号住居址　　L：79.00m



第43図　A区18号住居址　　L：79.00m

A区18号住居址

位　置　F'－16　　**写　真**　PL37

形　状　西側を流水によって侵食されているために明確ではないが、長軸を南北にもつ隅の丸い台形状を呈すると思われる。長辺4.4×短辺3.6mを測る。

面　積　15.5m²　　**方　位**　N－77°－W

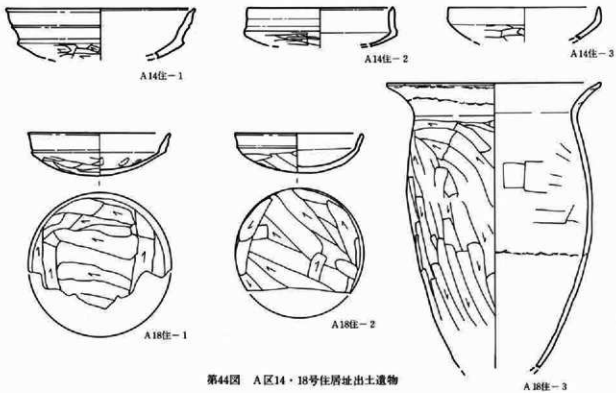
床　面　ローム土を3～31cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

壁　址　東壁の南寄りに位置する。袖部は約40cm残存し、ローム土と暗褐色土との混土により構築されている。また北側の袖部には補強材として甕形土器（3）を使用している。燃焼部は幅45cmで、壁内側に造り付けられる。また燃焼部の中央には支脚として自然石を埋め込んでいる。

遺　物　数点の土器が出土したのみである。1の坏は床面よりわずかに浮いて出土した。

（土器観察表：14頁）

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は未検出である。



第44図　A区14・18号住居址出土遺物

A 区 16 号 住 居 址

位　置　G－18

写　真　PL18－3～4、47

形　状　長軸を東西にもち、隅が直角の長方形を呈する。やや歪んだ形状となるが、長辺3.6×短辺3.0mを測る。

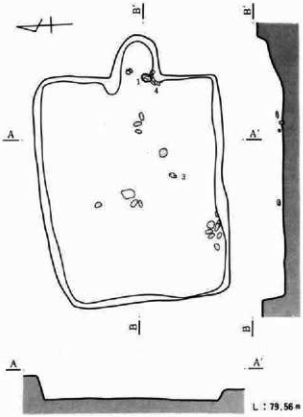
面　積　10.33m²　　**方　位**　N－85°－W

床　面　ローム土を15～37cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、中央が若干高くなる。

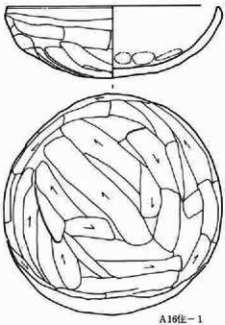
竈　址　東壁の中央に位置する。右袖部には長甕（4）が補強材として使用されている。燃焼部は幅50cmで壁外側に造り出される。煙道は明確に検出できなかった。右袖に近接して坏（1）が出土している。

遺　物　2の坏は床面に密着して出土した。この他に床面密着の遺物として長径15cm、短径8cmの河原石が、住居中央部や南壁の南寄りに集中して15個出土した。　　（土器観察表：14頁）

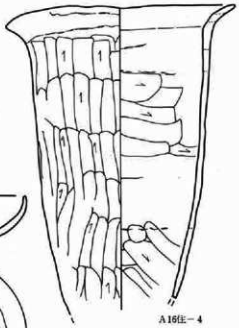
備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



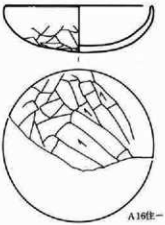
第45図　A区16号住居址



A16住－1



A16住－4



A16住－3

A16住－2

第46図　A区16号住居址出土遺物

A区28号住居址

位　置　Z－16　　**写　真**　PL10－1～5、38

形　状　一辺が5.7mで、隅がほぼ直角の正方形を呈する。四壁は直線的である。

面　積　31.84m²　　**方　位**　N－15°－E

床　面　ローム土を43～69cm掘り込んで床面としている。ほぼ全面が堅く踏み固められている。

柱　穴　住居の対角線上に4個確認された。柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し一辺2.8mの正方形状に配される。各柱穴の深さはP_1：66cm、P_2：70cm、P_3：44cm、P_4：70cmである。

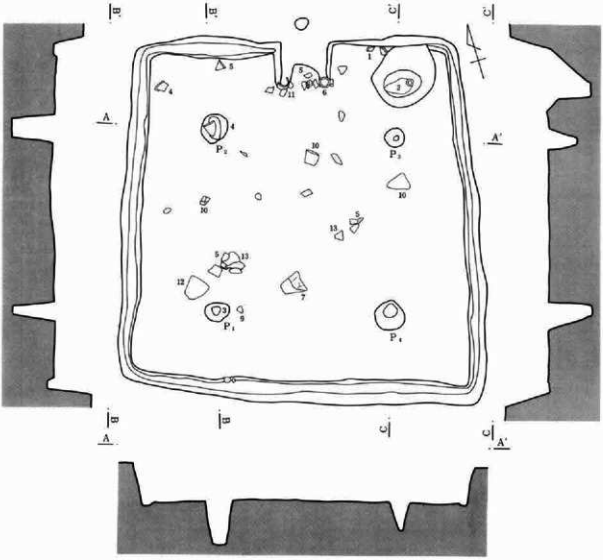
竈　址　北壁の中央に位置している。竈の天井の一部が残存するが、掛口は不明であった。袖部は約65cm残存し、その両端には長甕が補強材として使用されている。燃焼部は幅45cm、奥行80cmで壁内側に造り付けられる。煙道は幅25cmで煙出穴が残存する。

貯蔵穴　北東隅に位置する。長径110×短径90cmの楕円形を呈し、深さ70cmを測る。

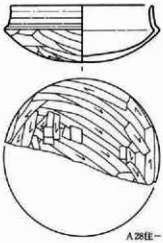
周　溝　幅13～23cm、深さ2～10cmで完周している。

遺　物　多量の土器が押しつぶされた状態で床面に密着して出土した。1の坏は床面より9cm浮いて、また2は貯蔵穴の埋土中より出土した。6・11の甕は、竈の右・左袖部に使用されていたものである。

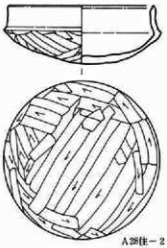
（土器観察表：14・15頁）



第47図　A区28号住居址　　L：79.00m

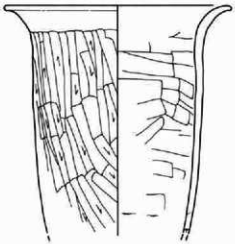


A 28住－1

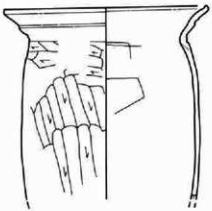


A 28住－2

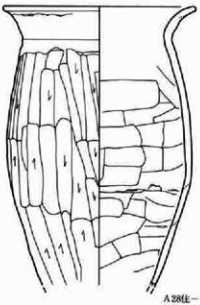
A 28住－3



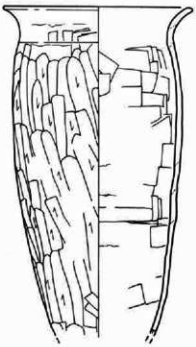
A 28住－4



A 28住－5

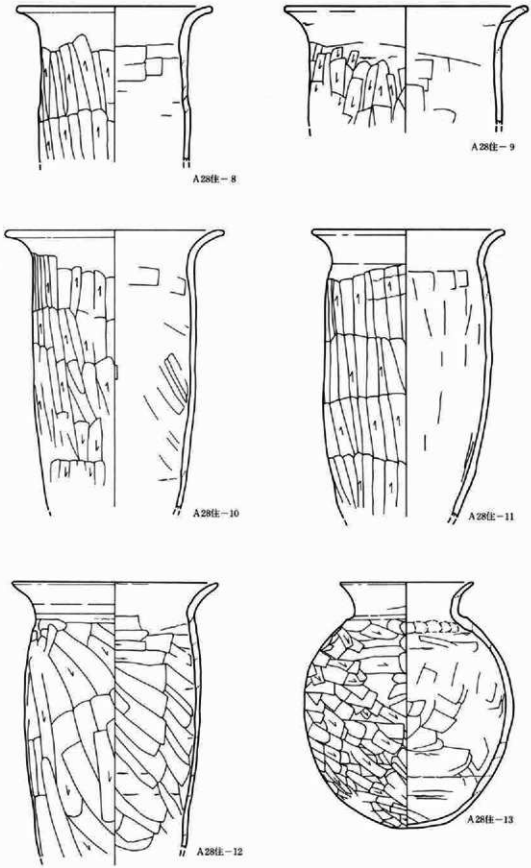


A 28住－6



A 28住－7

第48図　A区28号住居址出土遺物



第49図　A区28号住居址出土遺物

A区23号住居址

位　置　Y−15

写　真　PL37

形　状　土層からの攪乱により、北東と南西の壁コーナーの一部を残して破壊されているために明確ではないが、長袖を東西にもち隅の直角な長方形を呈すると思われる。長辺約3.3×短辺約2.6mを測る。

面　積　8.6m²

方　位　N−29°−W

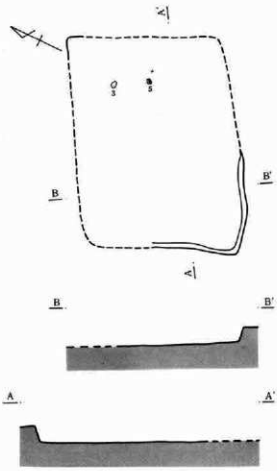
床　面　黒褐色土（12号住居址の埋没土）を24〜31cm掘り込んで床面としている。特に固い面はなく、北西側がやや低くなっている。

電　址　壁周辺が攪乱されているために不明である。

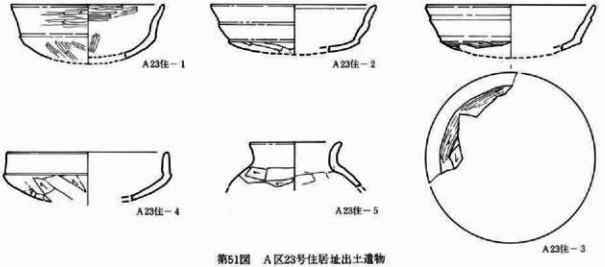
遺　物　少量の土器片が出土したのみである。1〜5の土器のいずれも床面より10cm以上浮いた状態で出土した。　（土器観察表：16頁）

重　複　26号住居址を切っている。

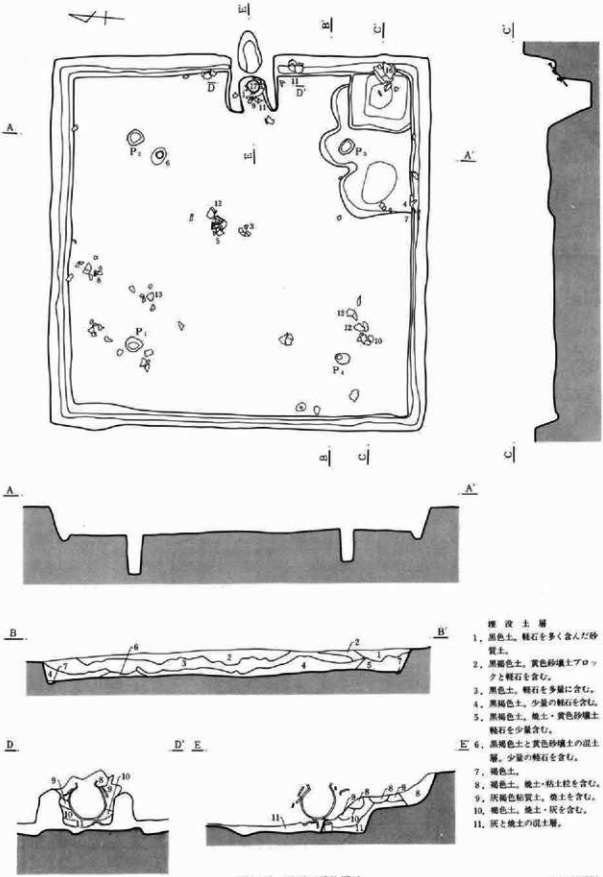
備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第50図　A区23号住居址　L：79.00m



第51図　A区23号住居址出土遺物



堆 積 土 層

1. 黒色土。軽石を多く含んだ砂質土。
2. 黒褐色土。黄色砂礫土ブロックと軽石を含む。
3. 黒色土。軽石を多量に含む。
4. 黒褐色土。少量の軽石を含む。
5. 黒褐色土。焼土・黄色砂礫土軽石を少量含む。
6. 黒褐色土と黄色砂礫土の混土層。少量の軽石を含む。
7. 褐色土。
8. 褐色土。焼土・粘土粒を含む。
9. 灰褐色粘質土。焼土を含む。
10. 褐色土。焼土・灰を含む。
11. 灰と焼土の混土層。

第52図　B区2号住居址

L：80.20m

B 区 2 号住居址

位 置 X－30 **写 真** PL11－1～5、39、40

形 状 一辺が 6.0m で、隅が直角の正方形を呈する。壁は直線的であり、整然とした平面形をもつ。

面 積 35.51m² **方 位** N－88°－E

床 面 ローム土を31～50cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められて平坦な面となっているが、貯蔵穴の東側は他よりも10cm程の高まりをもち、段状の面を形成している。

柱 穴 住居の対角線上に4個が確認された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、一辺3.3mの正方形となる。各柱穴の規模はP_1が径25cmで深さ44cm、P_2が径27cmで深さ61cm、P_3が径25cmで深さ50cm、P_4が径20cmで深さ40cmを測る。

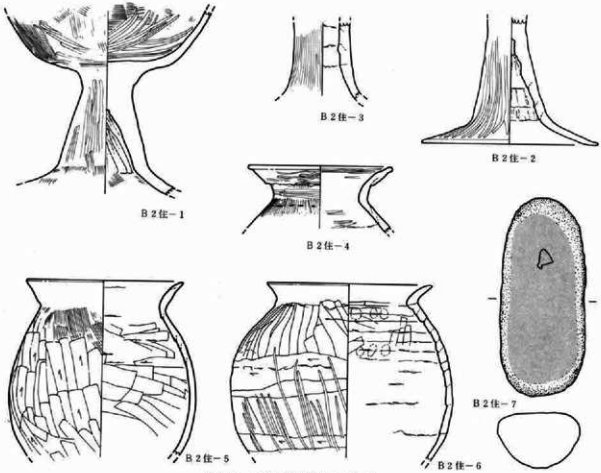
竈 址 東壁の中央部に位置する。袖部は約55cm残存し、灰褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅45cm、奥行70cmで壁内側に造り付けられる。天井の一部が残存し、掛口と思われる位置には甕が検出され、高坏を倒置した支脚の上に直接乗っていた。煙道は幅25cm長さ50cmで、壁の上半部を掘り込んで造られている。

貯蔵穴 南東隅に位置する。1辺100cmの正方形を呈し、深さ70cmを測る。

周 溝 幅12～14cm、深さ2～5cmで、完周する。

遺 物 多量の土器と2点の石製品が出土した。1の高坏は竈内で支脚として使用され、17の甕は掛口に置かれていたものである。16の甑は貯蔵穴上端の壁ぎわに、押しつぶされた状態で出土した。7は石英閃緑岩の河原石で、人為的に研磨されて平坦な面をもつ。13は赤城山給源の軽石であるが、中央部に径8mmの穴が片面より穿孔されている。

（土器観察表：16・17頁）

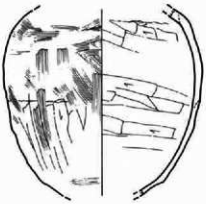


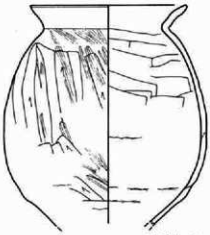
第53図 B区2号住居址出土遺物

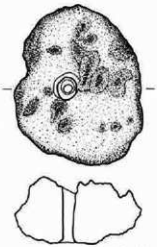
B 2住－8

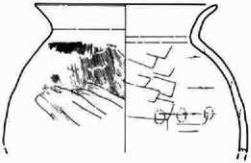
B 2住－9

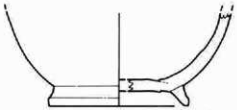
B 2住－10

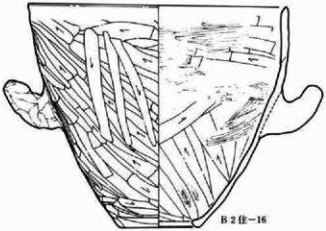

B 2住－11

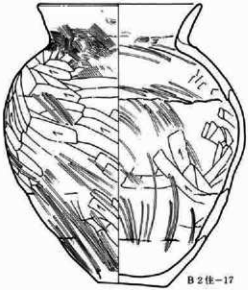

B 2住－12


B 2住－13


B 2住－14


B 2住－15


B 2住－16


B 2住－17

第54図　B区2号住居址出土遺物

B区7号住居址

位　置　W−35

写　真　PL40

形　状　一辺が3.8mで、隅の丸い正方形を呈する。北辺が若干短く、やや歪んでいる。

面　積　14.18m²　　**方　位**　N−73°−E

床　面　ローム土を26〜36cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、西側が若干低い。

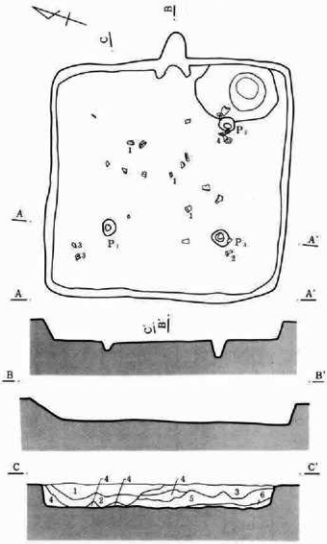
柱　穴　住居の対角線上に3個確認された。1個欠落しているために明確ではないが、各心々間の距離が1.8mで、住居の外形と相似形に配されるものと思われる。各柱穴の深さは、P_1：13cm、P_2：18cm、P_3：26cmを測る。

竈　址　東壁の中央部に位置する。袖部は基部が20cmほど残存し、褐色粘質土で構築されている。燃焼部は幅30cmで、壁内側に造り付けられるものと思われる。煙道は燃焼部から約25°の角度でゆるやかに立ち上る。

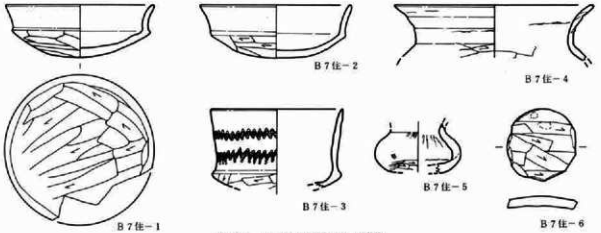
貯蔵穴　南東隅に位置する。直径57cmの円形を呈し、深さ58cmを測る。貯蔵穴の周辺は、他よりも5cm程度段状に低くなっている。

遺　物　各柱穴を結んだ線の内側に若干の土器が出土した。1・3・4は床面に密着して出土した。6の土器片は、甕の胴部破片を用いて円形状に打ち欠いたもので、用途は不明である。

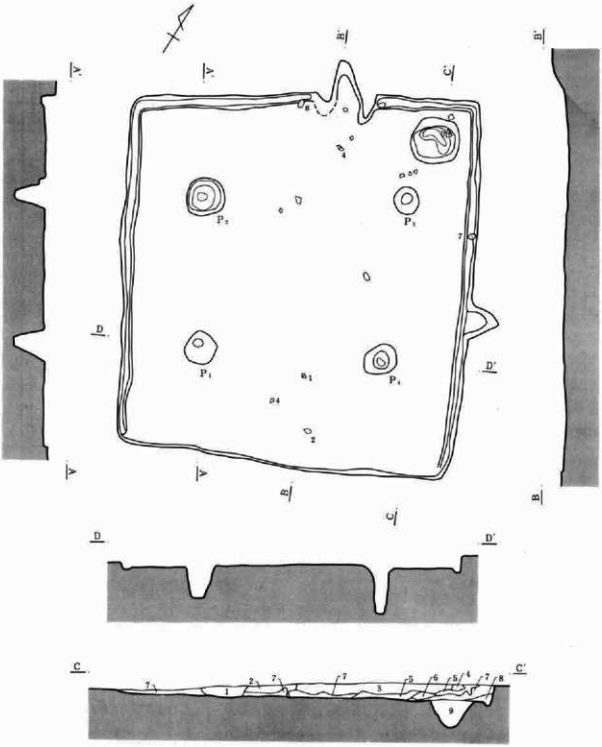
（土器観察表：17・18頁）



第55図　B区7号住居址　　L：80.55m



第56図　B区7号住居址出土遺物



遺 況 土 層

1．撹乱層。
2．褐色土。黄色粘質土のブロックや少量の炭化物・焼土を含む。
3．黒色土。軽石・焼土・黄色粘質土ブロックを含む。
4．黄色粘質土。
5．黒色土。炭化物・焼土・粘土粒を多量に含む。
6．黄色粘質土。
7．黒褐色土。軽石や黄色粘質土の小ブロックを含む。
8．黒褐色土。軽石・粘土粒を含むやや粘質な土。
9．黒褐色土。

第57図　B区8号住居址

L：80.70m

B 区 8 号住居址

位 置 W−38　　**写 真** PL12−3〜6、40

形 状 南北に長軸をもち、隅の直角な台形を呈する。長辺は6.0と5.6m、短辺は5.5mを測る。

面 積 32.27m²　　**方 位** N−32°−W

床 面 ローム土を4〜27cm掘り込んで床面としている。竈周辺を除いて特に堅い面はない。

柱 穴 住居の対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、長軸が3.3・3.0m、短軸が2.5mの台形となる。各柱穴の深さは、P_1：50cm、P_2：50cm、P_3：33cm、P_4：74cmを測る。

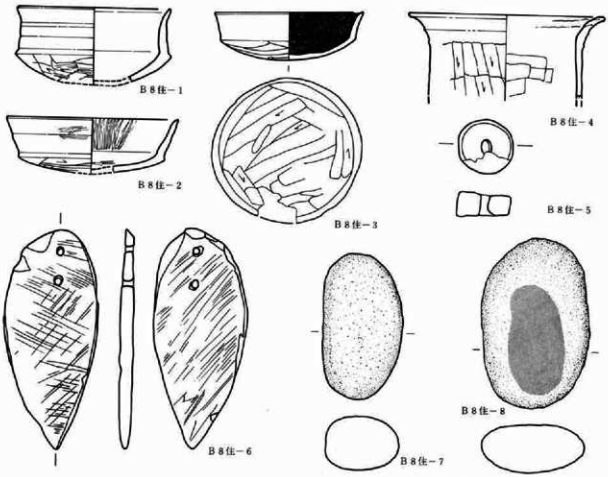
竈 址 新旧2つの竈があり、新竈は北壁中央の東寄りに位置する。袖部は右袖が約45cm残存し、褐色粘質土で構築される。燃焼部は幅約40cmで、壁内側に造り付けられるものと思われる。煙道は燃焼部から約25°の角度で立ち上る。旧竈は東壁中央の南寄りに位置し、わずかに痕跡を残すのみとなっているが、壁内側に造り付けられていたと思われる。

貯蔵穴 北東隅に位置する。長辺77×短辺73cmの隅丸方形を呈し、深さは70cmを測る。竈の移築に伴う貯蔵穴の移動はみられない。

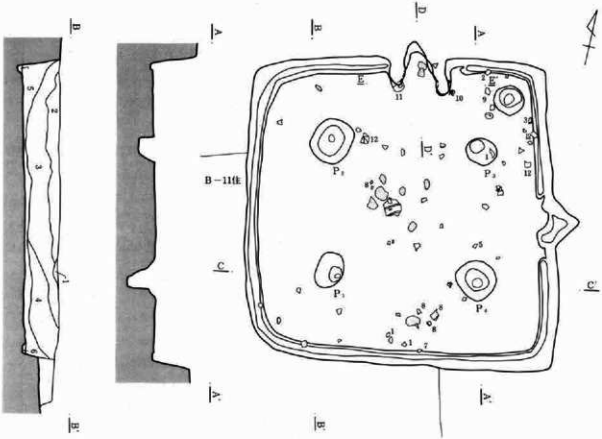
周 溝 南壁を除いてコ字状にめぐっている。規模は幅8〜16cm、深さ4〜10cmを測る。

遺 物 1・2の坏および7や片面に使用痕をもつ8の自然石が床面に密着して出土した他は、埋土中からの出土である。5の臼玉は滑石製で、中央に径2mmの孔が片面穿孔される。上下面とも調整され、側面には筋状の整形痕が縦方向に残る。6は蛇紋岩製の剣形模造器で、表裏面および側面に筋状の整形痕が残る。基部には径1.5mmの孔が片面穿孔されている。

（土器観察表：18頁）

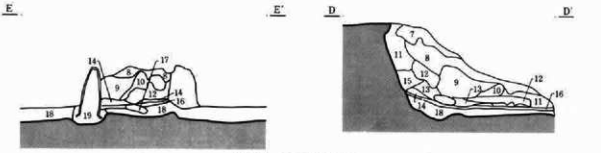


第58図　B区8号住居址出土遺物



理　液　土　層

1．B－1号溝。
2．黒色土。軽石と少量の地土粒を含む。
3．黒褐色土。軽石と地土粒を含む。
4．黒褐色土。軽石・地土粒・黄色粘質粒を含む。
5．黒褐色土。軽石と地土粒を含む粒子の細かい土。
6．黒褐色土。しまりの少ない土。
7．褐色土。黄褐色粘土粒を含む。
8．黄褐色粘質土と灰褐色粘質土との混土層。
9．黄褐色粘質土。
10．灰褐色粘質土。
11．灰褐色粘質土。地土粒を少量含む。
12．灰白色粘質土。
13．灰白色粘質土と灰との混土層。
14．灰白色粘質土と地土粒との混土層。
15．灰褐色粘質土。地土・灰白色粘土を含む。
16．灰層。
17．黄褐色粘質土と地土粒の混土層。
18．灰・地土・ローム粒・黒色土との混土層。
19．黄褐色粘質土。地土粒を含む。



第59図　B区12号住居址

L：79.80m

B 区 12 号 住 居 址

位 置 Y−27　　**写 真** PL8−5〜8、41

形 状 一辺が4.9mで、隅の丸い正方形を呈する。壁は若干の膨らみをもつ。

面 積 23.33m²　　**方 位** N−12°−W

床 面 ローム土を58〜75cm掘り込んで床面としている。全体的にかなり踏み固められている。

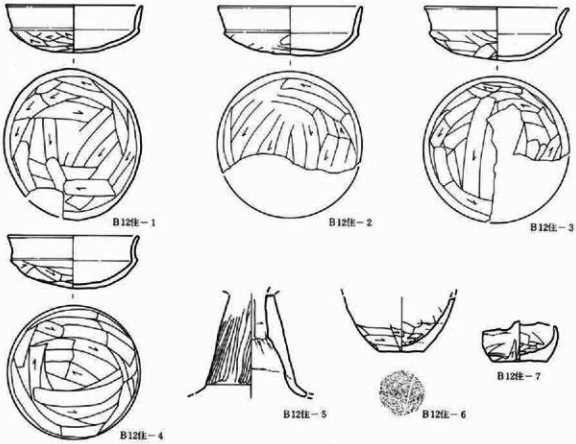
柱 穴 住居の対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その間隔は一辺が2.2mとなる。各柱穴の深さは P_1：65cm、P_2：35cm、P_3：25cm、P_4：46cmを測る。

竈 址 新旧二つの竈をもち、新竈は北壁のほぼ中央に位置する。袖部は約50cm残存し、褐色粘質土で構築されているが、その両袖端部には床面を5cmほど掘り下げて長麓を補強材として設置している。燃焼部は幅50cm、奥行70cmで、壁内側に造り付けられている。その中央部には自然石が横位に出土しているが、支脚として使用されていたものと思われる。煙道は燃焼部から約70°の角度で立ち上る。旧竈はほぼ東壁中央に位置する。

貯蔵穴 北東隅に位置する。直径50cmの円形を呈し、深さは43cmを測る。

周 溝 新旧竈の両脇で切れる他は、四壁を完周している。規模は幅8〜18cm、深さ2〜9cmを測る。

遺 物 8・12の甕が床面に密着して出土し、また10が竈の右袖、11が左袖に使用されていた他は、床面より5cm前後浮いて出土した。13〜15は滑石製の臼玉で、埋土中より出土した。13は一部欠損しているが、八角形状に整形され、上下面とも調整を加えている。14は側面に縦方向の筋状の整形痕を残し、下面に調整を加えている。15は七角形状に整形され、側面に縦方向の筋状の整形痕を残すが、上下面とも調整されていない。13〜15の中央部の孔は、いずれも片面穿孔である。　（土器観察表：18・19頁）

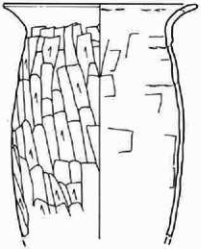


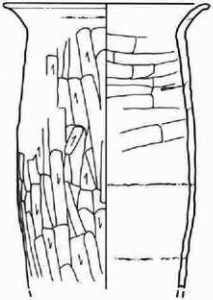
第60図　B区12号住居址出土遺物

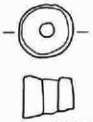
B12住－8

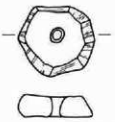
B12住－9

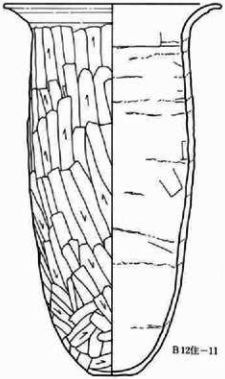
B12住－13

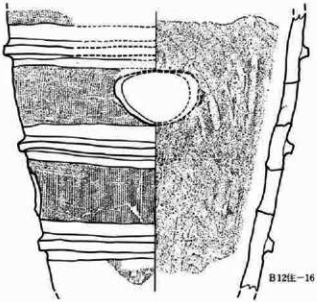

B12住－10


B12住－12


B12住－14


B12住－15


B12住－11


B12住－16

第61図　B区12号住居址出土遺物

E区12号住居址

位　置　B−37　　**写　真**　PL45

形　状　北および東側を他の住居址によって切られているために確定できない。残存している壁は直線的で、隅は直角となる。

面　積　不　明　　**方　位**　N−88°−W

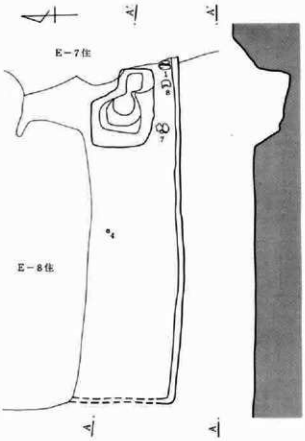
床　面　ローム土を19〜29cm掘り込んで床面としている。残存している床面の観察からは、特に堅い面は検出されなかった。

竈　址　住居同志の切り合いによって破壊されているが、貯蔵穴の位置からみて東壁に構築されていたものと推定される。

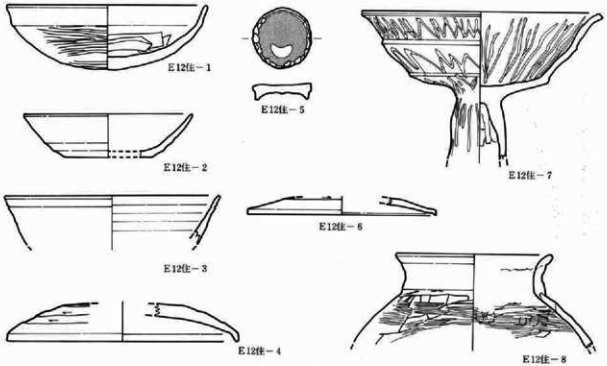
貯蔵穴　南東隅に位置する。長辺120×短辺80cmのやや歪んだ隅丸方形を呈し、深さ60cmを測る。

遺　物　7・8の土器が床面に密着して出土した他は、埋土中からの出土である。5は埋土中から出土した須恵器蓋のボタン状つまみであるが、裏面は人為的な摩耗痕があり、外周は細かい打ち欠きが施されている。　　(土器観察表：19・20頁)

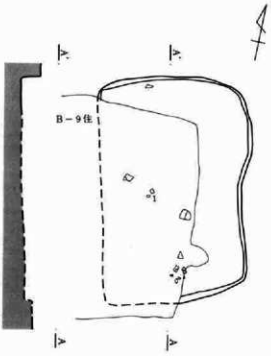
重　複　東と北側を7・8号住居址で切られている。



第62図　E区12号住居址



第63図　E区12号住居址出土遺物



第64図　B区13号住居址　　L：79.65m

B区13号住居址

位　置　X－23

写　真　PL12－7～8

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。9号住居址に切られていたり、壁が蛇行したりするために明確ではないが、長辺3.6×短辺2.3mを測る。

面　積　8.0m²　　**方　位**　N－76°－E

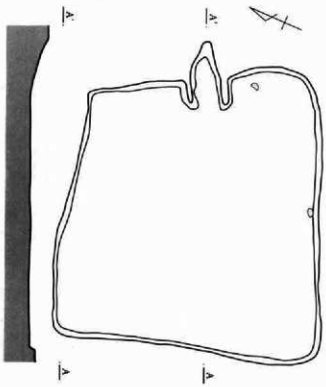
床　面　ローム土を13～34cm掘り込んで床面としている。残存している床面には特に堅い面はない。北側が若干低く、ゆるやかに傾斜している。

竈　址　不　明

遺　物　床面に密着した遺物はなく、少量の土器が床面より10cm前後浮いた状態で出土している。

重　複　西側半分を9号住居址によって切られているが、9号住居址の掘り込みは床面まで達していない。　　（土器観察表：20頁）

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第65図　C区1号住居址　　L：80.40m

C区1号住居址

位　置　T′－31

写　真　PL13－1～2

形　状　長軸を東西にもち、隅の丸い台形を呈する。東壁がやや湾曲して歪んだ形状となるが長辺4.7×短辺4.3mを測る。

面　積　17.28m²　　**方　位**　N－60′－E

床　面　ローム土を6～30cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

竈　址　東壁の中央に位置する。袖部は約40cm残存し、褐色粘質土で構築されている。燃焼部の規模は幅40cmで壁外側に造り出される可能性がある。煙道は幅15cmで、一部が残存している。

遺　物　少量の土器片が出土しているが、床面に密着したものはなく、いずれも埋土中からの出土である。実測図としては掲載されてないが、南壁に密着して長径15×短径7cmの楕円形状を呈した河原石が4個検出されている。

（土器観察表：20頁）

C区2号住居址

位置 T′−30　　**写真** PL13−3〜4

形状 一辺が5.3mで隅の丸い正方形を呈する。四壁は若干膨らみをもつ。

面積 28.13㎡　　**方位** N−18°−W

床面 ローム土を28〜54cm掘り込んで床面としている。全面にわたって、かなり踏み固められており多少の凹凸が見られる。

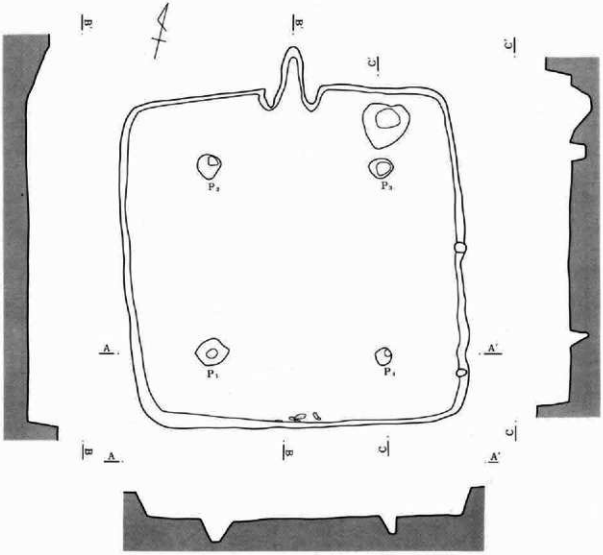
柱穴 住居の対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、一辺が3.0mの正方形となる。各柱穴の規模はP_1が径50cmで深さ34cm、P_2が径38cmで深さ36cm、P_3が径35cmで深さ28cm、P_4が径25cmで深さ27cmを測る。東壁に沿って径15cm、深さ4〜6cmの小穴が2個検出されたが、壁柱穴の可能性もうかがえる。

竈址 北壁の中央に位置する。袖部は約25cm残存し、灰褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅約30cmで、一部が壁外側に造り出される可能性をもつ。煙道は幅25cmで、一部検出された。

貯蔵穴 北東隅に位置する。長径75×短径68cmの歪んだ楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

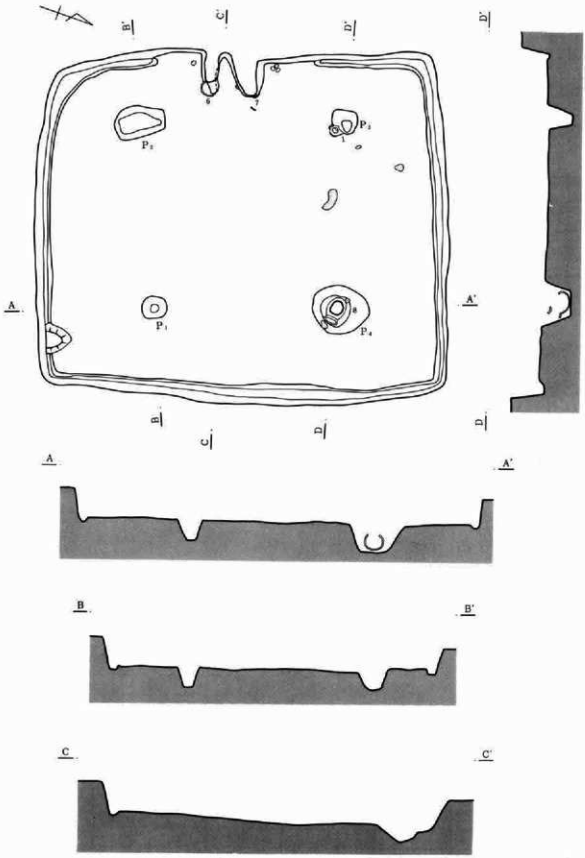
遺物 埋土中から数点の土器片が出土したのみである。　　(土器観察表：20・21頁)

備考 周溝は検出されなかった。



第66図　C区2号住居址

L：80.40m



第67図　C区3号住居址

C区3号住居址

位置 R′−30　　**写真** PL14−1〜5、42

形状 南北に長軸をもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は若干膨らみをもつが、長辺6.6×短辺5.5mを測る。

面積 34.98m²　　**方位** N−67′−E

床面 ローム土を32〜47cm掘り込んで床面としている。竈の周辺を中心として、全体的に良く踏み固められ、中央から竈にかけて若干窪んでいる。

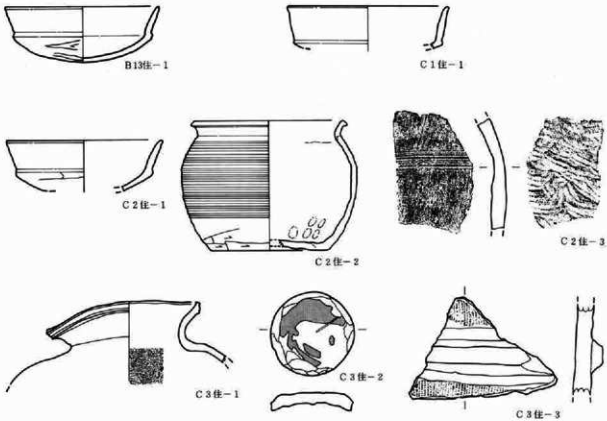
柱穴 住居のほぼ対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、P_2が若干外側にずれるために住居の外形と相似形にならないが、約一辺3.0mの間隔で配されている。各柱穴の規模は、P_1が径35cmで深さ33cm、P_2が長径70×短径48cmで深さ33cm、P_3が径40cmで深さ38cm、P_4が径80cmで深さ38cmを測る。P_4の柱穴内には、胴部片面に径20cmの円形状の穴をあけた甕が横立に置かれていた。出土状態からみて、この穴に柱を挿入したものと判断される。

竈址 西壁のほぼ中央に位置している。袖部は約70cm残存し、褐色粘質土によって構築されるが、両袖端部に長甕を倒置して補強材としている。燃焼部は幅35cmと狭く、壁内側に造り付けられている。煙道は幅20cmで、一部検出された。

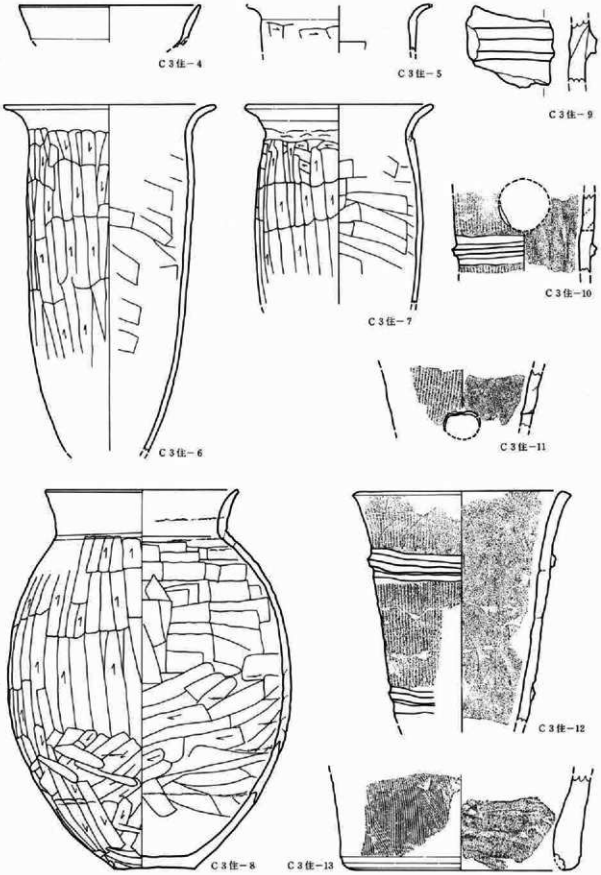
周溝 竈の近辺を除いて完周している。規模は幅10〜20cm、深さ3〜8cmを測る。

遺物 床面に密着したものは少なく、ほとんどが床面より浮いた状態で出土している。6・7の長甕は前者が竈の左袖、後者が右袖に使用されていた。また8はP_4の柱穴内に、横位に置かれていたものである。2は須恵器蓋より剝離したボタン状つまみであるが、裏面は摩耗し、外縁は粗く打ち欠かれている。径5cmほどの自然石が竈の右袖脇に3個、左袖脇に1個それぞれ置かれた状態で出土した。

（土器観察表：21・22頁）



第68図　B区13号住居址、C区1・2・3号住居址出土遺物



第69図　C区3号住居址出土遺物

C区5号住居址

位置 P′−32　　**写真** PL13−5〜8

形状 一辺が5.3mで、隅の直角な正方形を呈する。壁は直線的で、整然とした形状をもつ。

面積 26.82m²　　**方位** N−74°−E

床面 ローム土を40〜52cm掘り込んで床面としている。竈の周辺を中心として、全体的に堅く踏み固められている。北側が若干低くなる。

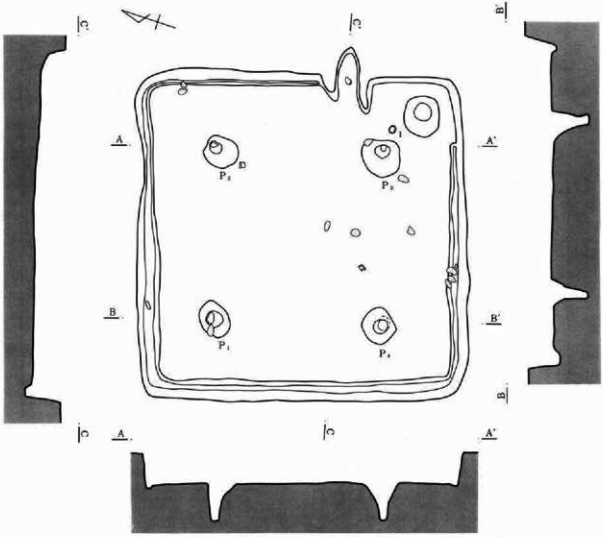
柱穴 住居の対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、一辺が2.8mの正方形となる。各柱穴の深さはP_1：55cm、P_2：58cm、P_3：58cm、P_4：56cmを測る。

竈址 東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は約30〜50cm残存し、褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅30cmで、壁内側に造り付けられるものと思われる。煙道は燃焼部から約70°の角度で立ち上る。支脚は検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に位置する。長径64×短径57cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。

周溝 貯蔵穴の位置する北東隅と竈周辺を除いてほぼ完周する。規模は幅7〜27cm、深さ2〜10cmを測る。東・南壁沿いはやや幅が狭くなっている。

遺物 土器は完形の坏が1点と少量の破片が出土しているが、いずれも床面より10cm前後浮いた状態で出土した。また南壁沿いやP_3・P_4の柱穴周辺に、長径15×短径5〜10cmの河原石が集中して出土した。　　（土器観察表：22頁）



第70図　C区5号住居址　　L：80.40m

E 区 5 号住居址

位　置　B－39　　**写　真**　PL15－1～3、43

形　状　正方形に近い台形を呈する。四辺のうち、南辺が約40cmほど短いが、他の三辺は長さ5.4mを測る。隅は直角で、直線的な壁をもつ。

面　積　27.51m²　　**方　位**　N－6°－W

床　面　ローム土を29～50cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、中央が若干高くなる。

柱　穴　4個検出されたが、その内の1個は住居の対角線上からずれている。各柱穴の心々間の距離は、P_1－P_2：2.6m、P_2－P_3：2.3m、P_3－P_4：2.5m、P_4－P_1：3.0mである。各柱穴の深さはP_1：28cm、P_2：26cm、P_3：40cm、P_4：40cmを測る。

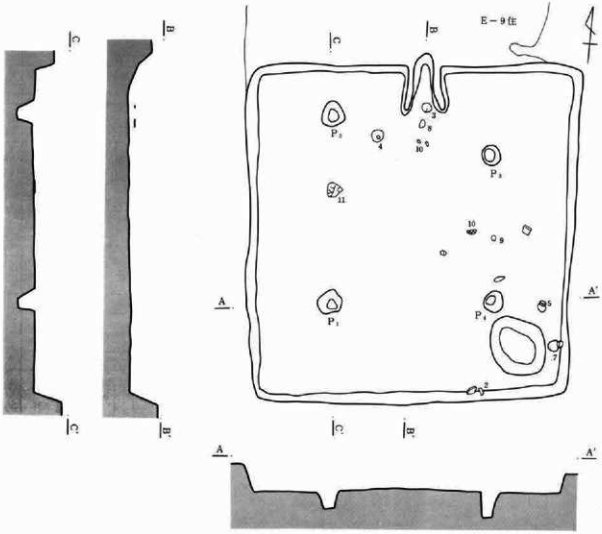
竈　址　北壁の中央に位置する。袖部は両袖が約70cm残存し、褐色粘質土で構築されている。燃焼部は幅30cm、奥行約60cmで、壁内側に造り付けられる。煙道は燃焼部から約60°の角度で立ち上る。焚口部には坏（3）が逆位に出土したが、支脚として使用されていた可能性もある。

貯蔵穴　南東隅に位置する。やや歪んでいるが、一辺90cmの隅丸方形状を呈し、深さ55cmを測る。

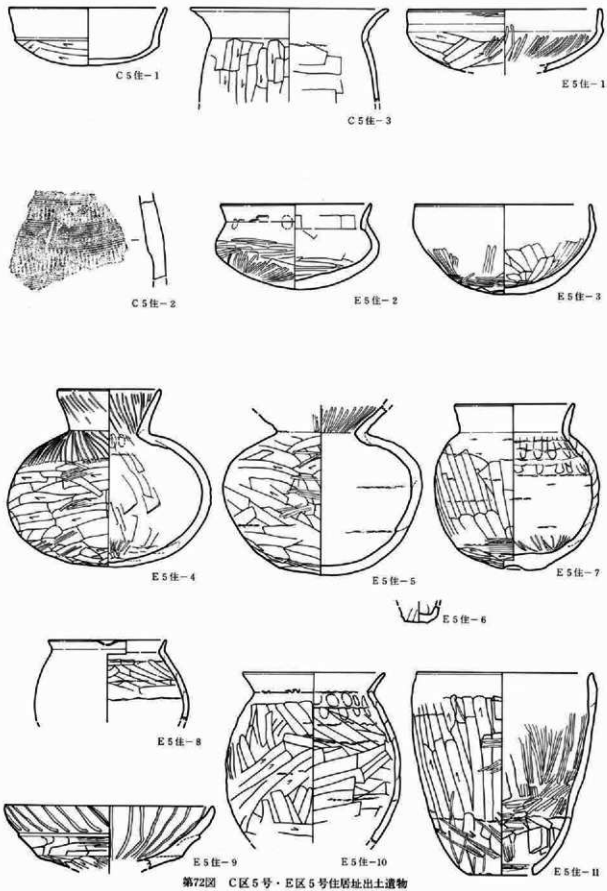
遺　物　竈と貯蔵穴の周辺に集中して土器が出土した。4～7・10・11の土器は床面に密着して出土した。　（土器観察表：22・23頁）

重　複　北側を4号住居址に切られている。

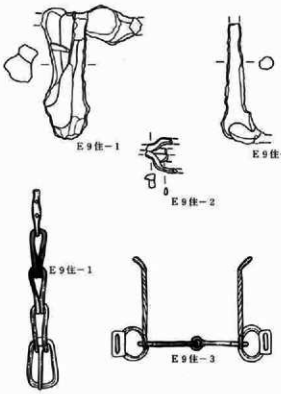
備　考　周溝は検出されなかった。



第71図　E区5号住居址



第72図　C区5号・E区5号住居址出土遺物



第73図　E区9号住居址出土遺物

E区9・10号住居址

位　置　B－36～37

写　真　PL16－5～8、44、45、15－4～5、44

形　状　他の住居址や相互の切り合い、および一部未発掘のために確認できなかった。

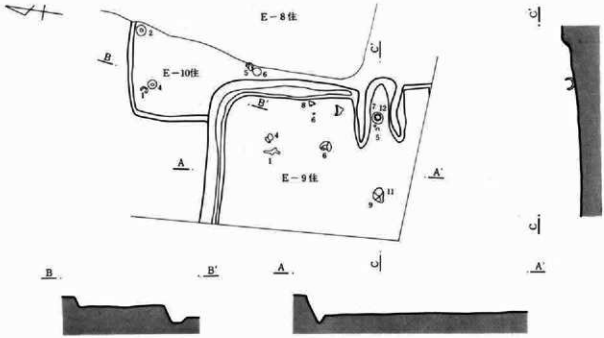
面　積　不明　　**方　位**　N－84°－E（9住）

床　面　9号住居址は41～43cm、10号住居址は12～16cmいずれもローム土を掘り込んで床面としている。特に堅い面は検出されなかった。

竈　址　9号住居址のみ検出された。東壁に位置する。袖部は両袖が約90cm残存し、褐色粘質土で構築されている。燃焼部は幅40cmで、壁内側に造り付けられている。また、その中央には甕（12）が出土しているが、掛口に置かれていたものと思われる。

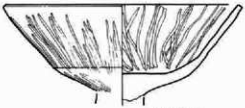
周　溝　9号住居址のみ検出された。竈の左袖北側は壁に沿ってめぐっているが、右袖の南側では確認されていない。

遺　物　9号住居址では4・6・8・9の土器と1～3の鉄製品が、10号住居址では2・5の高坏がそれぞれ床面に密着して出土した。1は鎧、3は轡のそれぞれ一部分である。2も馬具の一部品と思われる。　（土器観察表：23・24頁）



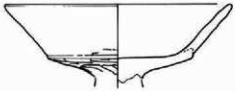
第74図　E区9・10号住居址

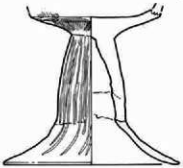
E 9住－4

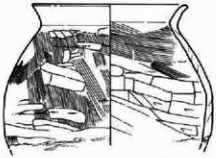

E 9住－6

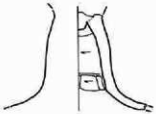
E 9住－9

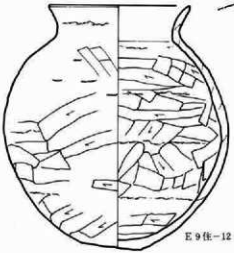
E 9住－10(½)

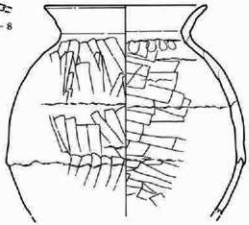

E 9住－7

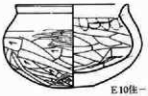

E 9住－5

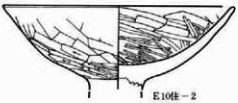

E 9住－11

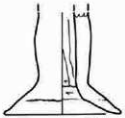

E 9住－8


E 9住－12


E 9住－13


E10住－1


E10住－2


E10住－3

E10住－4

E10住－5

E10住－6

第75図　E区9・10号住居址出土遺物

E 区 16 号 住 居 址

位　置　C－43　**写　真**　PL17－1～5、45、46

形　状　長軸を東西にもち、隅がほぼ直角な台形を呈する。長辺6.7×短辺6.4・6.1mを測る。

面　積　43.47m²　**方　位**　N－80°－W

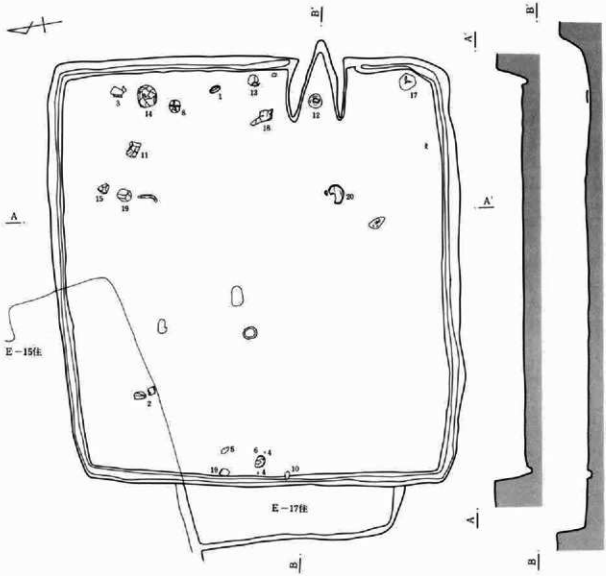
床　面　ローム土を35～54cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、中央部が若干高くなる。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は約100cm残存し、褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅50cm、奥行約80cmで、壁内側に造り付けられている。また中央部には高坏（12）を倒置し、支脚として使用している。煙道は幅20cmで、燃焼部から約60°の角度で立ち上る。

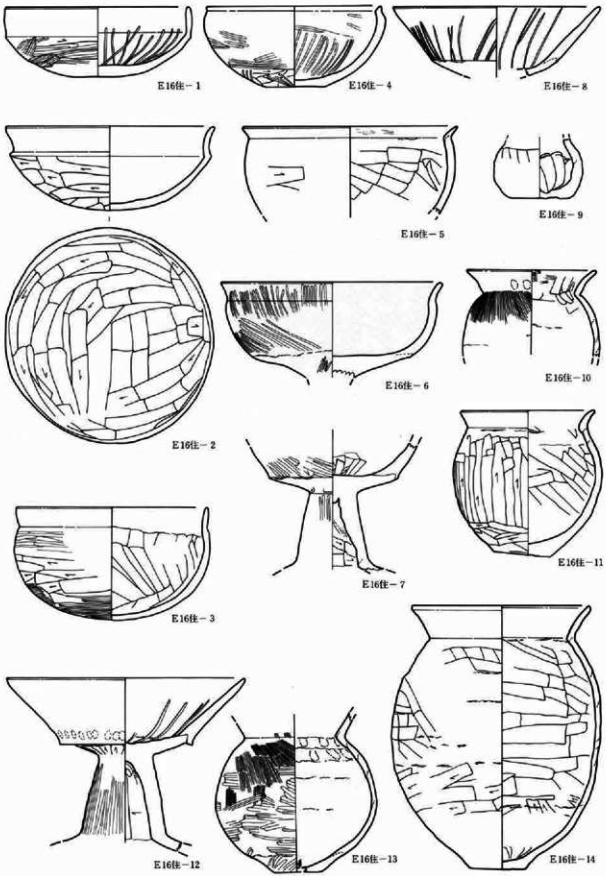
周　溝　四壁を完周し、規模は幅8～15cm、深さ6～10cmを測る。

遺　物　多数の土器が床面に密着して出土した。21・22の蛇紋岩製品はいずれも埋土中から出土したものである。21の紡錘車は上下面とも研磨され、側面に調整痕が縦縞状に残る。中央の孔は上面から下面への片面穿孔である。22の模造品は外縁が刃状に研磨され、上下面に筋状の整形痕が残る。中央の孔は片面穿孔である。　（土器観察表：24・25頁）

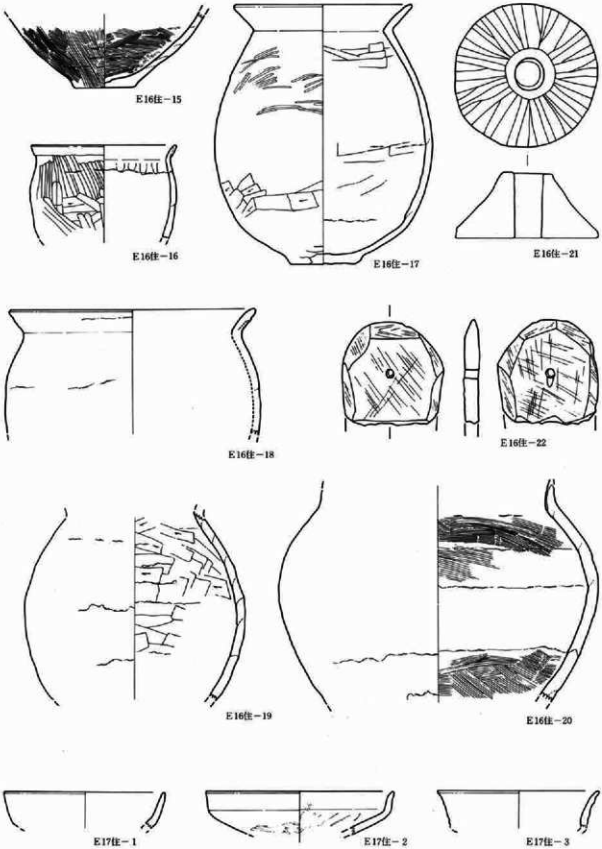
備　考　隣接する17号住居址の全容は不明で、少量の土器が埋土中より出土した。（土器観察表:25・26頁）



第76図　E区16・17号住居址　　L：80.20m



第77図　E区16号住居址出土遺物



第78図　E区16・17号住居址出土遺物

E区7号住居址

位　置　B−38

写　真　PL16−1〜4、43

形　状　一辺が4.6mで、隅の直角な正方形を呈する。壁は直線的である。

面　積　20.09m²　　**方　位**　N−78°−E

床　面　ローム土を40〜48cm掘り込んで床面としている。竈を中心とした東半分は、かなり踏み固められている。

柱　穴　住居の対角線上に4個検出された。各柱穴の心々間の距離は2.4×1.9mである。各柱穴の深さはP_1：39cm、P_2：35cm、P_3：36cm、P_4：32cmを測る。

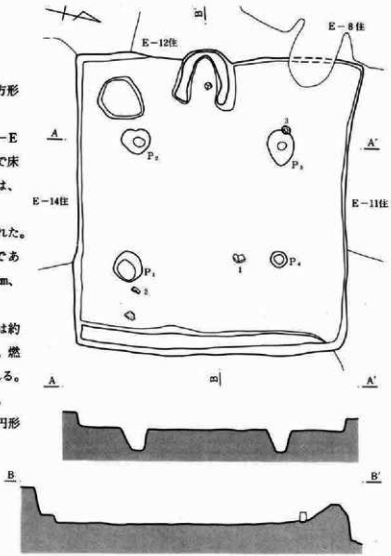
竈　址　西壁の中央に位置する。袖部は約70cm残存し、褐色粘質土で構築される。燃焼部は幅50cmで、壁内側に造り付けられる。中央には自然石が支脚として置かれる。

貯蔵穴　南西隅に位置する。径70cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。

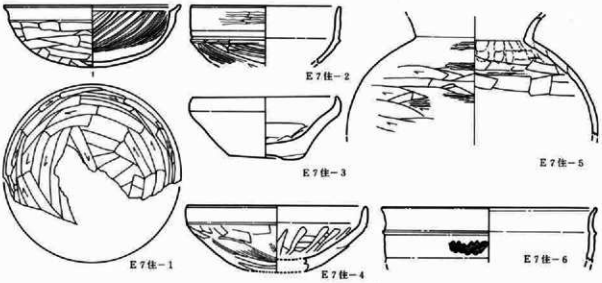
遺　物　2が床面密着の他は、全て埋土中からの出土である。

（土器観察表：27頁）

備　考　周溝は検出されなかった。



第79図　E区7号住居址



第80図　E区7号住居址出土遺物

第2表 弥生・古墳時代住居址の観察一覧 (単位：m)

番号	位置	形状	規模	面積	方位	炉・竈	柱穴	貯蔵穴	周溝	備考
A−11	Q−6	隅丸長方形	7.0×5.3	37.88	N−36°−E	中央南	不明	西壁中央	無	竜見町期
A−21	C′−15	隅丸長方形	7.4×5.3	35.98	N−65°−E	炉不明	5個	無	無	〃
A−15	H′−18	長方形	4.3×3.6	16.65	N−11°−W	炉不明	無	無	無	石田川期
A−9	Y−17	正方形	3.2×3.1	9.41	N−90°−W	中央西	無	無	無	〃
A−26	Z−15	隅丸正方形	6.6×6.6	42.32	N−84°−E	炉不明	4個	無	無	〃
C−4	Q′−32	隅丸正方形	5.0×5.1	24.81	N−81°−E	炉不明	4個	無	無	〃
C−6	P′−31	隅丸長方形	5.4×4.5	23.19	N−2°−E	炉不明	3個	無	一部欠	〃
C−8	J′−31	隅丸正方形	5.5×5.5	28.46	N−17°−E	炉不明	4個	北東隅	無	〃
C−9	H′−31	隅丸長方形	4.6×3.5	17.7	N−83°−E	炉不明	4個	無	無	〃
C−10	N′−30	隅丸長方形	6.1×？		N−68°−E	炉不明	3個	無	無	〃
B−4	X−33	隅丸長方形	5.2×4.4	22.39	N−82°−E	中央	2個	無	完周	和泉期
B−11	X−26	隅丸正方形	6.0×6.0	37.16	N−73°−E	中央南	3個	南東隅	無	〃
C−7	Y−31	隅丸長方形	4.1×3.5	14.02	N−3°−E	中央北	3個	南東隅	完周	〃
B−5	W−25	不整方形	3.6×3.2	9.77	N−48°−W	中央西	1個	無	無	〃
E−3	F−44	長方形	4.2×3.7	14.59	N−10°−W	中央西	無	無	無	〃
A−4	W−15	長方形	5.0×4.2	20.58	N−79°−E	東壁中央	無	南東隅	一部欠	鬼高期
A−2	X−11	隅丸長方形	3.1×2.7	8.08	N−76°−E	東壁南	無	無	無	〃
A−7	X−17	隅丸正方形	3.5×3.5	11.88	N−80°−W	東壁南	無	無	無	〃
A−8	X−16	隅丸台形	4.1×3.4	15.68	N−70°−W	西壁南	無	無	無	〃
A−13	J′−18	長方形	5.8×？		N−66°−N	東壁中央	2個	無	無	〃
A−14	H′−17	方形	4.2×？		N−78°−E	東壁南	無	無	無	〃
A−18	F′−16	隅丸台形	4.4×3.6	15.5	N−77°−W	東壁南	無	無	無	〃
A−16	G−18	長方形	3.6×3.0	10.33	N−85°−W	東壁中央	無	無	無	〃
A−28	Z−16	正方形	5.7×5.7	31.84	N−15°−E	北壁中央	4個	北東隅	完周	〃
A−23	Y−15	長方形	3.3×2.6	8.61	N−29°−W	竈不明	無	無	無	〃
B−2	X−30	正方形	6.0×6.0	35.51	N−88°−E	東壁中央	4個	南東隅	完周	〃
B−7	W−35	隅丸方形	3.8×3.8	14.18	N−73°−E	東壁中央	3個	南東隅	無	〃
B−8	W−38	台形	6.0×5.5	32.27	N−32°−W	北壁東	4個	北東隅	一部欠	〃
B−12	Y−27	隅丸正方形	4.9×4.9	23.33	N−12°−W	北壁中央	4個	北東隅	完周	〃
E−12	B−37	不明			N−88°−W	竈不明	無	南西隅	無	〃
B−13	X−23	隅丸長方形	3.6×2.3	8.0	N−76°−E	竈不明	無	無	無	〃
C−1	T′−31	隅丸台形	4.7×4.3	17.28	N−60°−E	東壁中央	無	無	無	〃
C−2	T′−30	隅丸正方形	5.3×5.3	28.13	N−18°−W	北壁中央	4個	北東隅	無	〃
C−3	R′−30	隅丸長方形	6.6×5.5	34.98	N−67°−E	西壁中央	4個	無	完周	〃
C−5	P′−32	正方形	5.3×5.3	26.82	N−74°−E	東壁南	4個	南東隅	一部欠	〃
E−5	B−39	台形	4.0×5.4	27.51	N−6°−W	北壁中央	4個	南東隅	無	〃
E−9	B−36	不明			N−84°−E	東壁	無	無	一部有	〃
E−10	B−37	不明				竈不明	無	無	無	〃
E−16	C−43	台形	6.7×6.4	43.47	N−80°−W	東壁南	無	無	完周	〃
E−17	C−42	不明			N−3°−E	竈不明	無	無	無	〃
E−7	B−38	正方形	4.6×4.6	20.09	N−78°−E	西壁中央	4個	南西隅	無	〃

A 区 24 号 住 居 址

位 置 Z－15　　**写 真** PL 9－5～6、37

形 状 一辺が3.7mで、隅が直角の正方形を呈する。西壁はほぼ直線的である。

面 積 14.13㎡　　**方 位** N－85°－E

床 面 26号住居址の埋土を25～46cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

竈 址 東壁の中央に位置する。燃焼部の幅は35cmで、壁外側に造り出している。煙道は幅20cmで、燃焼部から約25°の角度でゆるやかに立ち上る。

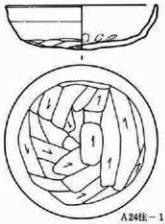
貯蔵穴 北東隅に位置している。長径100×短径60cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺 物 数点の土器が出土したのみである。1の坏は壁ぎわに床面より10cm浮いた状態で出土した。

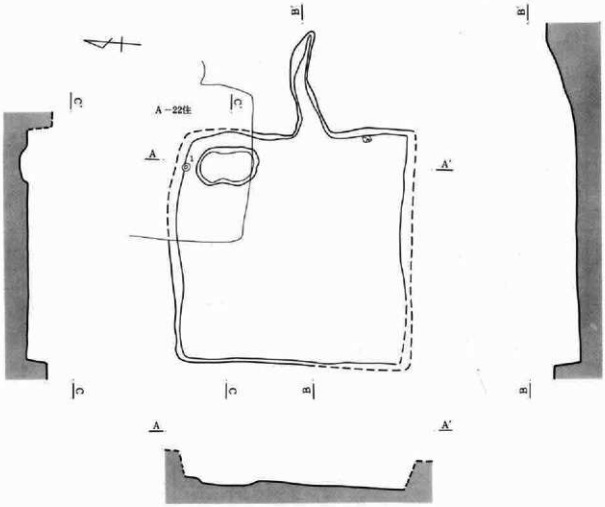
（土器観察表：27頁）

重 複 北側を22号住居址によって切られている。

備 考 26号住居址の黒褐色の埋土を掘り込んでいるために柱穴・周溝は検出されなかった。



第81図　A区24号住居址出土遺物



第82図　A区24号住居址

L：79.00m

A区1号住居址

位　置　Y−14　　**写　真**　PL18−1〜2、47

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。長辺5.6×短辺4.2mを測る。

面　積　22.50m²　　**方　位**　N−90°−E

床　面　ローム土を15〜50cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、起伏も少ない。

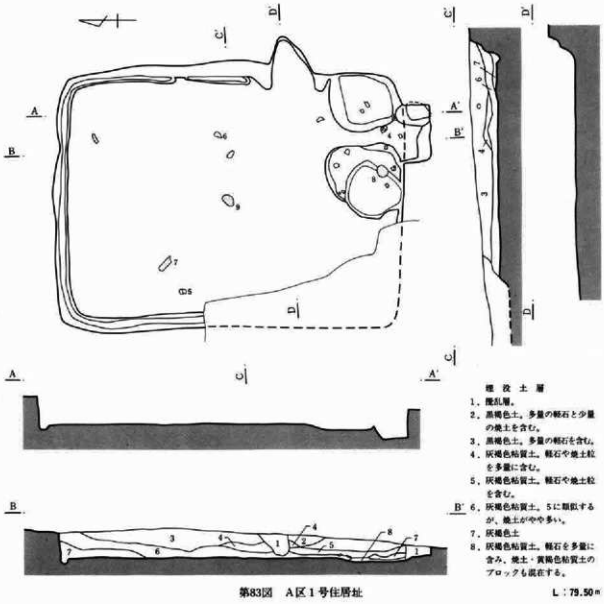
竈　址　東壁中央の南寄りに位置する。袖部は約15cm残存し、ローム土を掘り残して構築される。燃焼部は幅65cmで、一部が壁外側に造り出されるものと思われる。煙道は幅30cmで、一部が残存する。

貯蔵穴　南東隅に位置する。長辺110×短辺90cmの隅丸方形を呈し、深さ10cmを測る。

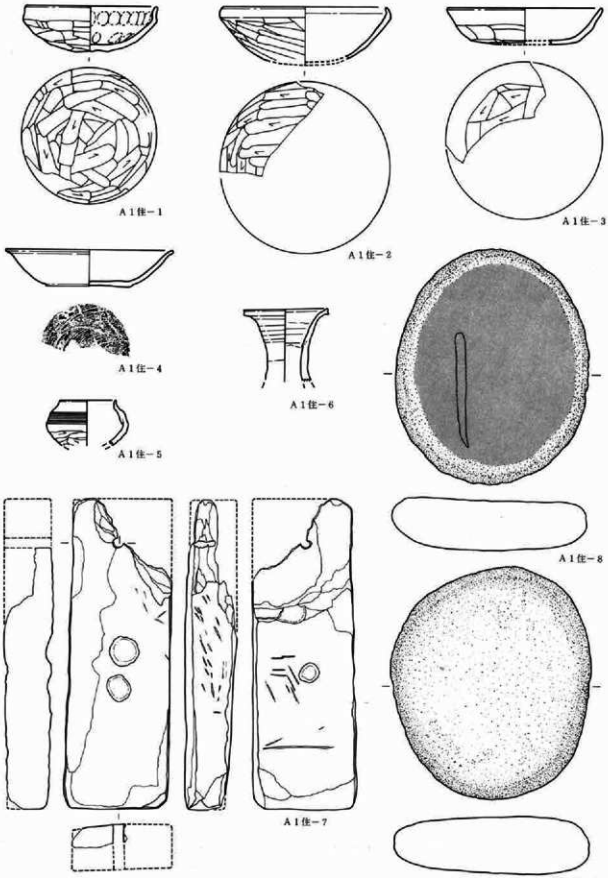
周　溝　西・南壁沿いの一部で未検出となっている。規模は幅10〜15cm、深さ8〜10cmを測る。

遺　物　床面に密着していた遺物として7・9の石製品があるが、土器はいずれも床面より10cm前後浮いて出土した。7は結晶片岩製で、側面は研磨されており、部分的に調整痕がみられる。表裏面には回転による深さ4mmほどのU字状の窪みが各2箇所につけられている。また1箇所に径7mmの孔が片面穿孔されている。8は石英閃緑岩で、片面が磨滅し、幅7mm、深さ1mmの筋状の擦痕が1条認められる。

（土器観察表：27・28頁）



第83図　A区1号住居址



第84図　A区1号住居址出土遺物

A 区 19 号 住 居 址

位　置　D′—15

写　真　PL47

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は若干膨らみ、長辺4.4×短辺4.1mを測る。

面　積　17.58m²　　**方　位**　N—88°—W

床　面　ローム土を7～45cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められており、中央部が若干高くなる。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は20～40cm残存し、褐色粘質土で構築されている。また左袖端部には自然石があり、補強材として使用されたものと思われる。燃焼部は幅40cmで、壁内側から壁外側にかけて造り出される。煙道は幅20cmを測り、燃焼部から一担水平に延びた後に、緩やかに立ち上っている。

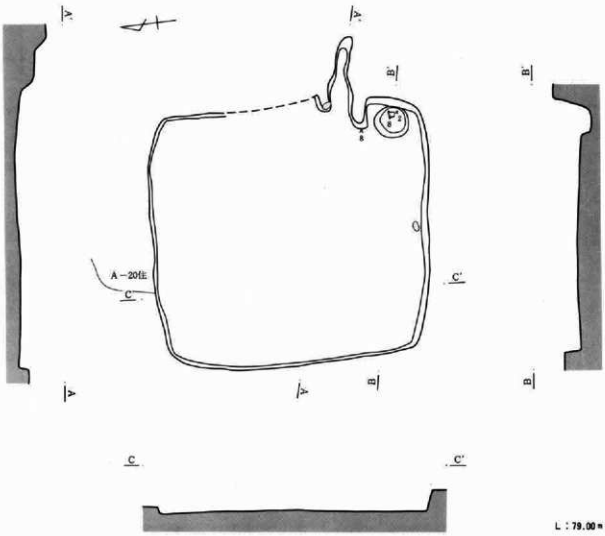
貯蔵穴　南東隅に位置する。直径50cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。

遺　物　2・8の土器が貯蔵穴内より出土しているが、他の土器は埋土中からの出土である。また床面に密着した遺物として、南壁に接して長径15×短径7cmの河原石が出土している。

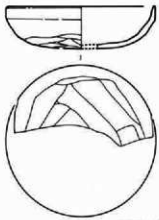
（土器観察表：28頁）

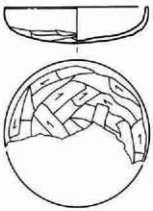
重　複　北壁から東壁にかけて20号住居址と重複しているが、19号住居が20号住居を切って掘り込まれている。

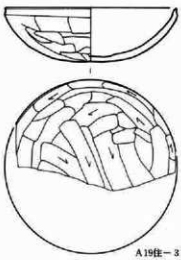
備　考　柱穴および周溝は検出されなかった。

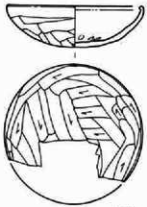


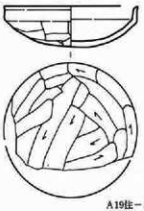
第85図　A区19号住居址

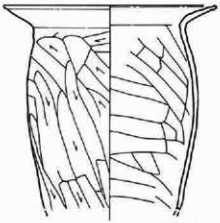

A19住－1


A19住－2

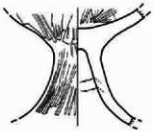

A19住－3

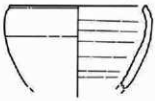

A19住－4


A19住－6

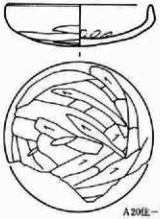

A19住－8

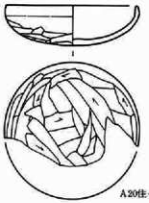
A19住－5


A19住－7


A19住－9

A20住－3


A20住－1


A20住－2

第86図　A区19・20号住居址出土遺物

A区20号住居址

位　置　E′−16

写　真　PL47

形　状　長軸を東西にもち、隅の丸い長方形を呈する。西側を19号住居址によって切られているために明確ではないが、壁はやや膨らみをもち、長辺5.4×短辺5.0mを測る。

面　積　26.7㎡

方　位　N−87°−W

床　面　ローム土を22〜49cm掘り込んで床面としている。竈の周辺を中心として、全体的に良く踏み固められている。北側が若干高まりをもち、南側に向って緩やかに傾斜している。

柱　穴　精査にもかかわらず、検出されなかった。

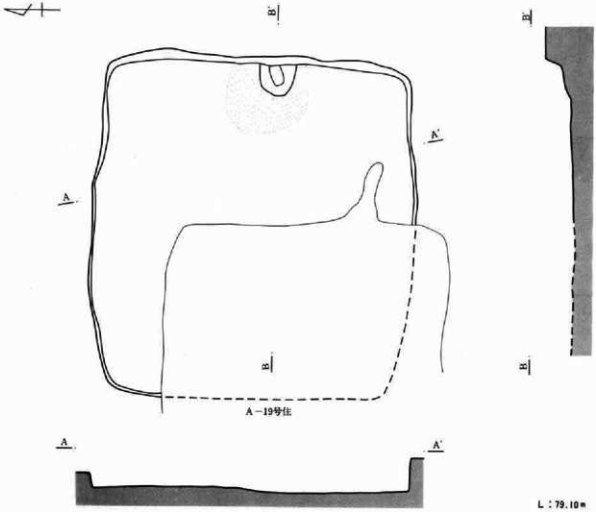
竈　址　東壁の中央に位置する。上層からの攪乱によって破壊されているため、わずかな痕跡をとどめるのみである。燃焼部の掘り方の窪みを中心として半円形状に焼土が散布していた。

遺　物　少量の土器片が出土しているが、いずれも埋土中から出土したものである。

（土器観察表：29頁）

重　複　西壁から南壁にかけて、19号住居址によって切られている。

備　考　貯蔵穴および周溝は検出されなかった。



第87図　A区20号住居址

B区9号住居址

位　置　X－23

写　真　PL19－4～5、48

形　状　一辺が3.3mで、隅の直角な正方形を呈する。壁は若干の膨らみをもつ。

面　積　10.75㎡　　**方　位**　N－87°－E

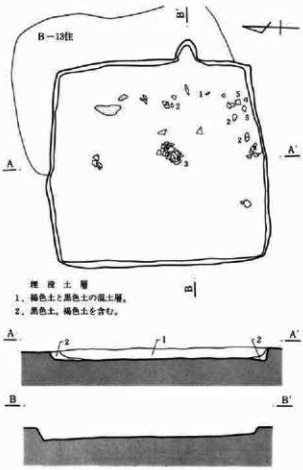
床　面　ローム土を11～20cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、東西側が若干高い。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は存在しない。燃焼部は幅25cmで、半円形に掘り込まれており、壁外側に迫り出される。煙道は確認できなかった。

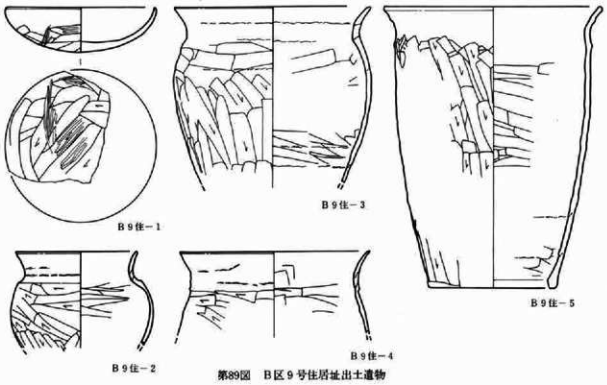
遺　物　住居の東半に比較的集中して、土器や自然石が出土した。1・2・5の土器が床面に密着していたが、他の土器は埋土中から出土した。5は住居中央部に押しつぶされた状態で出土した。他に長径30×短径15cmの河原石が床面に密着して出土している。　　（土器観察表：29頁）

重　複　東側で13号住居址を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第88図　B区9号住居址　　L：79.75m



第89図　B区9号住居址出土遺物

B区1号住居址

位置 W−24　　**写真** PL19−1〜3、48

形状 長軸を南北にもち、隅が直角な長方形を呈する。長辺5.0×短辺3.2mを測るが、北西隅に1.4×0.7mの張り出し部をもっている。

面積 16.38m²　　**方位** N−82°−E

床面 ローム土を34〜60cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はないが、張り出し部の付近が若干低くなっている。

竈址 東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は30〜40cm残存し、黄褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅40cmで、壁内側から壁外側にかけて造り出される。煙道は幅15cmで、燃焼部から約30°の角度で緩やかに立ち上る。

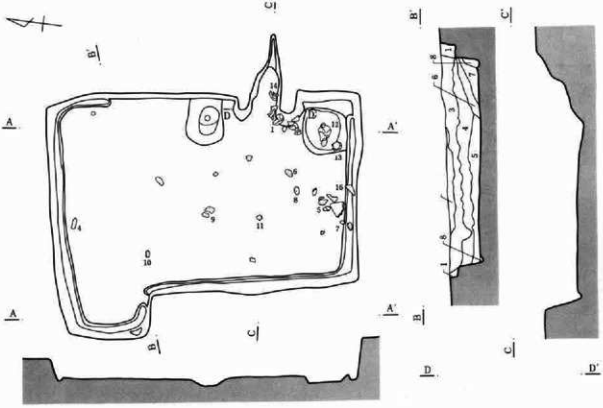
貯蔵穴 東壁中央と南東隅に各1個検出された。前者は長辺73×短辺55cmの長方形を呈し、後者は径70cmの円形を呈する。それぞれの深さは20cmと10cmである。後者の底面付近から坏(13)が出土している。

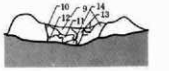
周溝 東壁と張り出し部のコーナーの一部で途切れている。規模は幅10〜15cm、深さ2〜6cmを測る。

遺物 竈の付近を中心として、土器や使用痕をもつ河原石が出土している。1は竈の右袖に接して、また14は竈内より出土した。12・13は床面に密着して出土した。河原石のうち、4・6は先端に打痕を残し、11は片側面が磨滅している。5は片側面と表裏面が磨滅している。4・6・9・11は床面に密着して出土した。　(土器観察表：29・30頁)

重複 北側で5号住居址を切っている。

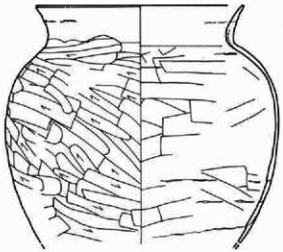
備考 柱穴は検出されなかった。

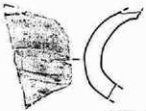


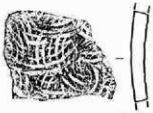


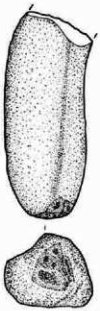
堆積土層
1、攪乱層。
2、黒色土。軽石を多量に含む。
3、黒褐色土。軽石を含む。
4、黒色土。軽石と焼土を含む。
5、黒色土。
6、黒褐色土。軽石を少量含む。
7、黄灰色土。
8、黄灰色土。しまりのない土。
9、灰褐色土。焼土を含む。
10、黄灰色粘質土。焼土を含む。
11、黄色粘質土。焼土を含む。
12、灰と焼土の混土層。
13、灰褐色土。軽石を含む。
14、焼土・灰・炭化物の混土層。

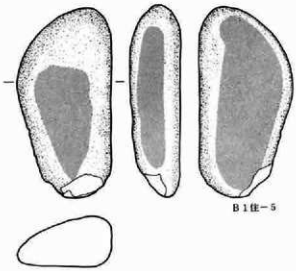
第90図　B区1号住居址　　L：79.80m


B1住−1

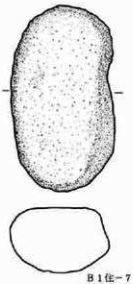

B1住−2

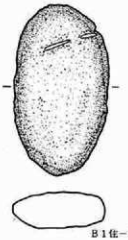

B1住−3

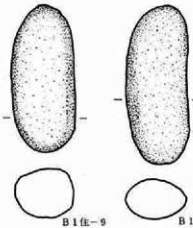

B1住−4


B1住−5

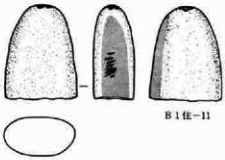
B1住−6


B1住−7

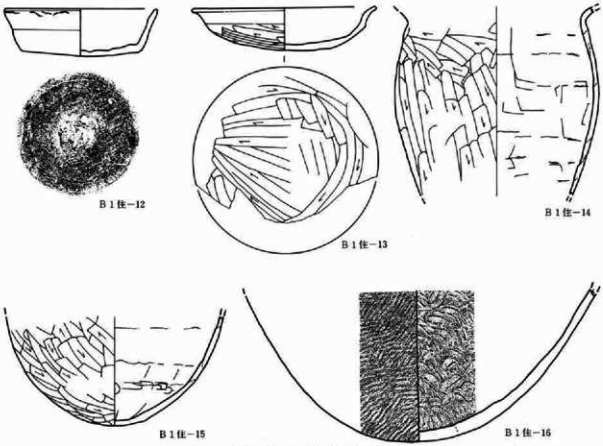

B1住−8


B1住−9

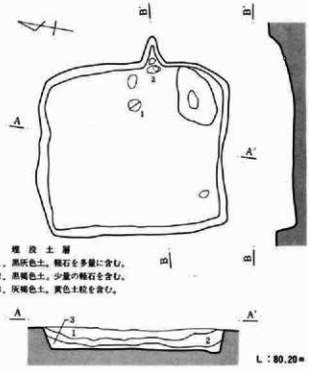
B1住−10


B1住−11

第91図　B区1号住居址出土遺物



第92図　B区1号住居址出土遺物



煙道土層
1．黒灰色土。輝石を多量に含む。
2．黒褐色土。少量の輝石を含む。
3．灰褐色土。黄色土粒を含む。

第93図　B区3号住居址

B区3号住居址

位　置　W−31　　**写　真**　PL18−5〜6、48

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。やや歪んでいるが長辺3.0×短辺2.7mを測る。

面　積　7.80㎡　　**方　位**　N−76°−E

床　面　ローム土を24〜41cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は検出されなかった。燃焼部は幅30cmで、壁外側に造り出される。煙道は幅15cmで、燃焼部から緩やかに立ち上る。焚口部からは坏（2）が逆位に出土した。

貯蔵穴　南東隅に位置する。長径100×短径60cmの楕円形を呈し、深さ34cmを測る。

遺　物　少量の土器のほかに自然石が2点出土している。2を除いていずれも床面より5cm前後浮いた状態で出土した。　（土器観察表：30頁）

備　考　柱穴・周溝は検出されなかった。

B区6号住居址

位　置　W−33

写　真　PL18−7〜8、48

形　状　長軸を南北にもち、隅のほぼ直角な長方形を呈する。壁は直線的で、長辺4.1×短辺3.7mを測る。

面　積　14.58m²

方　位　N−83°−E

床　面　ローム土を31〜36cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はないが、北西側に直径70cm、深さ10cm程度の窪みがある。

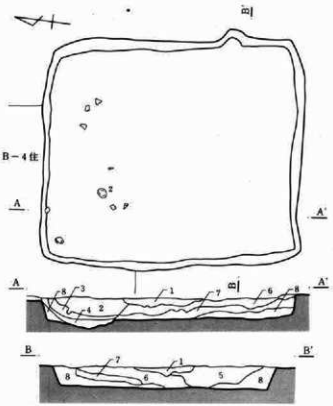
竈　址　東壁中央の南寄りに位置する。燃焼部の掘り込みが、約15cmほど壁外側に張り出している他は、袖部や煙道などの顕著な痕跡は認められなかった。

遺　物　少量の土器が出土したのみである。2の坏は床面に密着して出土した。

（土器観察表：30頁）

重　複　北西側で4号住居址を切っている。

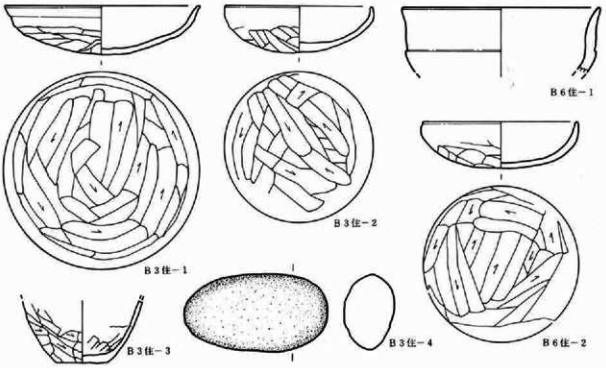
備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は未検出である。



竈 焼 土 層

1、黒褐色土。軽石を含む。
2、褐色土。地土・粘土粒を含む。
3、地土と灰との混土層。
4、褐色土。黄色粘質土を含む。
5、黒褐色土。軽石を含む。
6、褐色土。黄色砂質土を含む。
7、黒色土。黄色砂質土を含む。
8、褐色土。軽石を含む。

第94図　B区6号住居址　　L：80.30m



第95図　B区3・6号住居址出土遺物

E区4号住居址

位　置　C－39

写　真　PL48

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い台形を呈する。南側で5号住居址と重複するために、壁の一部が未検出であった。壁は若干の膨らみをもち、長辺が5.1mで、短辺は4.9mと4.2mを測る。

面　積　22.91m²

方　位　N－86°－W

床　面　ローム土を4～11cm掘り込んで床面としている。竈の周辺を中心として若干踏み固められている。南東側がわずかに高く、北側へ向って緩やかに傾斜している。

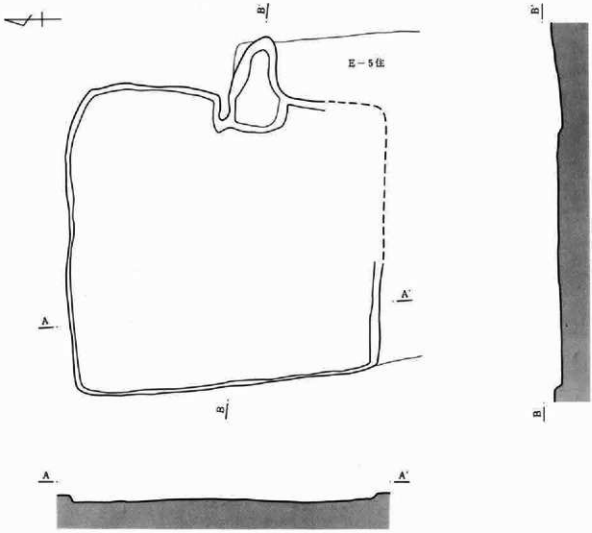
竈　址　東壁のほぼ中央に位置する。袖部は左袖が40cm残存し、褐色粘質土によって構築されている。右袖は崩壊している。燃焼部は幅70cmで、深さ10cmほどの掘り込みをもち、壁内側から壁外側にかけて造り出されている。煙道は一部残存し、燃焼部から緩やかに立ち上る。

遺　物　少量の土器が検出されたが、いずれも床面より10cm前後浮いた状態で出土したものである。

（土器観察表：31頁）

重　複　南側で5号住居址を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第96図　E区4号住居址

E 区 15 号 住 居 址

位 置 D−43　　**写 真** PL48

形 状 南側で16号住居址と重複していることや、北半部が未発掘であるために詳細は不明である。

面 積 不 明　　**方 位** N−82°−E

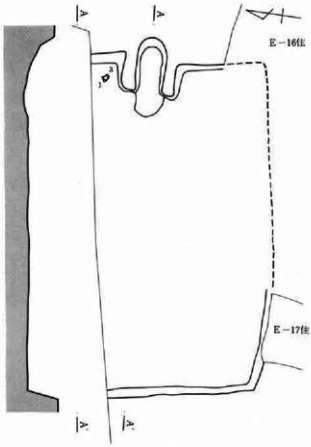
床 面 ローム土を45〜52cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、東側が若干高くなる。

竈 址 東壁に位置する。袖部は約50cm残存し、褐色粘質土によって構築されている。燃焼部は幅40cm奥行 70〜80cmで、壁内側に造り付けられている。煙道は明確ではないが、燃焼部から約70°の角度で立ち上る。

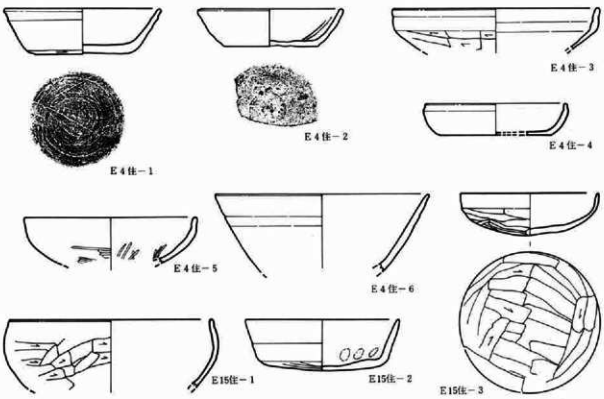
遺 物 約½の範囲が未発掘であるために、検出された土器は少ない。竈の右袖に近接した床面より1・3の坏が出土したが、1の上に3が重ねられていた。　(土器観察表：31頁)

重 複 南側で16号住居址を切っている。

備 考 柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第97図　E区15号住居址　　L：80.68m



第98図　E区4・15号住居址出土遺物

E区8号住居址

位 置 B−37　　**写 真** PL48

形 状 長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は若干の膨らみをもち、長辺4.7×短辺4.0mを測る。南側で12号住居址と重複するため、一部の壁の立ち上りが不明となっている。

面 積 22.25m²　　**方 位** N−86°−W

床 面 ローム土を25〜35cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められ、中央部が若干低くなっている。

柱 穴 P_1とP_2が住居の対角線上に位置するが、P_3・P_4は若干ずれている。各柱穴の心々間の距離は、P_1〜P_2：2.0m、P_2〜P_3：3.2m、P_3〜P_4：1.9m、P_4〜P_1：2.7mを測る。また各柱穴の深さはP_1：24cm、P_2：11cm、P_3：30cm、P_4：21cmとなる。

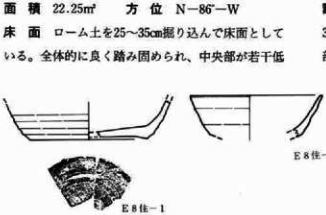
竈 址 東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は30cm残存し、褐色土によって構築されている。燃焼部は幅65cmで、壁外側に造り出される。煙道は検出できなかった。

遺 物 少量の土器片が出土しているが、いずれも埋土中から検出されたものである。

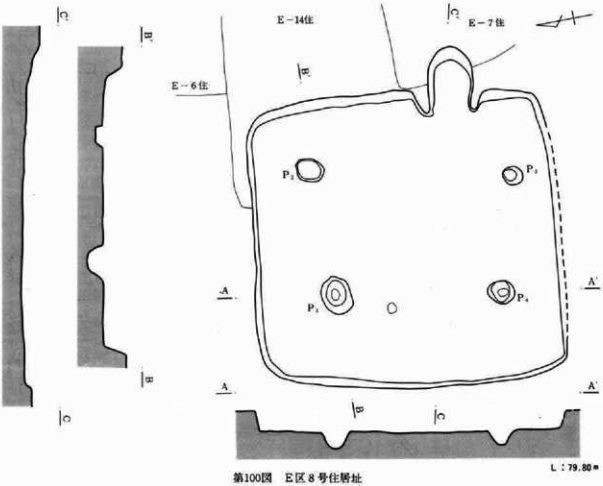
（土器観察表：31頁）

重 複 東側で7・14号住居址を、南側で12号住居址を、また西側で10号住居址をそれぞれ切っている。

備 考 貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第99図　E区8号住居址出土遺物



第100図　E区8号住居址

A区5号住居址

位　置　X−15

写　真　PL20−1〜2、49

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。長辺3.5×短辺3.0m。

面　積　10.48m²　**方　位**　N−85°−W

床　面　ローム土を66〜70cm掘り込んで床面としている。若干踏み固めているが特に堅い面はなく、東側がやや高くなる。

竈　址　東壁中央の南寄りに位置する。袖部は右袖の一部が10cmほど残存し、褐色粘質土で構築されている。燃焼部は幅40cmで、壁外側に造り出される。

貯蔵穴　南東隅に位置する。長径47×短径38cmの楕円形を呈し、深さ29cmを測る。

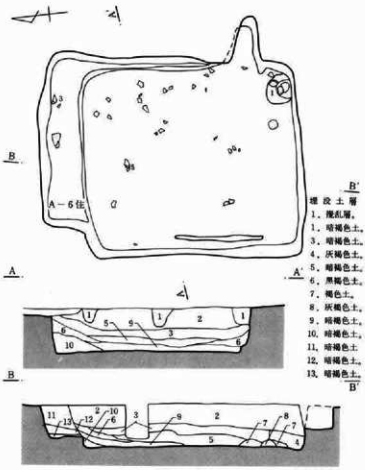
遺　物　1・5の土器が床面に密着していたほかは、埋土中から出土した。

（土器観察表：32頁）

重　複　北側で6号住居を切っている。

備　考　6号住居址の詳細は不明である。

（土器観察表：32頁）



第101図　A区5・6号住居址　L：79.00m

A区10号住居址

位　置　O−6　**写　真**　PL49

形　状　長軸を南北にもち、隅の直角な長方形を呈する。西半部が5号方形周溝墓と重複し、壁の立ち上りが不明瞭となるため、短辺の長さが確定できない。長辺は4.1mを測る。

面　積　不　明　**方　位**　N−79°−W

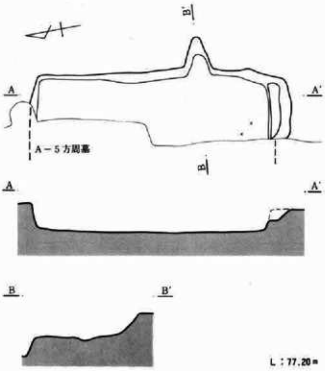
床　面　砂壌土を32〜37cm掘り込み、その上に貼り床をしている。竈の周辺を中心として良く踏み固められている。

竈　址　東壁中央の南寄りに位置する。燃焼部は幅30cmで、壁外側に造り出される。

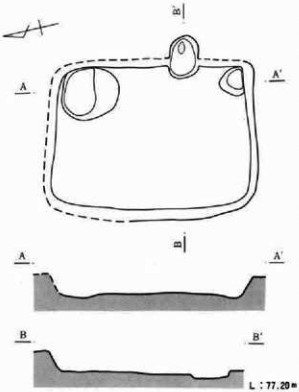
遺　物　少量の土器片が出土したのみである1の塊は床面に密着して出土したものである

（土器観察表：32頁）

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は不明である。



第102図　A区10号住居址



第103図　A区12号住居址

A区12号住居址

位　置　Q－5

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は若干の膨らみをもち、長辺3.2×短辺2.4mを測る。

面　積　8.14m²　　**方　位**　N－80°－W

床　面　砂壌土を24～31cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、西側が若干高くなる。また北東隅が5cm程度円形状に窪んでいる。

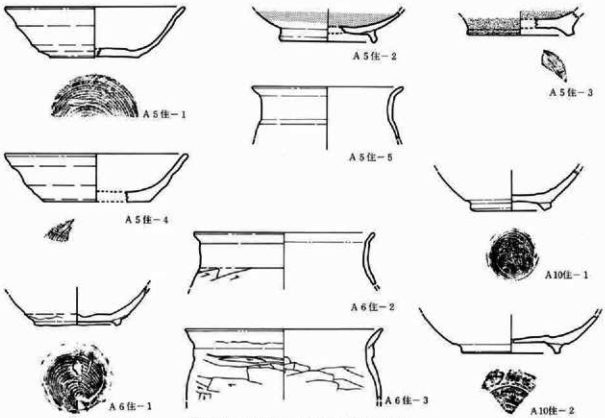
竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。燃焼部は径40cmの半円形に掘り込まれ、壁外側に造り出されている。竈内から自然石が一点出土した。

貯蔵穴　南東隅に位置している。長辺43×短辺40cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺　物　竈内から自然石が出土したのみで、土器は検出されなかった。

重　複　北側で11号住居址を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第104図　A区5・6・10号住居址出土遺物

A区17号住居址

位　置　F′−17　　**写　真**　PL49

形　状　長軸を南北にもち、隅の直角な台形を呈する。壁はほぼ直線的で長辺が4.0m、短辺が3.7mと3.0mを測る。

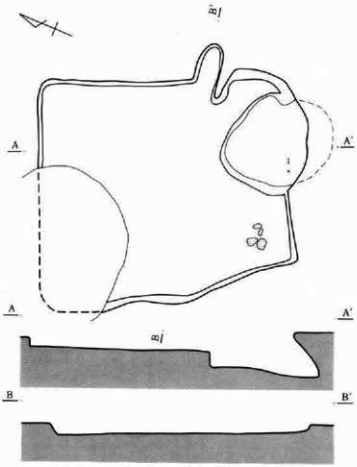
面　積　13.48　　**方　位**　N−69′−E

床　面　ローム土を5〜20cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。袖部は右袖が40cm残存し、褐色土で構築されている。燃焼部は幅30cmで、壁外側に造り出される。

貯蔵穴　南東隅に位置する。上面よりも底面の直径が大きく、袋状を呈する。底面は楕円形を呈し、径140cm、深さ36cmを測る。

遺　物　貯蔵穴やその周辺から少量の土器や自然石が出土した。1の甕は貯蔵穴底面に密着して出土し、また南西隅近くには長径10〜20cm、短径5〜10cmの河原石が4個密集して出土した。（土器観察表：33頁）



第105図　A区17号住居址　　L：79.00m

A区22号住居址

位　置　Z−15　　**写　真**　PL20−3〜4、49

形　状　長軸を南北にもち、隅の直角な長方形を呈する。壁は直線的で、長辺3.2×短辺2.5mを測る。

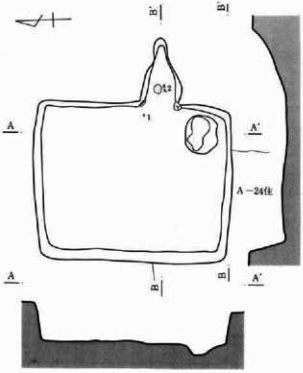
面　積　7.77㎡　　**方　位**　N−85′−W

床　面　ローム土を33〜60cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はなく、南東側が若干低くなる。

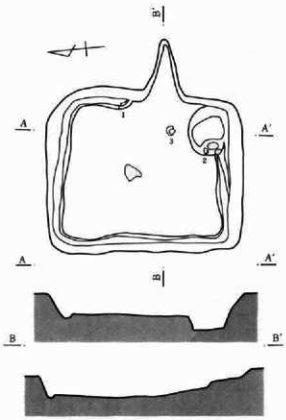
竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。燃焼部は幅50cm、奥行70cmの規模で半円形に掘り込まれ壁外側に造り出される。中央には自然石が支脚として据えられている。焚口部の両側には、自然石が補強材として使用されている。煙道は幅15cmで、燃焼部から約60′の角度で立ち上る。

貯蔵穴　南東隅に位置する。長軸60×短軸50cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。

遺　物　1の坏は床面に密着して、2の甕は竈内よりそれぞれ出土した。　（土器観察表：33頁）



第106図　A区22号住居址　　L：79.00m



第107図　A区25号住居址　L：79.00m

A区25号住居址

位　置　Z－14　　**写　真**　PL20－5～6、49

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁は直線的で、長辺3.1×短辺2.6mを測る。

面　積　7.70㎡　　**方　位**　N－78°－W

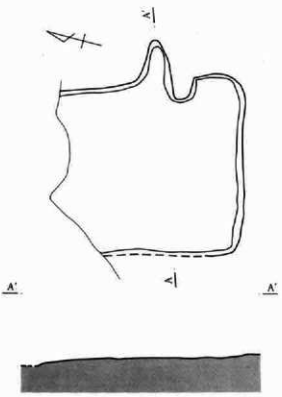
床　面　ローム土を25～38cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められ、南側が若干低くなっている。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は幅40cm、奥行50cmの規模で半円形に掘り込まれ、壁外側に造り出されている。煙道は燃焼部の中段位まで掘り込まれ、ゆるやかに立ち上る。

貯蔵穴　南東隅に位置する。規模は長径75×短径65cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

周　溝　竈と貯蔵穴の周辺を除いて完周する。規模は幅10cm、深さ2～6cmを測る。

遺　物　竈や貯蔵穴周辺に数点の土器と自然石が出土した。3の坏は床面に密着して、4の埦は貯蔵穴内からそれぞれ出土した。　（土器観察表：33頁）



第108図　A区27号住居址　L：79.00m

A区27号住居址

位　置　B'－13

形　状　北半部が流水により侵食されて存在しないために明確ではないが、長軸を南北にもつ長方形を呈すると思われる。隅が丸く、残存している短辺は2.8mを測る。

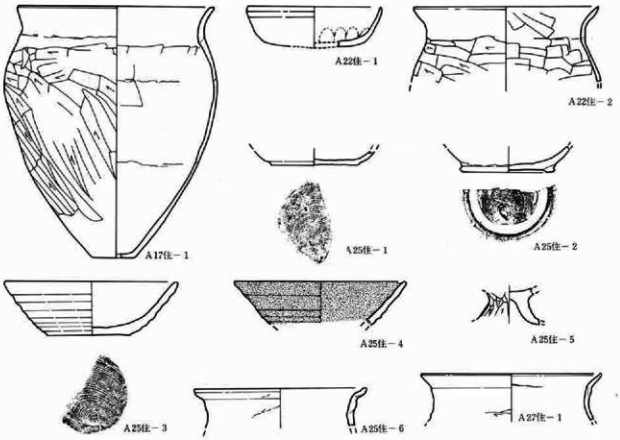
面　積　不　明　　**方　位**　N－70°－E

床　面　ローム土を5～14cm掘り込んで床面としている。竈の周辺がやや高く、緩やかに西側へ傾斜している。特に堅い面はない。

竈　址　東壁のやや南寄りに位置する。袖部は右袖のみ約30cm残存しているが、地山を掘り残して構築される。燃焼部は幅40cmで、壁外側に造り出されている。

遺　物　1の甕が竈内より出土したのみで、他の遺物は検出されなかった。　（土器観察表：33頁）

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第109図　A区17・22・25・27号住居址出土遺物

E 区 2 号 住 居 址

位　置　F－43　　**写　真**　PL49

形　状　上層からの攪乱により南壁と西壁が不明瞭であるが、長軸を南北にもつ長方形を呈すると思われる。長辺3.8×短辺3.0mを測る。

面　積　11.8m²　　**方　位**　N－82°－W

床　面　ローム土を5cm前後掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

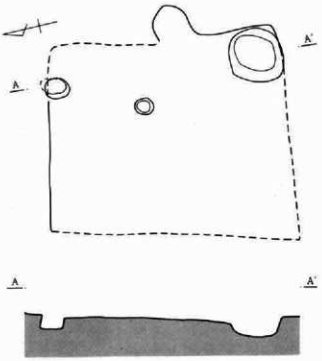
竈　址　東壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は径50cmの半円形に掘り込まれ、壁外側に造り出されている。煙道は不明。

貯蔵穴　南東隅に位置する。直径85cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。

遺　物　少量の土器片が埋土中より出土した。

（土器観察表：34頁）

備　考　住居の中央と北壁沿いに2個の小穴が検出されたが、柱穴として断定できなかった。



第110図　E区2号住居址　　L：80.50m

E 区 6 号住居址

位　置　C－38　　**写　真**　PL49

形　状　南側で7・14号住居址と重複して壁の立ち上りが不明瞭であるために確定できないが、長軸を東西にもち、隅が直角の長方形を呈すると思われる。壁は直線的で、長辺4.8×短辺3.5mを測る。

面　積　不　明　　**方　位**　N－85°－W

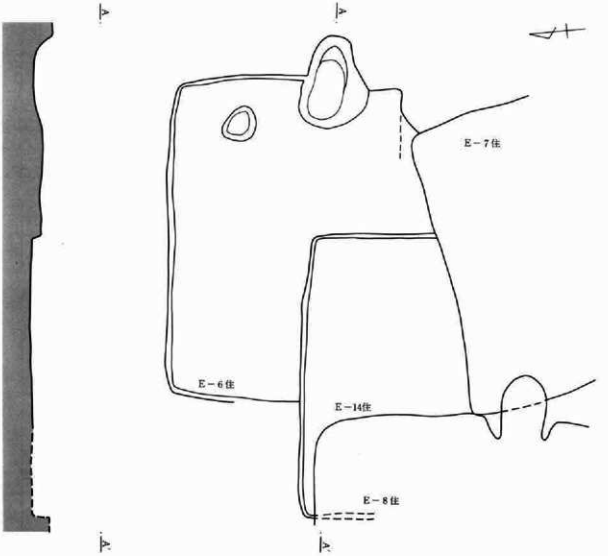
床　面　ローム土を9～21cm掘り込んで床面としている。全体的に良く踏み固められている。

竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置するものと思われる。燃焼部は幅70cm、奥行 100cmの楕円形状に掘り込まれ、壁内側から壁外側にかけて造り出されている。煙道は不明である。

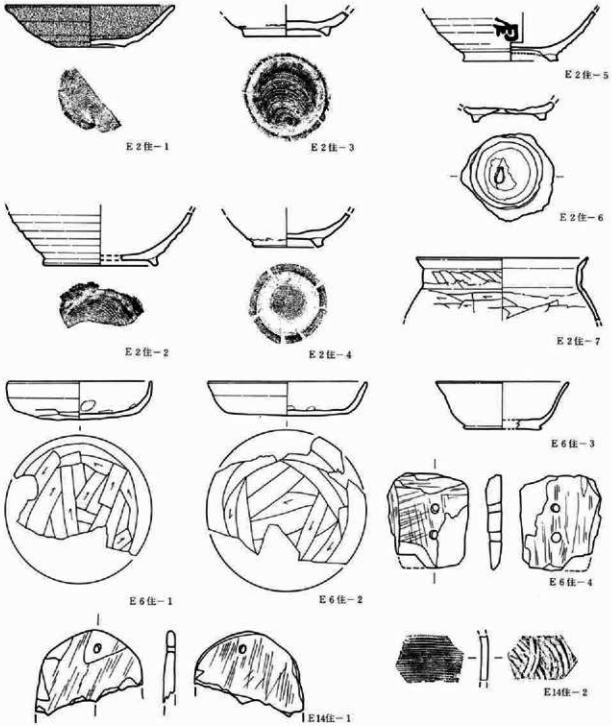
貯蔵穴　北東隅の近くに、長径57×短径46cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る小穴が検出されており、これが貯蔵穴に該当する可能性もある。

遺　物　敷点の土器と石製模造品が出土しているがいずれも埋土中から出土したものである。4は蛇紋岩製の模造品で、表裏面および側面に筋状の整形痕が残る。中央の2つの孔は径1.5mmで、片面より穿孔されている。　　（土器観察表：34頁）

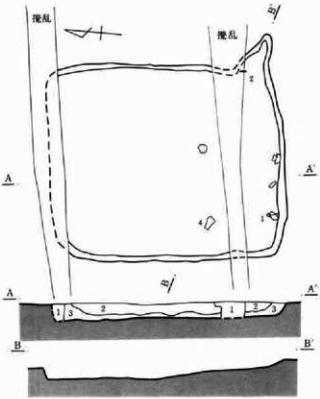
備　考　西側で14号住居址と重複するが、先後関係は不明である。14号住居址の遺物は全て埋土中から出土した。1は蛇紋岩製の模造品で、表裏面や側面に筋状の整形痕がみられる。端部の孔は径1.5mmで、片面より穿孔されている。



第111図　E区6・14号住居址　　L：80.42m



第112図　E区2・6・14号住居址出土遺物



第113図 B区10号住居址 L：79.65m

B区10号住居址

位 置 X−25

写 真 PL41

形 状 長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。上層からの攪乱により北壁の立ち上りが不明となるが、壁はほぼ直線的で、長辺3.8×短辺3.1mを測る。

面 積 11.22m²

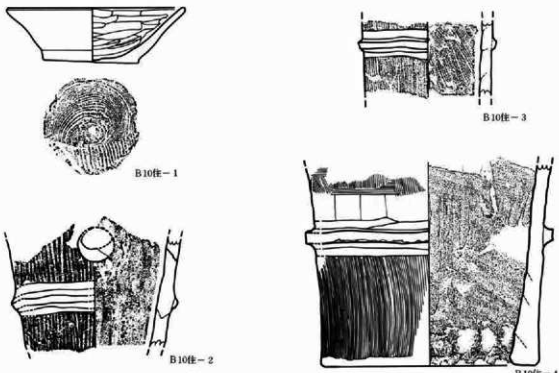
方 位 N−83°−E

床 面 ローム土を17〜29cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はない。

竈 址 南東隅に位置する。燃焼部は幅40cm奥行50cmで、壁外側に造り出されている。煙道は幅20cmで、燃焼部より約30°の角度で緩やかに立ち上る。

遺 物 坏や埴輪の破片が検出されているがいずれも床面から5cm前後浮いた状態で出土した。 (土器観察表：34・35頁)

備 考 柱穴・貯蔵穴・周溝等は検出されなかった。



第114図 B区10号住居址出土遺物

E区1号住居址

位 置 H−44

写 真 PL20−7～8、49

形 状 長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。壁はほぼ直線的で、長辺4.7×短辺3.4mを測る。

面 積 15.49㎡

方 位 N−81°−E

床 面 ローム土を13～30cm掘り込んで床面としている。特に堅い面はないが、竈や貯蔵穴周辺が若干低くなっている。

柱 穴 住居の対角線上に1個検出されたのみで、他は確認されなかった。規模は直径30cm、深さ10cmを測る。

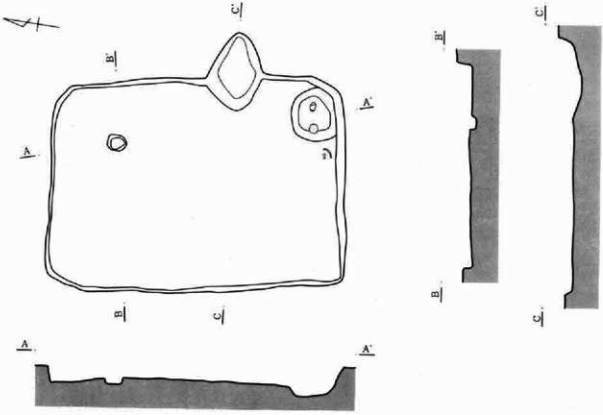
竈 址 東壁中央のやや南寄りに位置する。燃焼部は幅70cm、奥行き80cmで、壁外側に造り出されている。煙道は不明瞭ではあるが、燃焼部から約60°の角度で立ち上るものと考えられる。

貯蔵穴 南東隅に位置する。規模は長辺80×短辺70cmの隅の丸い長方形を呈し、深さ24cmを測る。埋土中より坏と径10cmの河原石が出土した。

遺 物 少量の土器片や自然石が出土したのみである。2の甕は貯蔵穴に近接して出土したもので、床面に密着した状態であった。1の椀は埋土中から出土した。 (土器観察表：35頁)

備 考 周溝は検出されなかった。

第115図 E区1号住居址出土遺物



第116図 E区1号住居址

E区11号住居址

位　置　A－38　　**写　真**　PL49

形　状　長軸を南北にもち、隅の丸い長方形を呈する。7号住居址との重複や上層からの攪乱によって北および西壁が確認できないが、長辺4.8×短辺3.5mの規模をもつと考えられる。

面　積　16.2m²　　**方　位**　N－75°－E

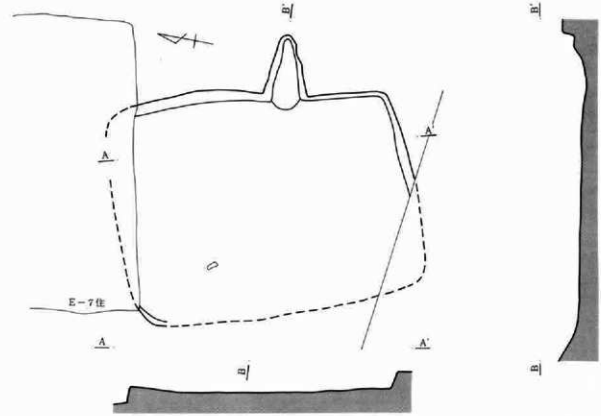
竈　址　東壁中央のやや南寄りに位置する。燃焼部は幅40cmで、床面より10cm程度低く掘り込まれ、壁外側に造り出されている。煙道は幅25cmで、燃焼部の中段位まで掘り込まれている。

遺　物　少量の土器が検出されているが、いずれも床面より10cm程度浮いた状態で出土した。

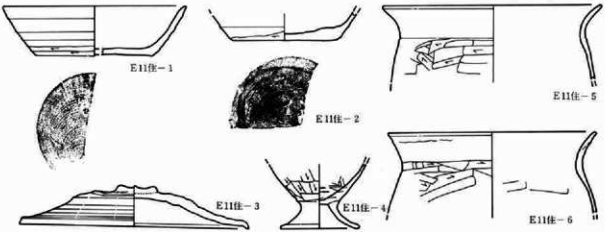
（土器観察表：35頁）

重　複　北側で7号住居址を切っている。

備　考　柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



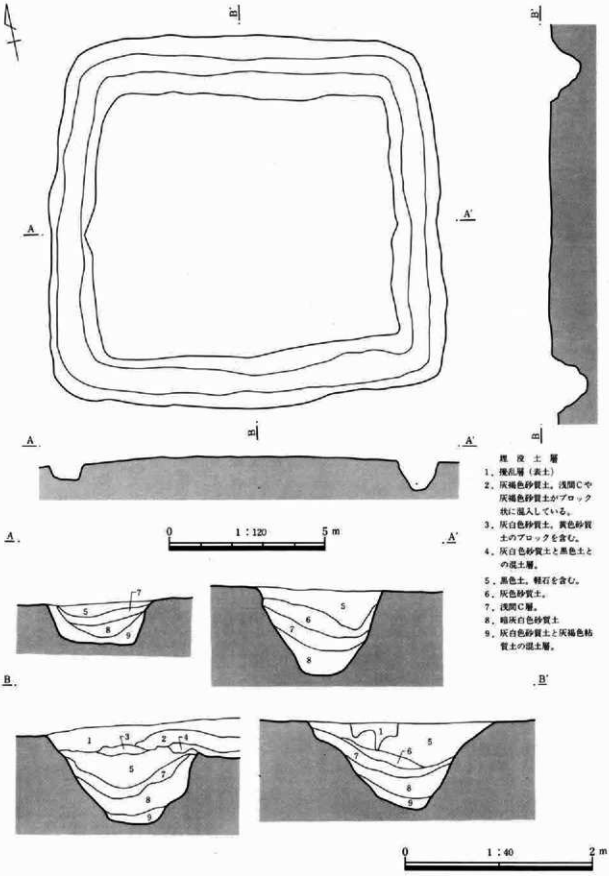
第117図　E区11号住居址



第118図　E区11号住居址出土遺物

第3表　奈良・平安時代住居址の観察一覧　(単位：m)

番号	位置	形状	規模	面積	方位	炉・竈	柱穴	貯蔵穴	周溝	備考
A−24	Z−15	正方形	3.7×3.7	14.13	N−85°−E	東壁中央	無	北東隅	無	真間期
A−1	Y−14	隅丸長方形	5.6×4.2	22.50	N−90°−E	東壁南	無	南東隅	一部欠	〃
A−19	D′−15	隅丸長方形	4.4×4.1	17.58	N−88°−W	東壁南	無	南東隅	無	〃
A−20	E′−16	隅丸長方形	5.4×5.0	26.7	N−87°−W	東壁中央	無	無	無	〃
B−9	X−23	正方形	3.3×3.3	10.75	N−87°−E	東壁南	無	無	無	〃
B−1	W−24	長方形	5.0×3.2	16.38	N−82°−E	東壁南	無	東壁中央	一部欠	〃
B−3	W−31	隅丸長方形	3.0×2.7	7.80	N−76°−E	東壁南	無	東壁中央	無	〃
B−6	W−33	長方形	4.1×3.7	14.58	N−83°−E	東壁南	無	無	無	〃
E−4	C−39	隅丸台形	5.1×4.9	22.91	N−86°−W	東壁中央	無	無	無	〃
E−15	D−43	不明			N−82°−E	東壁	無	無	無	〃
E−8	B−37	隅丸長方形	4.7×4.0	22.25	N−86°−W	東壁南	4個	無	無	〃
A−5	X−15	隅丸長方形	3.5×3.0	10.48	N−85°−W	東壁南	無	南東隅	無	国分期
A−6	X−15	隅丸方形	？×2.8		N−80°−W	東壁南端	無	無	無	〃
A−10	O−6	長方形	？×4.1		N−79°−W	東壁南	無	無	無	〃
A−12	Q−5	隅丸長方形	3.2×2.4	8.14	N−80°−W	東壁南	無	南東隅	無	〃
A−17	F′−17	台形	4.0×3.7	13.48	N−69°−E	東壁南	無	南東隅	無	〃
A−22	Z−15	長方形	3.2×2.5	7.77	N−85°−W	東壁南	無	南東隅	無	〃
A−25	Z−14	隅丸長方形	3.1×2.6	7.70	N−78°−W	東壁中央	無	南東隅	完周	〃
A−27	B′−13	隅丸長方形	？×2.8		N−70°−E	東壁南	無	無	無	〃
E−2	F−43	長方形	3.8×3.0	11.8	N−82°−W	東壁中央	無	南東隅	無	〃
E−6	C−38	長方形	4.8×3.5		N−85°−W	東壁南	無	不明	無	〃
E−14	B−38	不明			N−7°−E	竈不明	無	無	無	〃
B−10	X−25	隅丸長方形	3.8×3.1	11.22	N−83°−E	南東端	無	無	無	〃
E−1	H−44	隅丸長方形	4.7×3.4	15.49	N−81°−E	東壁南	1個	南東隅	無	〃
E−11	A−38	隅丸長方形	4.8×3.5	16.2	N−75°−E	東壁南	無	無	無	〃



埋　没　土　層

1．撹乱層（表土）
2．灰褐色砂質土。浅間Cや灰褐色砂質土がブロック状に混入している。
3．灰白色砂質土。黄色砂質土のブロックを含む。
4．灰白色砂質土と黒色土との混土層。
5．黒色土。軽石を含む。
6．灰色砂質土。
7．浅間C層。
8．暗灰白色砂質土
9．灰白色砂質土と灰褐色粘質土の混土層。

第119図　A区4号方形周溝墓

L：77.10m

3　方形周溝墓と出土遺物

方形周溝墓は、A区の微高地部分に集中して6基が検出された。この微高地は周囲の沖積地との比高が1m弱であり、該期の住居址が立地する台地部分より、約2mほど低くなっている。方形周溝墓の立地は台地部分には見られないことから、明確な墓域を形成していることがうかがえる。

各方形周溝墓は2つの群に分かれて存在している。1つは、台地から微高地への地形変換部に隣接して存在する1・2号方形周溝墓であり、もう1つは微高地南端に密集する3～6号方形周溝墓である。各群の方形周溝墓は密集しながらも、相互に重複を避けるように配置されている。

微高地縁辺は流水による侵食や上層からの土壌攪乱をうけているため、外周の溝が完全に検出できたものは、3～5号方形周溝墓の3基のみであり、他の3基は一部の溝の検出にとどまった。また方台部に主体部の掘り込みが確認できたものは、3号方形周溝墓の1基のみである。6号を除いて、1～5号方形周溝墓の溝の埋没土層中には、浅間C層の純堆積が確認された。

A区4号方形周溝墓

位　置　M－6　　**写　真**　PL23－1～3、50

形　状　長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は正方形に近い長方形を呈する。方台部は長辺9.5×短辺8.2mで、全形は長辺12.5×短辺11.8mを測る。

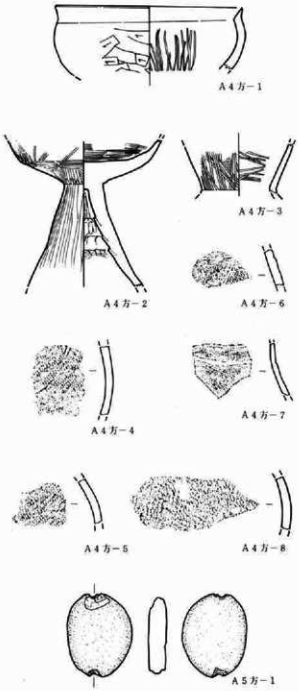
面　積　方台部：171.2㎡　全形：310.5㎡

方　位　N－12°－E

周　溝　断面形は底面が平坦なV字形を呈する。両壁面は明瞭な立ち上りをもつ。四隅の高まりは見られない。規模は上幅108～204cm、下幅32～100cm深さ40～80cmを測る。

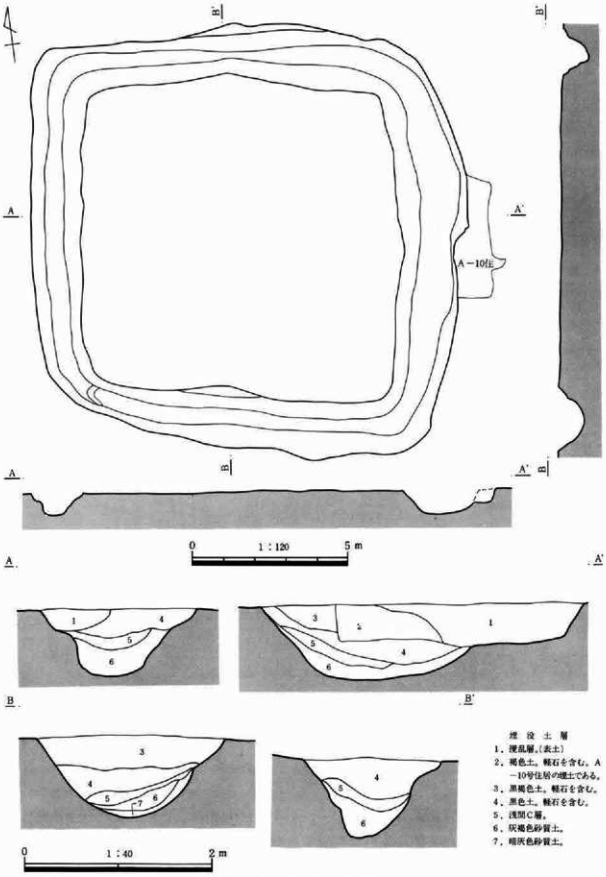
遺　物　土器が周溝の埋土中より出土しているが、いずれも浅間C層よりも上層に包含されていた。

（土器観察表：36頁）



第120図　A区4・5号方形周溝墓出土遺物

備　考　主体部は検出されず、また方台部に盛土がなされたかどうかは確認できなかった。周溝内より検出された浅間C層の直下には、すでに埋没土がみられることから、当方形周溝墓の築造は、浅間Cの降下時より時間的に若干遡るものと思われる。



第121図　A区5号方形周溝墓　　L：77.40 m

A区5号方形周溝墓

位　置　O－5　　**写　真**　PL23－4～6、50

形　状　長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、若干歪んだ正方形を呈する。方台部は一辺10mで、全形は一辺13.5mを測る。

面　積　方台部：216.6㎡　全形：377.9㎡

方　位　N－8°－E

主体部　検出されなかった。

周　溝　断面はU字形を呈する。四隅をはじめ、特に高まりをもつ箇所は見られない。規模は上幅110～200cm、下幅20～90cm、深さ70～80cmを測る。埋土中に10cmの厚さで浅間Cの純層が堆積している。

遺　物　周溝内の浅間C層より下層の埋土中から、石錘が1点出土した。頁岩の河原石を使用し、両端を打ち欠いている。土器は検出されなかった。

備　考　方台部に盛土がなされていたかどうかは、確認できなかった。周溝内の浅間C層直下に堆積している埋没土の厚さからみて、当周溝墓の築造時期は浅間Cの降下時よりも若干遡ると思われる。

A区2号方形周溝墓

位　置　W－10　　**写　真**　PL50

形　状　上層からの土壌攪乱により、東半部が削平されているために明確でない。

面　積　不　明　　**方　位**　N－24°－W

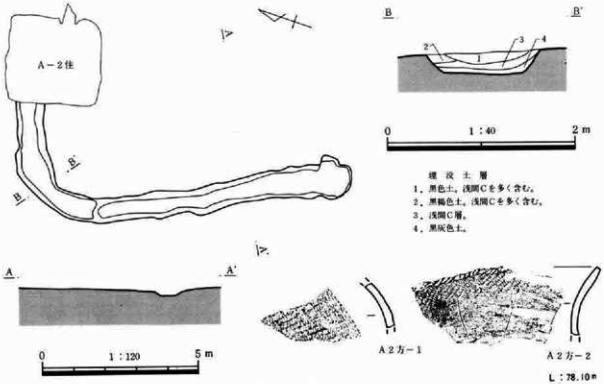
主体部　検出されなかった。

周　溝　断面は逆台形を呈する。屈曲部コーナー近くが他よりも10cm程度の高まりをもつ。規模は上幅72～120cm、下幅40～80cm、深さ30cmを測る。埋土中には、約8cmの厚さで浅間C層が堆積している。

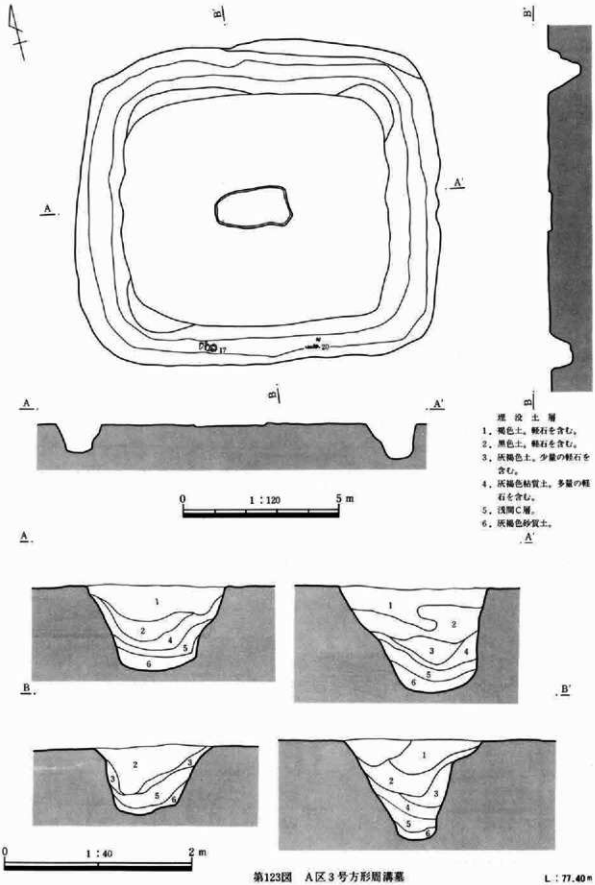
遺　物　土器片が2点出土したが、いずれも浅間C層の直下から出土したものである。

（土器観察表：36頁）

備　考　方台部の盛土は確認できなかった。周溝内の浅間C層の直下には、厚さ5cm程の黒灰色土が堆積するが、この状態から当周溝墓の築造は浅間Cの降下と近接した時期の所産であることがうかがえる。



第122図　A区2号方形周溝墓と出土遺物



第123図　A区3号方形周溝墓

L：77.40m

A区3号方形周溝墓

位　置　O－7　　**写　真**　PL22－1～5、50

形　状　長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、長方形を呈する。方台部は長辺8.5×短辺7.0mで、全形は長辺11.6×短辺10.2mを測る。

面　積　方台部：130.9m²　全形：246.0m²

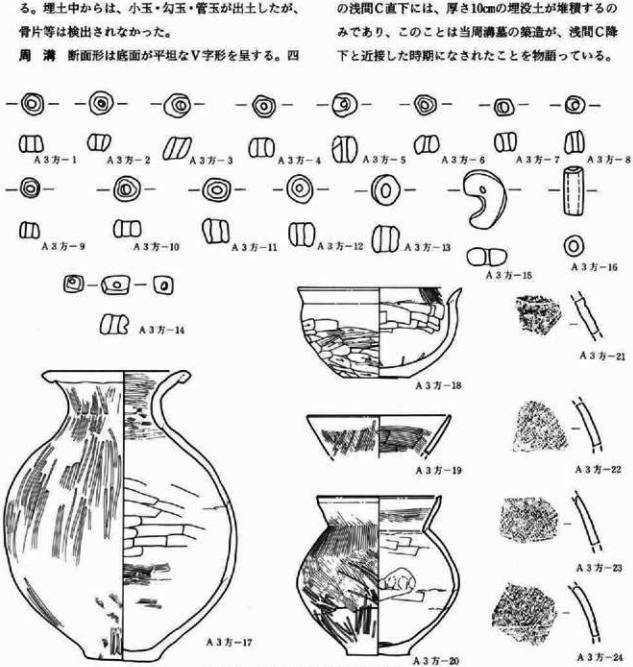
方　位　N－12°－E

主体部　方台部の中央に検出された。隅の丸い長方形を呈し、長辺230×短辺120cm、深さ8～12cmを測る。埋土中からは、小玉・勾玉・管玉が出土したが、骨片等は検出されなかった。

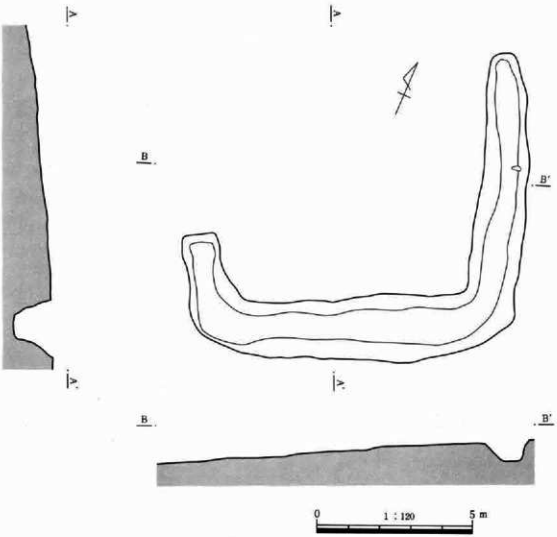
周　溝　断面形は底面が平坦なV字形を呈する。四隅は高まりを持たない。規模は上幅112～200cm、下幅32～80cm、深さ72～112cmを測る。

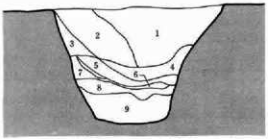
遺　物　17・20の土器は周溝内の浅間C層の直下より出土し、他の土器は浅間C層より上層の埋土中から出土した。1～13はガラス製で、14は蛇紋岩製の小玉である。15は滑石製勾玉、16は蛇紋岩製管玉である。いずれも全体的に良く研磨され、中央の孔は片面穿孔されている。　（土器観察表：36・37頁）

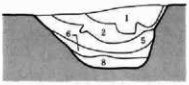
備　考　方台部の盛土は確認できなかった。周溝内の浅間C直下には、厚さ10cmの埋没土が堆積するのみであり、このことは当周溝墓の築造が、浅間C降下と近接した時期になされたことを物語っている。



第124図　A区3号方形周溝墓出土遺物







埋　没　土　層

1．黒色土。軽石を多量に含む。
2．灰褐色土。軽石を多量に含む。
3．灰褐色土。軽石を少量含む。
4．灰白色砂質土。
5．浅間C層。
6．暗灰色粘質土。
7．灰白色砂質土と暗灰色粘質土との混土層。
8．暗灰色粘質土。灰白色粘質土のブロックを多量に含む。
9．暗灰色粘質土。灰白色粘質土のブロックを少量含む。

L：78.10m

第125図　A区1号方形周溝墓

A区1号方形周溝墓

位　置　W－9　　**写　真**　PL50

形　状　北半部が流水による侵食と土壌攪乱をうけているため検出できなかったが、正方形あるいは長方形を呈すると思われる。残存している方台部および全形の長さは、8.0mと10.8mを測る。

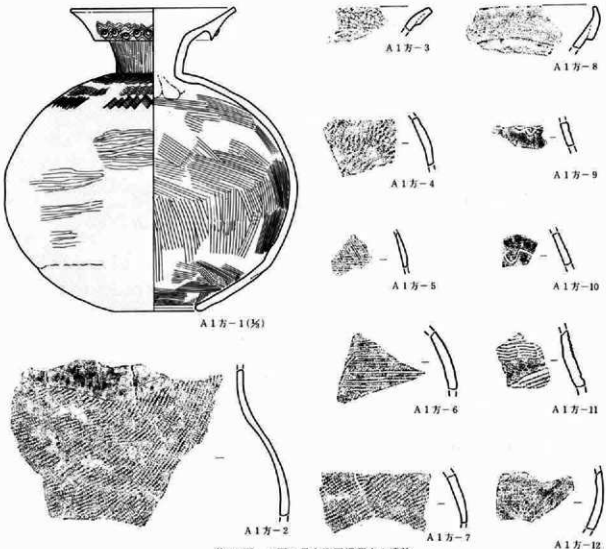
面　積　不　明　　**方　位**　N－20°－W

主体部　検出されなかった。

周　溝　断面形は底面が平坦なV字形を呈する。屈曲部コーナーは、極だった高まりをもたない。規模は上幅120～230cm、下幅52～120cm、深さ60～120cmを測る。埋土中の中位に、8～10cmの浅間Cの純層（5層）が検出された。

遺　物　全ての土器が周溝の埋土中から出土した。1の甕はほぼ完形であり、浅間C層の直上に押しつぶされた状態で出土した。2の甕は、浅間C層を挟んでその上下から出土したものが接合した。他の破片はいずれも浅間C層より上の埋土中から出土したものである。　（土器観察表：37・38頁）

備　考　方台部に盛土がなされていたかどうかは、確認できなかった。周溝内より検出された浅間C層の直下には、三層に及ぶ埋没土がみられることから、築造の時期は浅間Cの降下時より若干遡るものと思われる。



第126図　A区1号方形周溝墓出土遺物

A区6号方形周溝墓

位 置 M－3　　**写 真** PL50

形 状 流水による侵食と上層からの土壌攪乱により、北西半部が検出されないため、不明である。

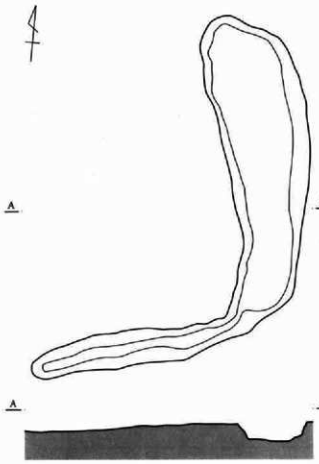
面 積 不 明　　**方 位** N－13°－W

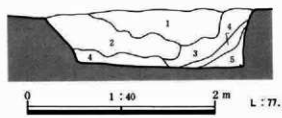
主体部 検出されなかった。

周 溝 断面は逆台形を呈する。屈曲部コーナー近くが、他よりも20cm程度の高まりをもつ。規模は上幅68～290cm、下幅16～230cm、深さ60cmを測る。埋土中から浅間C層は検出されなかった。

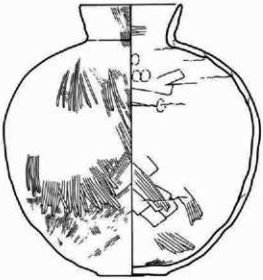
遺 物 周溝内の埋土中から1の甕が検出されたのみである。1は押しつぶされた状態で出土した。　　（土器観察表：38頁）

備 考 全体的に残存状態が悪いため、方台部に盛土がなされていたかどうかは確認できなかった。





埋 設 土 層
1．黒色土。軽石を多量に含む。
2．灰褐色砂質土。軽石を少量含む。
3．褐色砂質土。軽石を少量含む。
4．褐色砂質土と灰白色砂質土との混土層。
5．灰白色砂質土。



A6方－1

第127図　A区6号方形周溝墓と出土遺物

4　浅間B層下水田址

水田址は、A区南側の台地と微高地に挟まれた小規模な谷頭状の沖積地内に検出された。この沖積地は、台地末端から流出する湧水によって形成されたと考えられる。現在の地目は水田となっているが、地表面には湧水は見られない。水田址は現地表面下1mのところに、約10～20cmの厚さで堆積した浅間B軽石層に直接埋没していた。

発掘調査された水田址の総面積は850m²であり、西側および南側は上層からの土壌攪乱により検出できなかった。しかし、発掘対象区域外の東側部分には、浅間B層とその直下に水田耕作適土が存在することから、水田址の若干の広がりを想定できる。

(1)　水田の地形

水田址は、谷頭を頂点として南西方向へ平均3％の勾配で傾斜している沖積地を、棚田状に区画することによって造成されている。自然地形の勾配がかなり急であることから、各水田区画内においても5cm前後の高低差があり、地形勾配と同様に北東側が高く、南西側へと傾斜している。

(2)　アゼの走行と区画

各水田を区画するアゼは小アゼのみで、区割りとしての機能をもつ大アゼは検出されていない。小アゼは耕作土と同様の黒灰色粘質土を盛り土してつくられているが、全体的に土圧によると思われるアゼの偏平化現象が見られ、中には盛り土としての高まりをもたない箇所もある。

規　模　比較的残存良好な№11～15区画では、上幅20～30cm、下幅50～60cm、水田面との比高が5～10cmで、断面の形状がカマボコ形を呈する。

№1区画の東側の南北アゼは、上幅60～120cm、下幅160～180cm、水田面との比高が10～15cmと他の小アゼよりもその規模が大きくなっている。しかし、規模の面では大きな相違があるものの、その走行は№1区画のみにとどまり、南側へと連続的に延びてゆく状態も看取されない。このことから、区割りとしての機能をもつ大アゼとは異なるものであり、小アゼの1種と考えることができよう。

走行と区画　南北および東西方向の小アゼは、全区画にまたがるような連続した走行となるものはない。しかし、その中でも比較的連続した走行をしているのは、№1～6区画の東側の南北小アゼである。この小アゼの走行方位は、約N20°Eとなる。

水田区画は、各区画内で5cm前後の高低差をもっているが、谷頭に近接したNo.1やNo.7の区画内では、20cm前後の比高差がみられる。また隣接する区画相互の比高は、南北方向の場合約10cmであり、棚田状に南方へ低下している。また東西方向では5cm以内の比高差で、東側へわずかに低下している。

小アゼの走行および水田区画と地形との関係をみると、南北小アゼは等高線に直交するように走行しているのに対し、東西小アゼはそれとは逆に平行するように走行している。水田区画は東西に長軸をもつ方形区画を基調としているが、これはアゼの走行とも合わせて地形を考慮した造田形態であると言えよう。また、No.3やNo.5などのように、方形区画の中に小さな三角形の区画が挿入される箇所が見られる。これらの箇所は地形勾配が急に変化している地点であり、広い面積を1区画とすることが地形的に困難であるためにこうした造田形態となったことが考えられるが、同時に水田造成における整地作業の中で、切り盛りによる土の移動を極力少なくするための省力化をも考慮したものであることがうかがえる。

(3)　水田の面積

水田址は、アゼの一部が未検出なために完全な区画を呈していないものを含め、20面が確認された。この内、水田区画の復元可能なものも含めて区画面積が判明しているのは10区画であり、それらの面積は第4表に示した。

1区画の面積は、No.5の7.32m²という小さなものから、No.15の104.23m²という大きなものまでかなりの較差が見られる。また形状も長方形・平行四辺形・台形・三角形と様々であり、面積も含めて区画の規画性はうかがえない。

第4表　浅間B層下水田址の面積一覧（単位：m）

No.	面　積	長　辺	短　辺	形　状
1	72.15	8.9　4.9	7.5	台　形
2	44.48	13.7	3.2	長方形
3	14.27	7.6	3.3	三角形
4	62.91	12.5	4.4	四辺形
5	7.32	5.8	2.2	三角形
6			4.2	
7	41.54	14.4	4.6	三角形
8			1.0	
9	23.53	6.1　3.7	4.4	台　形
10			4.4	
11	42.35	6.8	6.2	平行四辺形
12	39.94	7.5　4.1	6.7	台　形
13			4.1	
14			5.8	
15	104.23	11.8　9.2	7.0	台　形
16		13.2		
17			7.7	
18			5.3	

(4) 取配水方法

取水方法　水田を灌漑するための水路等の施設は検出されておらず、具体的にどのような取水方法をとっていたかは確認できなかった。しかし、宮川等の河川から取水する場合には、地形的に見てA・B区の発掘区内に水路を掘削する必要があるが、これに該当する水路は両区内に検出されていない。例えば位置的にはB区1・2号溝なども水路として考えられなくもないが、これらの溝の埋土には通水の形跡が見あたらず、水路としての可能性はない。こうしたことから、少なくともこの水田址は河川灌漑の方法をとっていなかったと言えよう。

各水路の配水　水田の水口は、№1・7～9・11の区画で検出されているが、いずれも東西小アゼを幅40～60cmほど切り取って設置されており、南北小アゼ上には見あたらない。これは各水田区画相互の配水が、南北小アゼで帯状に区画された中を、各列単位に北から南へと懸け流しで行なわれていることを示しており、南北小アゼを越えて東西方向には配水されない構造と言えよう。例えば、№7から№14列における配水経路は、№7→9→11→14と順次南方へ懸け流される方法をとっており、前述のことを裏付けている。また、一部の水口しか検出できていないために明確ではないが、№1から№6にかけての配水方法も、上記と同様のことが考えられる。

№7区画の北側には、谷頭へと延びている幅100～200cm、深さ10～20cmの水路状の窪地が認められる。そのあり方から見て、明らかに灌漑施設の一部として通水のあったことが考えられるが、この5m北方の谷頭部分に上層からの土壌攪乱が入っているため、その全容は確認できなかった。いずれにしても、この水路状遺構から№7へと配水されたものであろう。また№1区画の北側では土壌攪乱等もあり、こうした水路状遺構は検出されていない。しかし、地形的には№7→№1という配水は考えられず、ここでも№7と同様の灌漑施設の存在が想定できる。ここで問題なのは、この水路状遺構への給水源が何であったかということである。前述したように、河川灌漑は考えられない。これについては、沖積地を隔てて北側に隣接する天之宮遺跡の調査事例を参照することによって考えてみたい。

天之宮遺跡は、台地上に古墳時代後期から平安時代にかけての集落が立地する他に、西側の河川を伴なわない沖積地内に島原遺跡と同様の浅間B層下の水田址が検出されている。この水田址のアゼは、土圧による偏平化のために不明瞭であるが、水田の灌漑方法として「溜井灌漑」を採用している。

溜井とは、水田への灌漑用水の確保・取水を目的として掘削された井戸であり、河川からの導水による貯水を目的とした溜池とは、構造的に異なるものである。いわば、溜井は自噴によって農業用水を確保し、これを貯水しながら給水を計るという農耕施設といえよう。その構造は、地下の滞水層まで達する円形の井戸状に掘り貫いた貯水部と、その湧水を水路によって水田へと流す導水部から成っている。

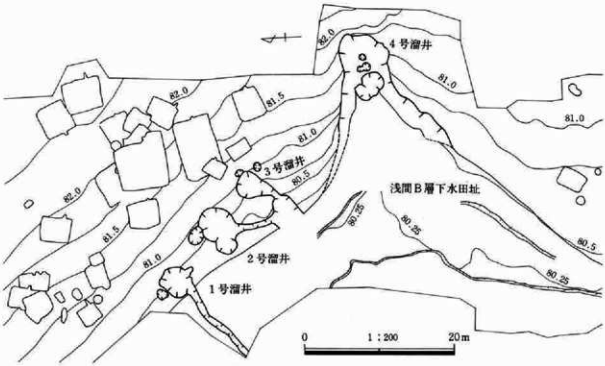
天之宮遺跡では4基の溜井が検出されているが、その規模は貯水部の井戸が直径3～6m、掘削深度1.5～2mであり、導水部の水路が幅0.5m前後、深さ

0.2～0.3mである(第129図参照)。こうした溜井が第128図のように台地末端に配置され、これによって得られた用水で水田を灌漑する方法をとっている。

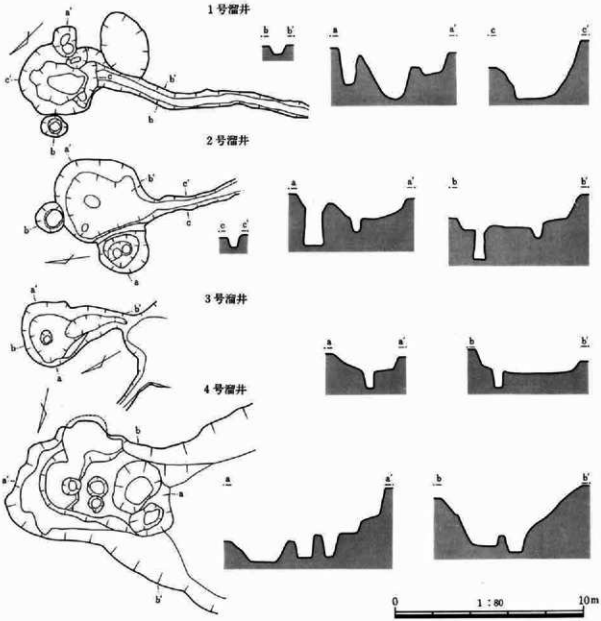
島原遺跡の水田址は、河川を伴なわない小規模な谷頭状の沖積地に立地しているが、これは天之宮遺跡の水田址のあり方と非常に酷似している。こうしたことを考慮して島原遺跡の水田址の灌漑方法を想定してみると、No.7区画から北側へと延びている水路状の窪みは、溜井の導水部の水路と考えることができる。この地点においては、水田耕作土のV層直下に滞水層があり、谷頭の最奥部に溜井を掘削した場合には、容易に用水の確保が可能である。また、各区画の水口や谷頭方向からの懸け流しによる配水経路のあり方からみても、溜井灌漑を想定することが妥当と言えよう。

天之宮遺跡の溜井群と浅間B層下水田址

天之宮遺跡の1号溜井



第128図　天之宮遺跡の溜井群と浅間B層下水田址



第129図　天之宮遺跡の1～4号溜井

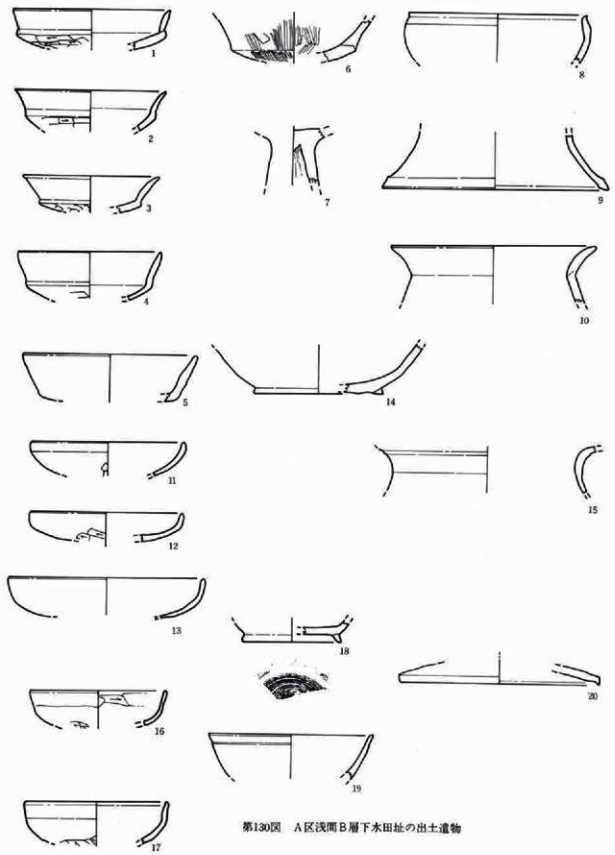
(5)　足　跡

水田面には、人間の足跡と思われるものの他に、獣足跡を思わせる直径5cmほどの浅い窪み穴が不規則な状態で無数に認められた（PL 24・26参照）。これらの足跡は相互に入り乱れており、その歩行を復元するまでには至らなかったが、その多くはアゼ沿いに見られた。また若干ではあるが、アゼ上にも散見された。円形の窪み穴については、獣足跡ではなく、稲の株痕の可能性もあるが、いずれにしても断定できていない。

(6)　出土遺物（土器観察表：38・39頁、PL 51）

木製品・鉄製品等の遺物は検出されず、土器片が若干出土したのみである。土器は水田面や耕作土中からも出土しているが、その多くは水田区画の検出されない谷頭に接近した地点で出土したものである。

出土土器の時期は、古墳時代後期（鬼高式）から平安時代（国分式）にまでわたっており、本水田址の経営時期が古墳時代後期にまで遡る可能性を示唆している。



第130図　A区浅間B層下水田址の出土遺物

第131図　A区浅間B層下の水田址

5　掘立柱建築遺構

B区のW～Y－18～22およびV～W－36～37グリッドの2箇所において多数の柱穴が検出されたが、そのうち掘立柱建築遺構としてその柱穴の配列が復元できたものは、1号掘立の1棟のみである。

1号掘立柱建築遺構

位　置　V～W－36～37　　**写　真**　PL27－1

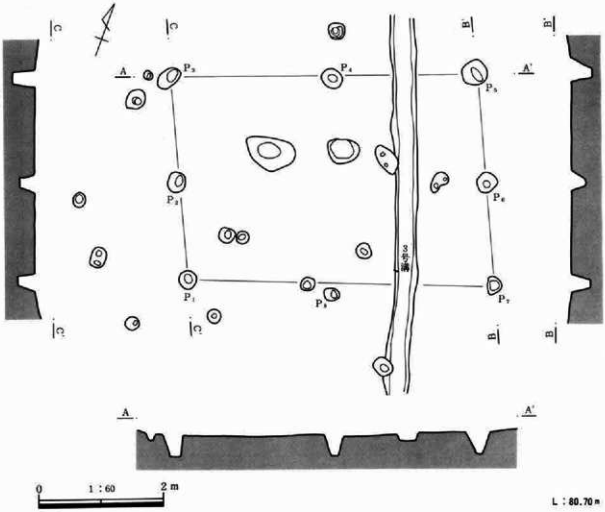
規　模　柱間は桁行2間×梁間2間で、棟方向は東西から若干のずれがみられる。各柱穴の心々間を結んだ形状は、やや歪みをもち、平行四辺形状を呈している。各柱穴相互の間隔は第4表に示したが、桁行は2.3～2.6m、梁間は1.6～1.7mを測る。

柱　穴　土層断面から柱痕の確認できたものはない。掘り方は円筒形状を呈している。埋土は浅間Cを少量含んだ黒褐色土である。

第5表　1号掘立柱建築遺構の規模一覧

（単位：cm）

柱　間	距　離	柱　穴	径	深　さ
P_1～P_2	160	P_1	28	26
P_2～P_3	165	P_2	32×27	23
P_3～P_4	175	P_3	40×26	36
P_4～P_7	160	P_4	34×28	31
P_1～P_5	235	P_5	38	33
P_4～P_7	260	P_6	22	22
P_5～P_6	260	P_7	27×23	28
P_6～P_3	235	P_8	23×20	33



第132図　B区掘立柱建築遺構・3号溝

6 溝状遺構

溝はB区で3条、C区で8条、D区で2条、E区で1条の計14条検出された。確実な伴出遺物が少ないことから時期は不明のものが多い。14条の溝のうちで、走行方位からみて相互に何らかの関係をもつと思われるものは、同一の走行方向をもつC区の1～7号溝とD区2号溝であり、またこれらとほぼ90°ずれた走行方位をとるD区1号溝である。D区2号溝はC区4～7号溝の延長線上に位置することからみて、C区4～7号溝のいずれかと、またD区1号溝もB区1～7号溝のいずれかが走行方行を変えたものとして、それぞれ同一の溝の可能性がある。この他に、B区3号溝とE区1号溝も同一の溝となる可能性をもっている。埋没土層の観察からは、いずれの溝も流水の形跡はうかがわれない。

B区1号溝

位置 W～X－19～23 **写真** PL51

規模 断面の形状は逆台形を呈し、上幅42～105cm、下幅20～38cm、深さ22～62cmを測る。

方位 N－15°－E

遺物 少量の土器片が検出されたが、いずれも埋土中からの出土である。(土器観察表：40頁)

B区2号溝

位置 W～Y－17～18

規模 断面の形状は逆台形を呈し、上幅36～65cm、下幅22－92cm、深さ22～38cmを測る。

方位 N－9°－E

B区3号溝

位置 V～W－36～37 **写真** PL27－1

規模 断面の形状は逆台形を呈し、上幅30～40cm、下幅13～20cm、深さ6～17cmを測る。

方位 N－25°－W

C区1号溝

位置 G′～I′－30～31 **写真** PL28－1、51

規模 断面の形状は逆台形を呈し、上幅38～112cm、下幅32～44cm、深さ15～29cmを測る。

方位 N－32°－W

遺物 埋土中より少量の土器片が出土した。

(土器観察表：40頁)

C区2号溝

位置 I′～J′－31 **写真** PL28－1

規模 断面の形状は浅いU字形を呈し、上幅80～88cm、下幅36～44cm、深さ7～20cmを測る。

方位 N－32°－W

C区3号溝

位置 H′～J′－31～32 **写真** PL28－1

規模 断面の形状はV字形を呈し、上幅40～120cm、下幅20～36cm、深さ27～53cmを測る。

方位 N－32°－W

C区4号溝

位置 J′～N′－29～32 **写真** PL28－3

規模 断面の形状はV字形を呈し、上幅132～216cm、下幅48～120cm、深さ32～60cmを測る。

方位 N－33°－W

備考 埋没土層中に約10～15cmの厚さで浅間Bが堆積している。遺物は検出されなかった。

C区5号溝

位置 K′～N′－29～32 **写真** PL28－2

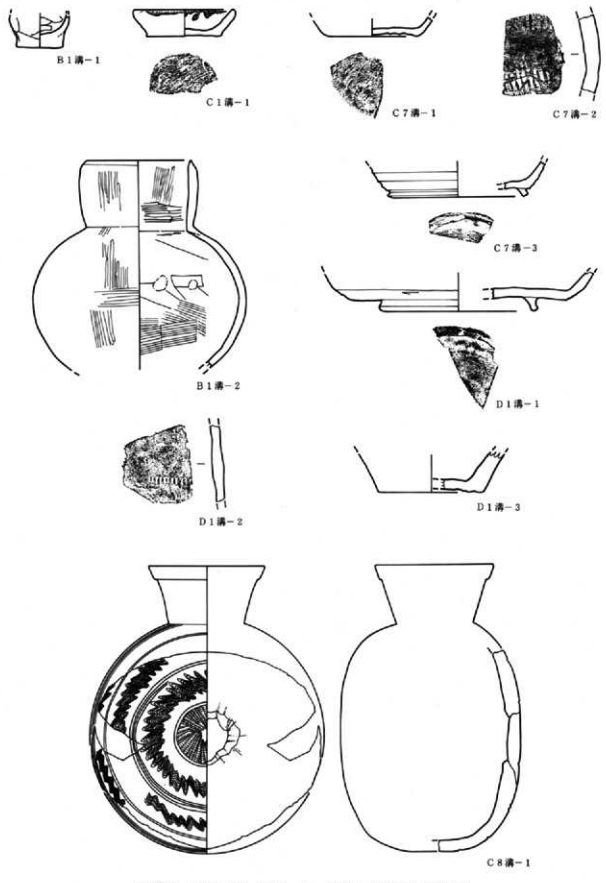
規模 断面の形状はU字形を呈し、上幅68～104cm、下幅12～28cm、深さ15～41cmを測る。

方位 N－33°－W

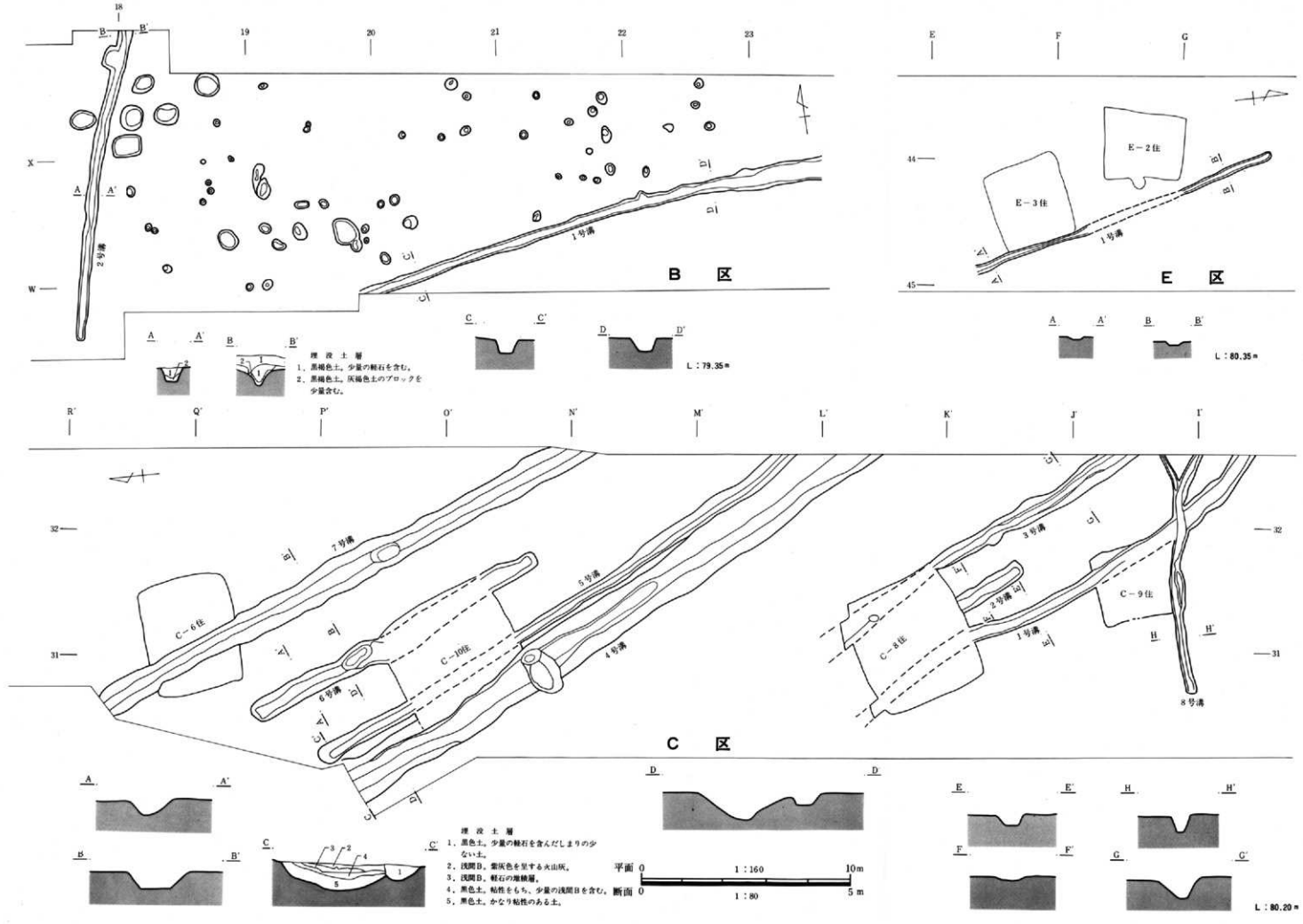
C区6号溝

位置 M′～O′－30～32 **写真** PL28－2

規模 断面の形状はU字形を呈し、上幅80～120cm、下幅36～64cm、深さ19～27cmを測る。



第133図　B区1号溝、C区1・7・8号溝、D区1号溝出土遺物



第134図　B区1・2号溝、C区1～8号溝、E区1号溝

方　位　N－28°－W

C 区 7 号 溝

位　置　M′～P′－30～32

写　真　PL27－2、28－2

規　模　断面の形状は逆台形を呈し、上幅104～160cm、下幅32－72cm、深さ28～52cmを測る。

方　位　N－28°－W

遺　物　埋土中より多数の須恵器片が出土した。

（土器観察表：40頁）

C 区 8 号 溝

位　置　G′－30～32　　写　真　PL51

規　模　断面の形状はV字形を呈し、上幅36～68cm、下幅12～40cm、深さ29～40cmを測る。

方　位　N－85°－E

遺　物　須恵器の横瓶の破片が埋土中より1点出土した。　（土器観察表：40頁）

D 区 1 号 溝

位　置　G′－40～41　　写　真　PL27－3、51

規　模　断面の形状はV字形を呈し、上幅106～142cm、下幅32～60cm、深さ53～76cmを測る。

方　位　N－70°－E

遺　物　少量の須恵器および陶器の破片が、埋土中より出土した。　（土器観察表：41頁）

D 区 2 号 溝

位　置　Z～A′－40～41

規　模　断面の形状は逆台形を呈し、上幅53～67cm、下幅22～30cm、深さ25～37cmを測る。

方　位　N－40°－W

遺　物　検出されなかった。

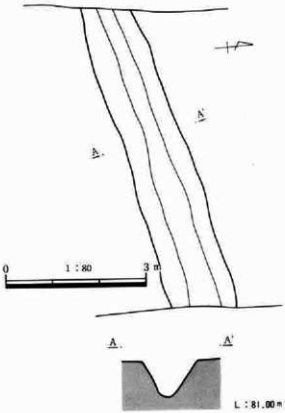
E 区 1 号 溝

位　置　E～G－43～44

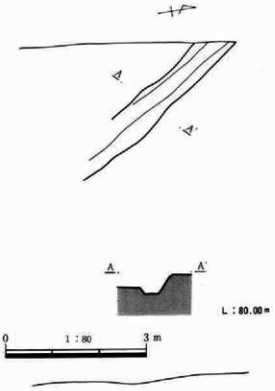
規　模　断面の形状は浅い逆台形を呈し、上幅28～40cm、下幅10～20cm、深さ3～9cmを測る。

方　位　N－24°－W

遺　物　検出されなかった。



第135図　D区1号溝



第136図　D区2号溝

7　土　　坑

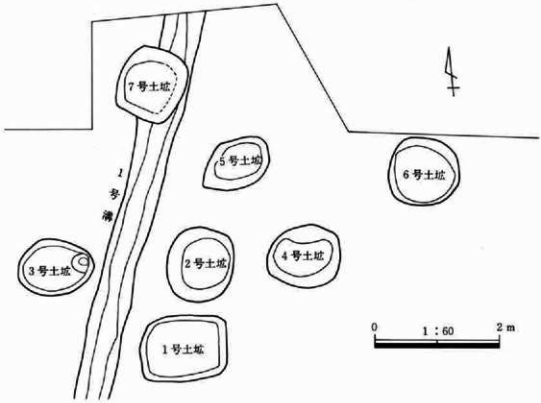
土坑はA・B区において計13基検出された。A区の各土坑は散在していたが、B区では一箇所に密集していた。土坑の形状は円および楕円形となるものが多いが、A区1号やB区1・7号は方形を呈している。断面形はU字形となる。

A区の1号と2号および5号と6号は相互に重複しているが、2号は1号により、5号は6号によってそれぞれ切られている。

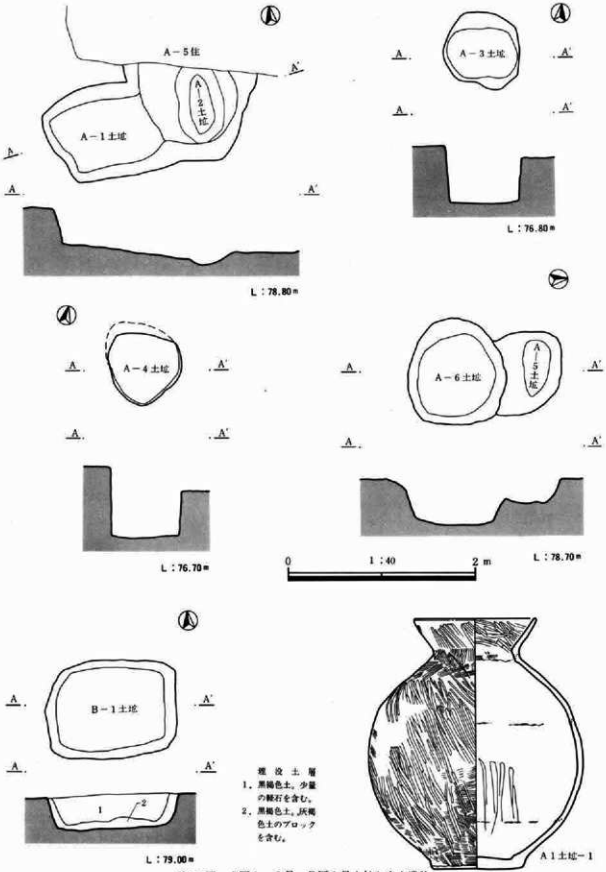
土器等の伴出遺物は、A区1号とB区4・6号土坑を除いて全く検出されていないために、時期については判明していない。A区1号土坑では、埋没土上半に石田川式のほぼ完形の甕(土器観察表：41頁)が横位に出土している。また1号土坑によって切られている2号土坑は、埋没土層の中位に約8cmの厚さで浅間Cが推積しており、このことから1号土坑は少なくとも浅間C降下以後の石田川期に属すると言えよう。

第6表　土坑一覧　　(単位：cm)

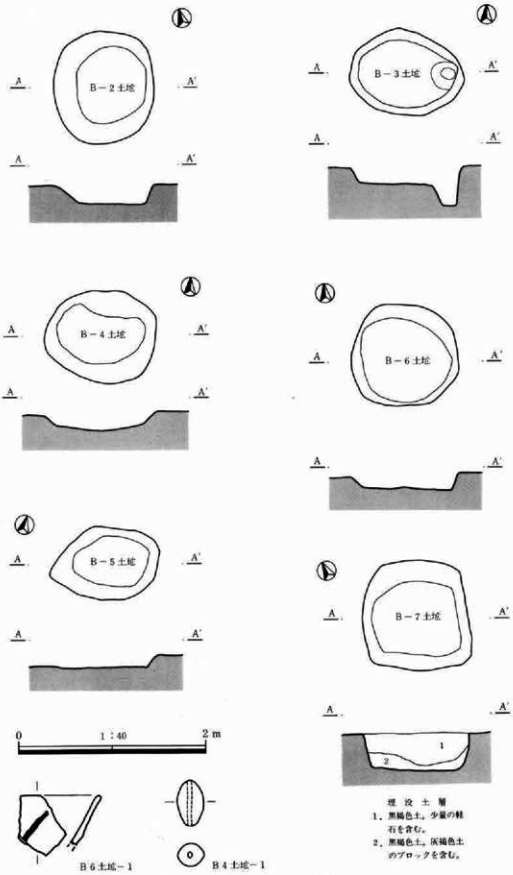
番号	位　置	形　状	規模（①径②深）	写真図版
A 1	X−15	方　形	①110×103　②20	PL51
A 2	X−15	不　明	①不　明　②36	
A 3	L−4	円　形	①80　②56	
A 4	L−4	円　形	①78　②72	
A 5	B′−13	円　形	①86　②26	
A 6	B′−13	円　形	①110　②48	
B 1	X−18	長方形	①140×104　②35	PL29−2
B 2	X−18	円　形	①120　②19	PL29−3
B 3	X−17	楕円形	①120×90　②41	PL29−4
B 4	X−18	楕円形	①122×98　②20	PL29−5 PL51
B 5	X−18	楕円形	①120×78　②12	PL29−6
B 6	X−18	円　形	①115　②15	PL29−7
B 7	X−18	正方形	①110×110　②40	PL29−8



第137図　B区1～7号土坑



第138図　A区1～6号・B区1号土坑と出土遺物



第139図　B区2～7号土坑と出土遺物

8　包含層の出土遺物

第138～144図に掲載された遺物は、微高地の第II層や台地の第III層中に包含されていたものである。遺物の時期は、縄文時代から中・近世までの広い範囲にわたっている。以下、時代別にその概要について記述した。

縄文時代の遺物

深鉢（第138図1、PL51）　口縁部の破片、内面は横位に良く研磨されている。胎土は緻密。焼成は良好。棒状工具による沈線内には、LR縄文が充填されている。称名寺I式に比定される。

深鉢（第138図2、PL51）　口縁部の破片であるが、1と同一個体の可能性がある。胎土・焼成・文様のあり方も1と同様である。

深鉢（第138図3）　口縁部の破片である。内面は横位に良く研磨されている。胎土は緻密で、堅く焼成されている。LR縄文が横位に施文されている。口唇近くに孔があり、焼成後の両面穿孔である。

深鉢（第138図4）　口縁部の破片である。内面は横位に良く研磨。胎土は砂粒を少量含むが、堅緻に焼成されている。RL縄文が横位に施文され、上部は磨り消される。加曽利E4式に比定される。

耳栓（第138図5、PL51）　括れ部には整形時における指のおさえ痕が残る。焼成は堅緻。

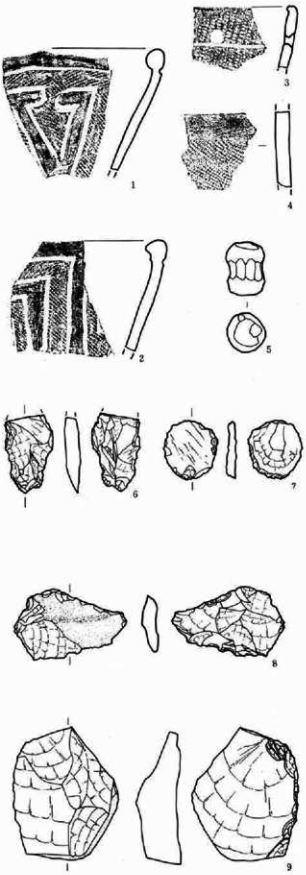
打製石器（第138図6）　左側縁は細かく打ち欠かれて調整され、右側縁には交互剥離がなされている。黒色頁岩を使用。

剥片石器（第138図7）　打面を除き、周辺に粗い打ち欠きで刃部を作出する。黒色安山岩を使用。

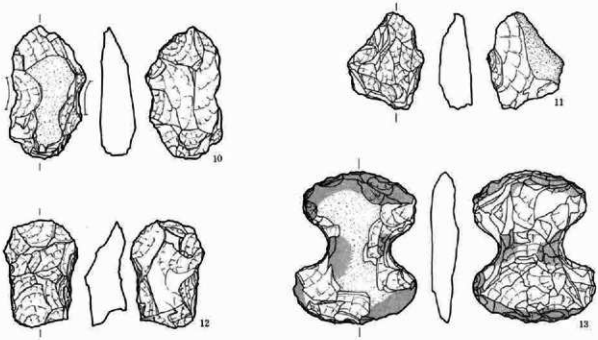
剥片石器（第138図8、PL51）　横長不定形剥片を使用している。末端が粗く打ち欠かれて調整されている。黒色頁岩を使用。

剥片石器（第138図9、PL51）　左側縁には微細な刃部調整が施されている。黒色頁岩を使用。

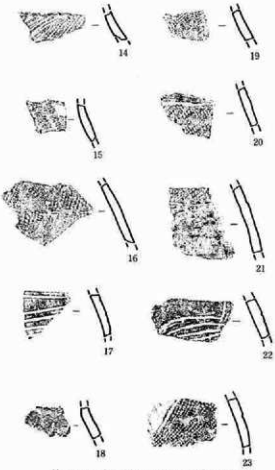
打製石斧（第139図10）　抉入部を作出しようとしているが、未完成である。黒色頁岩を使用。



第140図　包含層出土遺物（縄文時代）



第141図　包含層出土遺物（縄文時代）



第142図　包含層出土遺物（弥生時代）

打製石器（第139図11、PL51）　表面には求心的な剥離が施され断面D字形を呈する。黒色頁岩製。

打製石斧（第139図12、PL51）　上半部を欠損するが、短冊形石斧である。刃部は粗い剥離によって作出され、両側縁につぶれが見られる。頁岩製。

打製石斧（第139図13、PL51）　分銅形を呈し抉入部は丁寧に作出される。抉入部、刃部は摩耗している。黒色頁岩を使用。

弥生時代の遺物

甕（第140図14・17、PL51）　14は頸部、17は胴部上半の破片である。別個体であるが共に沈線文が施される。17は深い沈線文である。焼成は堅緻。

甕（第140図15・18・19）　15・18は頸部、19は胴部上半の破片である。共に波状文が施され、15は5本歯、18は12本歯以上、19は5本歯である。

壺（第140図16・20・21・23、PL52）　いずれも胴部上半の破片で、縄文が横位に施される。16・20・23はLRであるが、21はLRLの可能性がある。胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

壺（第140図22）　胴部上半の破片。沈線の波状文が横位にめぐる。胎土は緻密で堅緻な焼成。

壺（第141図24）　胴部上半の破片。内面は篦研磨。胎土は少量の砂粒を含み、堅緻に焼成される。

壺（第141図25・38、PL52）　25は頸部、38は胴部上半の破片である。ともに沈線の山形文が施されるが、25は平行沈線の山形文で、38は横線文の間に施文される。胎土は緻密で堅緻に焼成されている。

甕（第141図26・27・34・36、PL52）　34が頸部破片で、他は胴部上半の破片である。いずれも簾状文が施され、26は11本歯以上、27・34・36は12本歯である。内外面ともに良く研磨されている。かなり多量の砂粒を含むが、焼成は堅緻である。

壺（第141図28、PL51）　胴部上半の破片である。LR 縄文を横位に施文した後に沈線文で区画している。胎土は緻密で焼成良好。

壺（第141図29、PL52）　頸部の破片である。4条1単位の簾状文が左回りに施文される。かなり多量の砂粒を含むが、焼成は良好である。

壺（第141図30）　胴部下半から底部にかけての半完形品。内面ナデ、外面はナデの後に篦研磨を施している。砂粒を多く含むが、焼成は堅緻である。

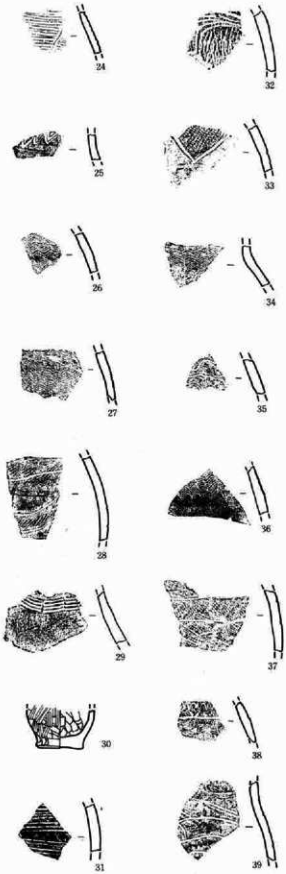
甕（第141図31・35、PL52）　共に胴部上半の破片である。31はナデの後に平行沈線が施文される。35は波状沈線文が施される。両者とも胎土は緻密で、良好に焼成されている。

壺（第141図32、PL52）　胴部上半の破片で、沈線文の区画内にR縄文が充塡されている。かなり多くの砂粒を含み、焼成は普通。

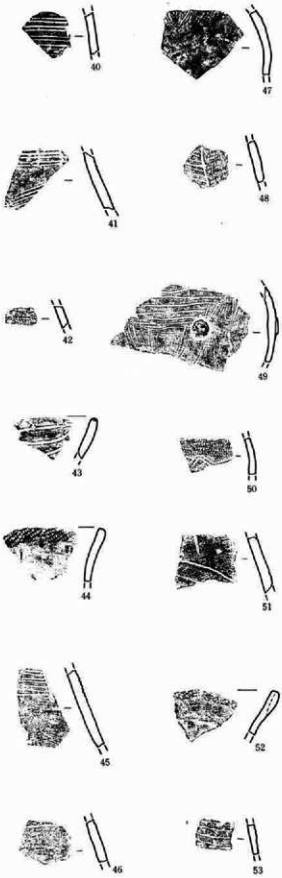
壺（第141図33）　胴部上半の破片である。山形文の区画内に LR 縄文が充塡される。かなり多くの砂粒を含むが、堅緻に焼成されている。

壺（第141図37、PL52）　胴部上半の破片である。内外面ともにハケにより調整される。沈線文の区画内に LR 縄文が充塡される。

壺（第141図39、PL52）　頸部から胴部上半にかけての破片。内外面ともナデ調整される。多くの砂粒を含むが、焼成は良好である。



第143図　包含層出土遺物（弥生時代）



第144図　包含層出土遺物（弥生時代）

甕（第142図40・41、PL52）　共に胴部上半の破片である。41は頸部に右回りの篦状文が施される。両者とも胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

壺（第142図42・46・48・50・51、PL52）　共に胴部上半の破片である。50は RL 縄文が沈線の施文後に施されるが、ほかは LR 縄文が施文される。46・51は沈線文の区画内に充填される。46・48・50の内面はやや荒れている。胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

壺（第142図43）　口縁部の破片である。棒状工具による弧状の沈線がめぐり、同一工具によって口唇にも刻目が施される。内外面ともナデ調整がなされるが、内面はその後に研磨されている。少量の砂粒を含み、焼成は普通である。

壺（第142図44、PL52）　口縁部の破片である。口縁部および口唇に LR 縄文が横位に施文される。内面はナデ調整され、外面は若干風化している。胎土は緻密で、焼成は普通。

壺（第142図45）　頸部の破片でT字文が施されている。外面は研磨されているが、内面は風化してやや荒れている。左下に外面からの片面穿孔がみられる。胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

甕（第142図47）　胴部上半の破片である。LR 縄文を横位に施文した後に、縦位の沈線を描いている。内面は良好に研磨されている。胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

甕（第142図49、PL52）　胴部の破片である。コの字重文の上に刺突されたボタン状貼付文が施される。内外面ともナデ調整されている。胎土は緻密で、焼成は普通である。

壺（第142図52）　口縁部の破片である。折り返し口縁で、ナデ調整される。内面は横位にハケ目調整される。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は普通である。

壺（第142図53）　胴部上半の破片である。内面は良好に研磨される。外面は横ナデ調整後に横位の沈線文が施される。胎土は緻密で、堅緻に焼成されている。

古墳～平安時代の遺物

ミニチュア土器（第143図54）　手づくねの土器で、口縁が欠損している。内外面はナデ調整。胎土は少量の砂粒を含む。焼成は普通。

鉢（第143図55、PL52）　体部上半が欠損している。口唇直下に隆線をめぐらしている。体部下半は外傾し、橋状の把手を付ける。ロクロ成形で体部は横ナデ、底部周縁に篦削り、底はナデの調整をしている。また把手は篦削りされ、内面の指のおさえ痕が残る。胎土は緻密。還元焼成による硬質の須恵器である。

坏（第143図56、PL52）　完形の坏。体部は外傾し、端部でやや外反する。平底の坏である。ロクロ成形で、底部は回転篦切りである。胎土は緻密。還元焼成による硬質の須恵器である。器高3.5cm、口径10.8cm。

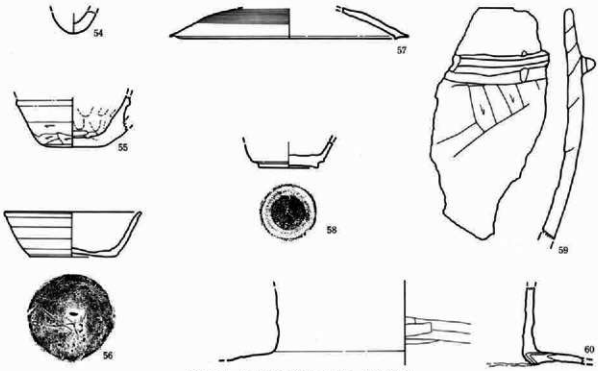
蓋（第143図57、PL52）　須恵器の蓋の破片である。ロクロ成形で口唇は内側にかえりを有する。外面にはかき目がみられる。胎土は緻密。還元焼成で硬質に焼成されている。

壺（第143図58、PL52）　底部の破片である。ロクロによって成形され、高台は削り出されている。胎土は緻密であるが、若干の砂粒を含む。還元焼成による硬質の須恵器である。底径4.6cm。

甕（第143図59）　口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は内湾し、最大径が胴上部にある。鍔と体部との接合部には、2個の孔が上位から穿孔されている。外面は口縁部が横ナデ、胴部が篦削りの後にナデ調整されている。内面は横ナデによる調整である。胎土はかなり多くの砂粒を含む。焼成はおおむね良好である。

甕（第143図60）　口縁から肩部にかけての破片である。口縁部は直立ぎみに外傾し、張りのある肩部をもつ。頸部に接合痕が残る。

内外面ともに横ナデの調整がなされている。胎土は少量の砂粒を含む。還元焼成による硬質の須恵器である。



第145図　包含層出土遺物（古墳～平安時代）

中・近世の遺物

灯明皿、すり鉢、鉢類などで個体数は少ない。時期判定のできるものは少ないが、中には相当近代に近いと思われる遺物も含まれている。

飯茶碗（第144図61、PL 52）　磁器。体部～高台部½残存。底径 6.5cm。体部は内彎し高台を持つ。染付。呉須は淡い。ロクロは右回転。

鉢（第144図62）　陶器。口縁部は½残存。口径17cm。胎土は緻密。色調は浅黄橙色。焼成は硬質。口縁部は外傾し、端部外面に段を作る。口唇部は平坦。外面口縁端部は横ナデ。口縁部回転横ナデ後放射状条線を施文し、再度回転横ナデを行う。

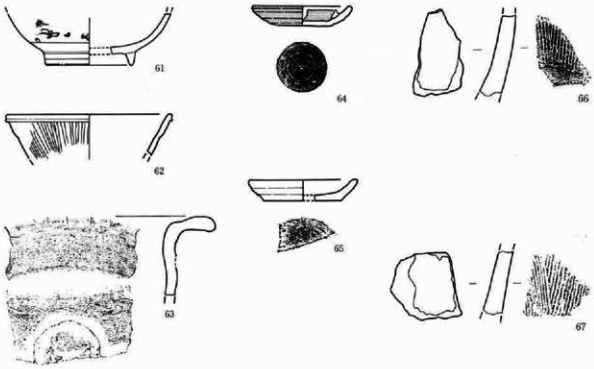
鉢（第144図63、PL 52）　陶器。口縁部破片。胎土は緻密。色調は外面炭素吸着による黒褐色で内面にぶい黄橙色。焼成は硬質。口縁部は水平に外折し平坦面を作る。口唇部は丸く厚い。外面口縁部は横ナデ。胴部櫛描波状文施文後、把手を貼付する。内面口縁部は横ナデ後篦磨き。胴部は横ナデ。

灯明皿（第144図64、PL 52）　陶器。完形。口径 8cm。底径 4cm。器高1.6cm。胎土は緻密。焼成は硬質。体部はやや内彎気味に外傾。平底。器体は浅い。外面底部は切り離し後回転篦削り。外面底部を除く全体に飴釉。外面体部下端に重ね焼痕あり。内面端部に煤付着。

灯明皿（第144図65、PL52）　かわらけ。½残存。口径8.6cm。底部6.2cm。器高1.7cm。胎土は緻密。焼成は硬質。色調はにぶい黄橙色。体部は短く外傾。平底。器体は浅く、器肉は厚い。外面底部に左回転糸切痕あり。

すり鉢（第144図66、PL52）　陶器。底部付近と思われる胴部片。胎土は細砂混入。焼成は硬質。色調は橙色。素焼。おろし目は粗く、見込中央に向かって条痕が走る。使用された頻度が多く、おろし目が摩耗している。

すり鉢（第144図67、PL52）　陶器。底部付近と思われる胴部破片。胎土は全体的には緻密だが 8 mm大の小石を混入。焼成は硬質。おろし目は粗く、見込中央に向って条痕が走る。内外面に飴釉が施されている。



第146図　包含層出土遺物（中・近世）

写 真 図 版

1　遺跡周辺の景観
（後方赤城山：南より）

2　B区遺構検出状況
（西より）

3　C区遺構検出状況
（南より）

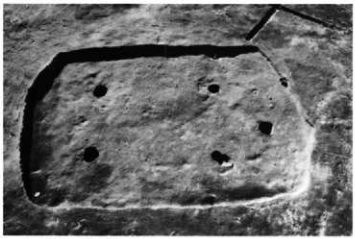
1　A区11号住居址

2　炉周辺の遺物出土状況(No.1・2)

3　遺物出土状況(No.5)

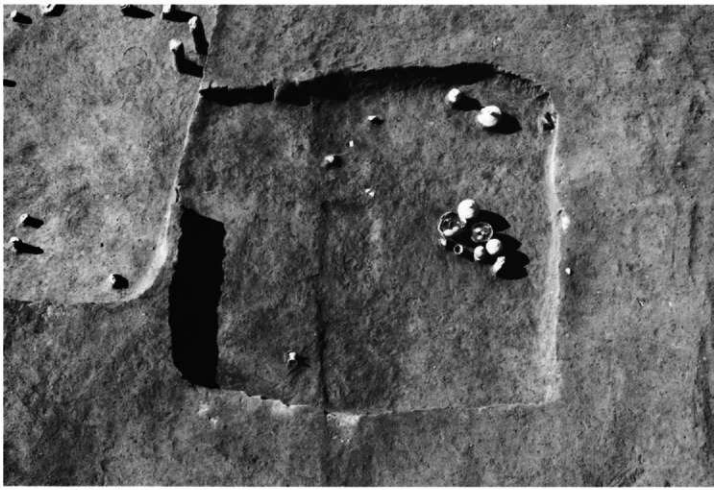
4　遺物出土状況(No.6)

5　遺物出土状況(No.3)



1　A区21号住居址

2　遺物出土状況(No. 7)



3　A区9号住居址

4　遺物出土状況(No. 1・3～8)

5　遺物出土状況(No. 2)

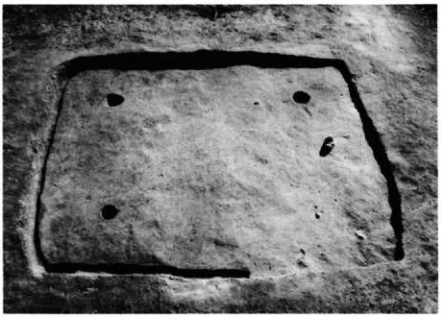
1　A区26号住居址

2　埋没土層(A－A')

3　遺物出土状況(No.1・3・6)

4　C区4号住居址

5　遺物出土状況(No.2)



1　C区6号住居址

2　遺物出土状況(No.1・2)

3　C区8号住居址

4　遺物出土状況(No.4)

5　C区10号住居址

6　遺物出土状況

1　B区11号住居址

2　遺物出土状況

3　遺物出土状況(No.8・15・18)

4　遺物出土状況(No.2・13・17・20)

5　E区3号住居址

6　遺物出土状況

7　遺物出土状況(No.1・2・5・6)

8　遺物出土状況(No.4)

1 C区7号住居址

2 遺物取り上げ後の状況

3 遺物出土状況

4 遺物出土状況(No.11・12・14・15)

5 遺物出土状況(No.3・8)

1 B区4号住居址

2 遺物出土状況

3 遺物出土状況(No.4～6・12)

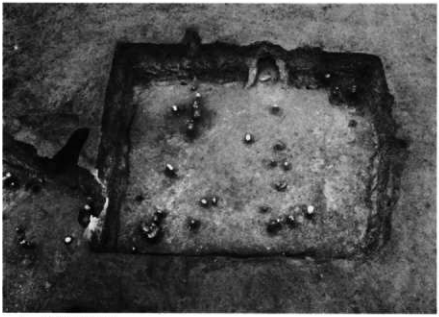
4 遺物出土状況

5 B区12号住居址

6 遺物出土状況

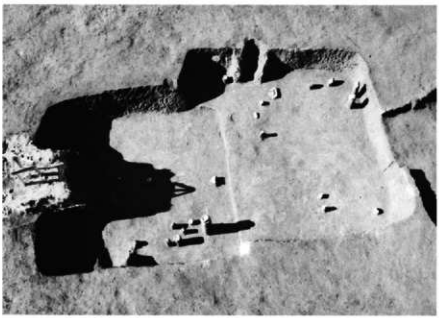
7 竈 址

8 遺物出土状況



1　A区4号住居址

2　遺物出土状況(No.4)



3　A区7・8号住居址

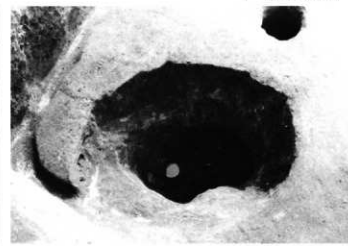
4　8号住居址遺物出土状況(No.4)

5　A区24号住居址

6　遺物出土状況(No.1)

1 A区28号住居址

2 竈 址

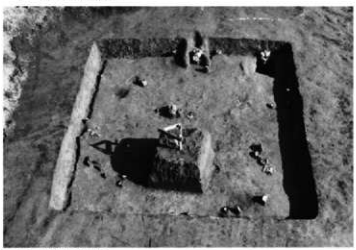


3 貯 蔵 穴

4 遺物出土状況(No.5・7・12・13)

5 遺物出土状況(No.5・12・13)

1　B区2号住居址



2　遺物出土状況

3　竈址と遺物出土状況(No.17)

4　貯蔵穴と遺物出土状況(No.16)

5　遺物出土状況(No.2・5・12)

1 B区5号住居址

2 遺物出土状況(No 1 ～ 4)

3 B区8号住居址

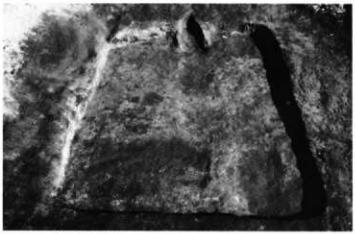
4 貯 蔵 穴

5 竈 址

6 旧 竈 址

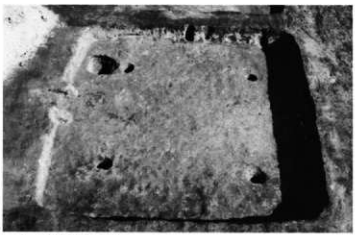
7 B区13号住居址

8 遺物出土状況(No 1)

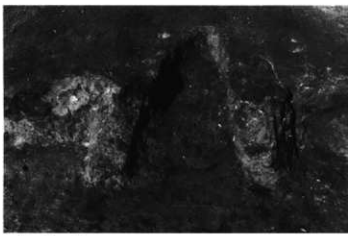


1　C区1号住居址

2　遺物出土状況



3　C区2号住居址



4　竈　　址

5　C区5号住居址

6　竈　　址

7　遺物出土状況

8　遺物出土状況(No.1)

1 C区3号住居址

2 遺物出土状況

3 竈 址

4 遺物出土状況(No. 8)

5 遺物出土状況(No. 1)

1　E区5号住居址

2　竈址と遺物出土状況(No.3・4・8・10)

3　遺物出土状況(No.5・7)

4　E区10号住居址

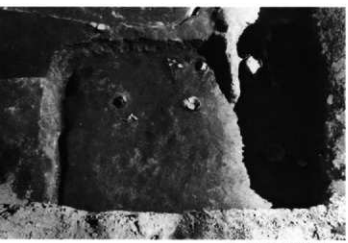
5　遺物出土状況(No.1・4)

1　E区7号住居址

2　遺物出土状況

3　竈　　址

4　遺物出土状況(No.1)



5　E区9号住居址

6　竈址と遺物出土状況(No.12)

7　遺物出土状況(No.1・4)

8　遺物出土状況(No.6・8)

1　E区16号住居址

2　竈址と遺物出土状況(No.12・13・17・18・20)

3　遺物出土状況(No.3・8・11・14・15)

4　遺物出土状況(No.3・14)

5　遺物出土状況(No.1・13)

1　A区1号住居址

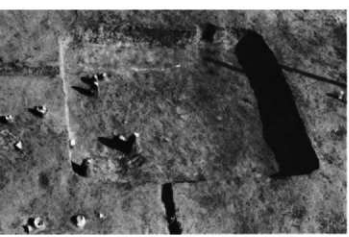
2　遺物出土状況(No.4)

3　A区16号住居址

4　遺物出土状況

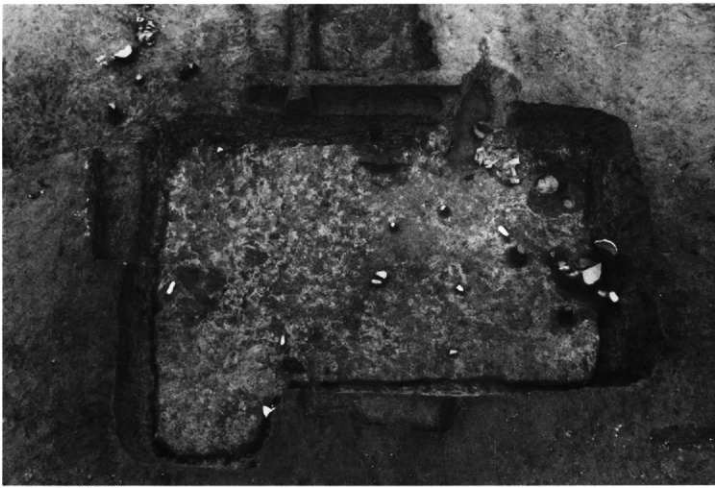
5　B区3号住居址

6　竈址と遺物出土状況(No.1・2)



7　B区6号住居址

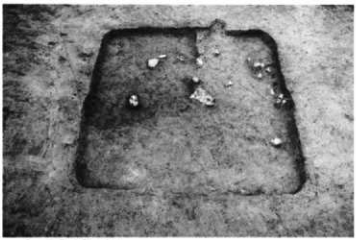
8　遺物出土状況



1　B区1号住居址

2　遺物出土状況

3　竈址と遺物出土状況(No.1・14)



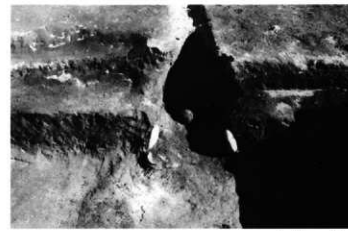
4　B区9号住居址

5　遺物出土状況(No.3)

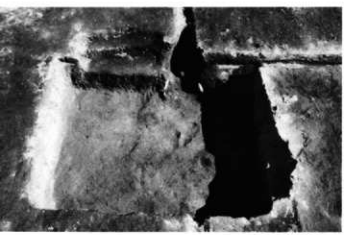
1　A区5号住居址

2　貯蔵穴と遺物出土状況(No. 1)

3　A区22号住居址

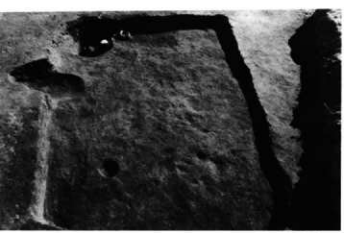


4　竈　　址



5　A区25号住居址

6　竈　　址



7　E区1号住居址

8　貯蔵穴と遺物出土状況(No. 3)

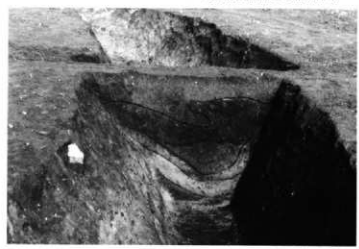
A区方形周溝墓群（後方博士山：東より）

1　A区3号方形周溝墓(後方5号：東より)

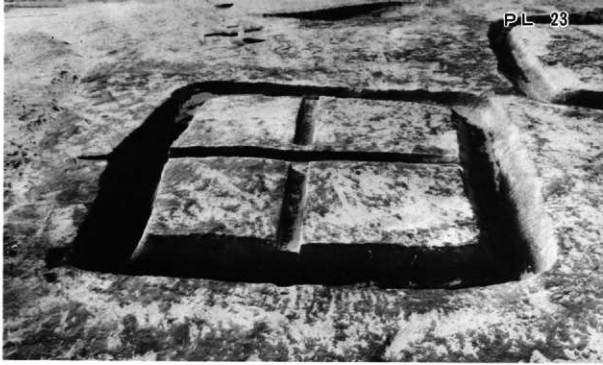
2　主　体　部

3　周溝内遺物出土状況(No.17)

4　埋没土層(A→)



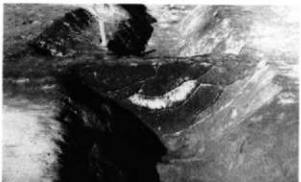
5　埋没土層(←A')



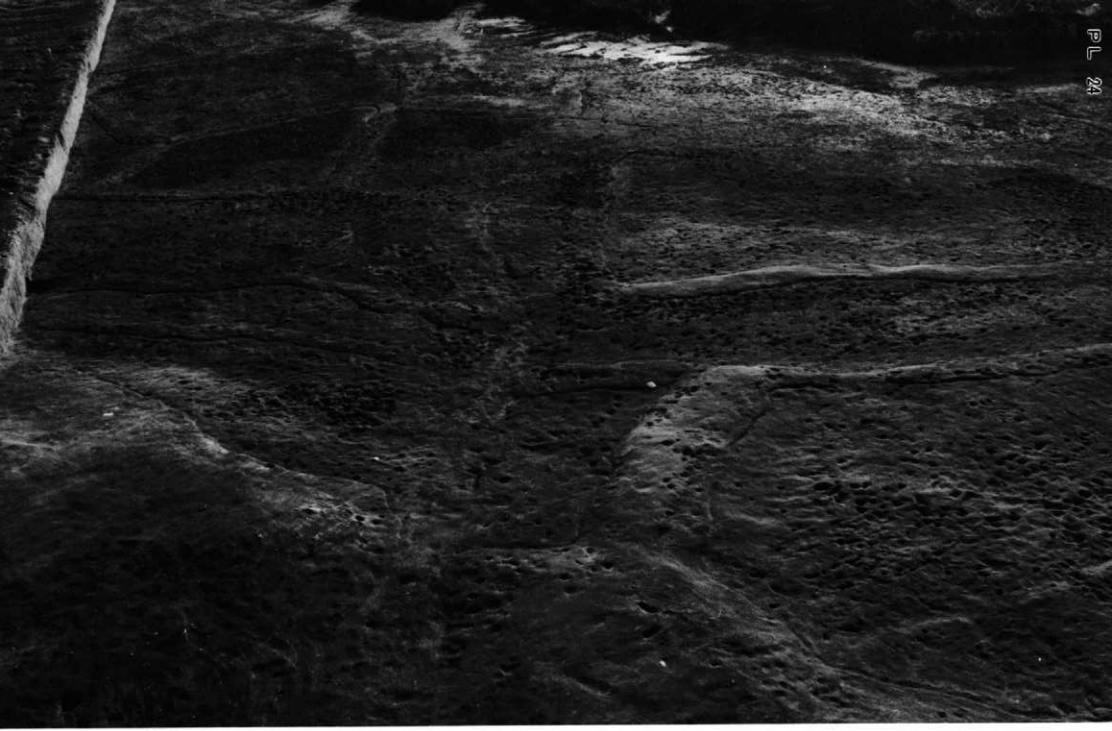
1　A区4号方形周溝墓
（東より）

2　埋没土層（B→）
3　埋没土層（A→）

4　A区5号方形周溝墓
（西より）



5　埋没土層（A→）
6　埋没土層（←B′）



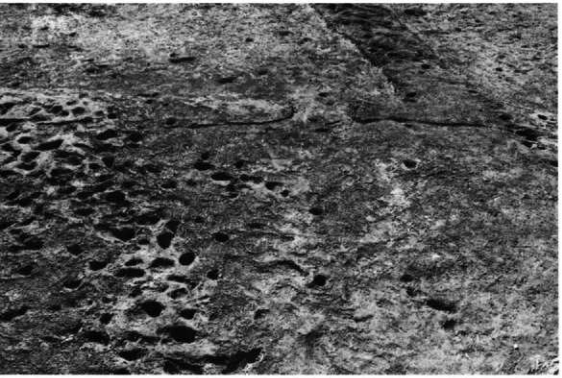
A区浅間B層下の水田址(北より)

1　A区浅間B層下の水田址

2　水田址と浅間Bの堆積状況

3　水田耕作土と浅間B

1　水田面とアゼの状況



2　アゼ上の水口

3　水田面上の痕跡

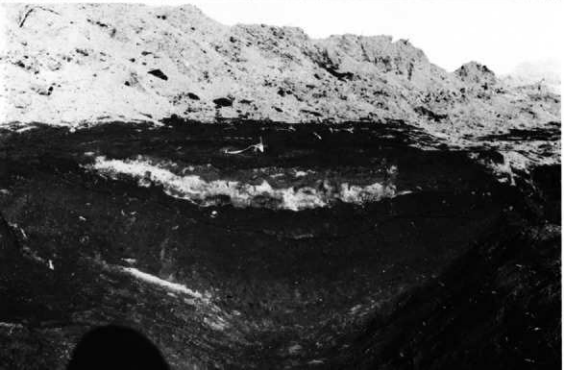
1　B区1号掘立柱建築遺構と3号溝

2　C区7号溝

3　D区1号溝

1　C区1－3号溝(北より)

2　C区5－7号溝(南より)

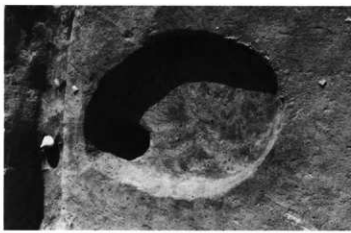


3　C区4号溝埋没土層

1　B区土坑検出状況

2　B区1号土坑

3　B区2号土坑

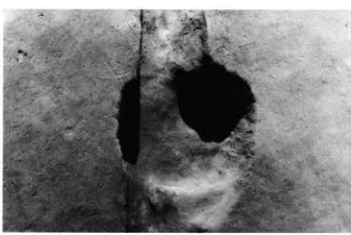


4　B区3号土坑

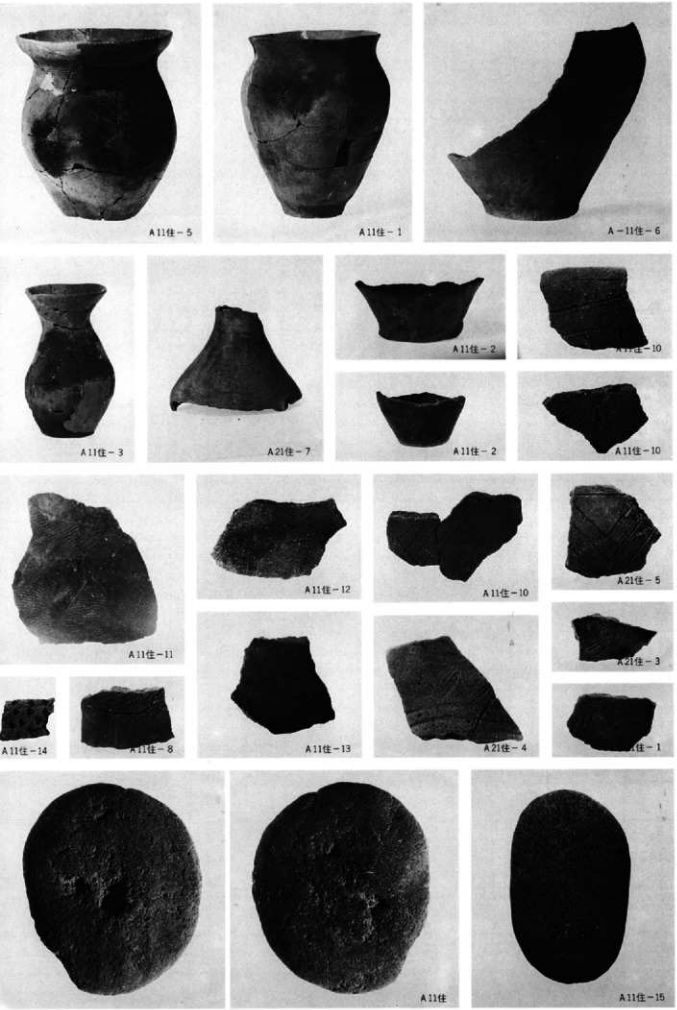
5　B区4号土坑

6　B区5号土坑

7　B区6号土坑

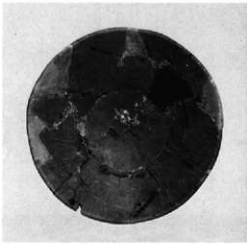


8　B区7号土坑



A区11・21号住居址出土遺物

A 9住－3



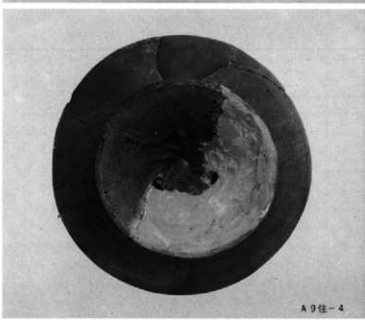
A 9住－5

A 9住－1

A 9住－2

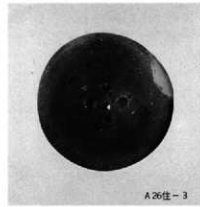
A 9住－7

A 9住－6


A 9住－4

A区9号住居址出土遺物

A 26住－2

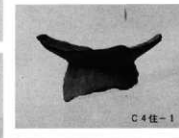


A 26住－3

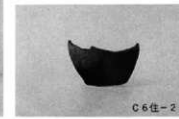
A 26住－1

A 26住－5

A 26住－6



C 4住－1



C 6住－2

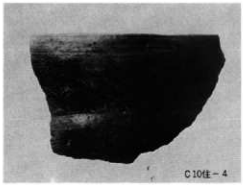
C 6住－1

C 6住－4

A 26住－7

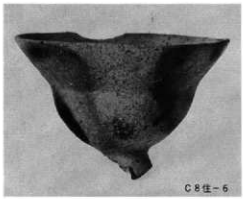
C 4住－2

A区26号住居址、C区4・6号住居址出土遺物

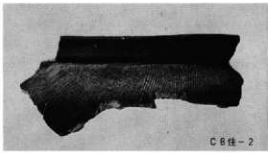

C10住－4

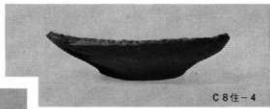
C8住－3

C10住－1


C8住－6

C8住－5

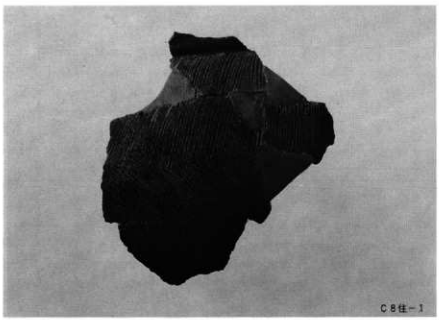

C8住－2


C8住－4

C10住－3

C10住－2

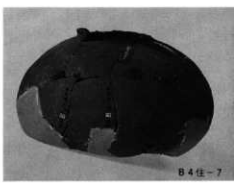
B5住－3


C8住－1

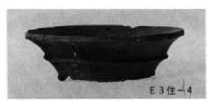
B5住－4

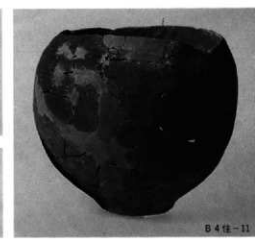
B5住－1

B4住－9


B4住－7

C区8・10号住居址、B区4・5号住居址出土遺物





B区４号住居址、E区３号住居址出土遺物

B11住－4

B11住－1

B11住－2

B11住－13

B11住－12

B11住－14

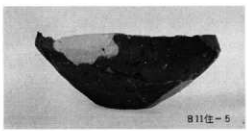
B11住－20

B11住－8

B11住－7

B11住－9

B11住－16


B11住－5

B11住－11

B11住－17

B11住－18

B区11号住居址出土遺物

C 7住-14

C 7住-6

C 7住-9

C 7住-7

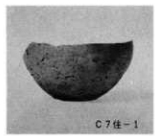
C 7住-3

C 7住-8

C 7住-15

C 7住-2

C 7住-11



C 7住-1

C 7住-4

C 7住-12

C区 7号住居址出土遺物

A－23住－1

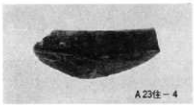
A 4住－1

A 2住－3

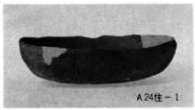
A23住－3

A 4住－2

A 4住－3

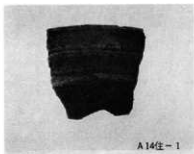

A23住－4

A 8住－2

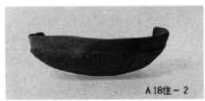

A24住－1

A 8住－3

A 7住－2


A14住－1

A13住－1

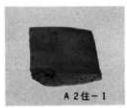

A18住－2

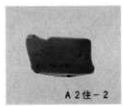
A14住－2

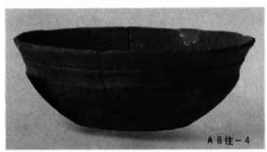
A18住－1

A18住－3

A14住－3


A 2住－1

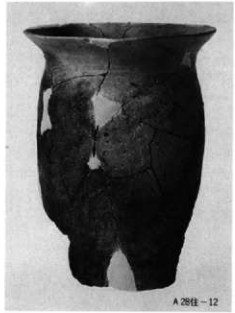

A 2住－2


A 8住－4

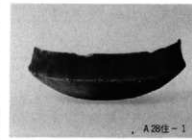
A23住－5

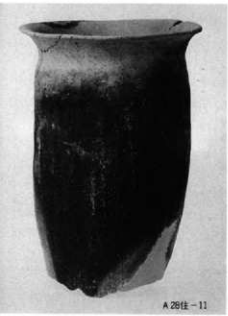
A区2・4・7・8・14・18・23・24号住居址出土遺物

A 28住－10


A 28住－12

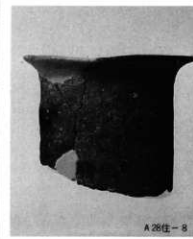
A 28住－2


A 28住－1


A 28住－11

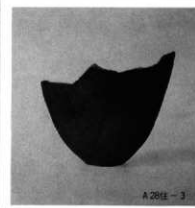
A 28住－13

A 28住－5


A 28住－8

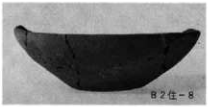
A 28住－7

A 28住－6


A 28住－3

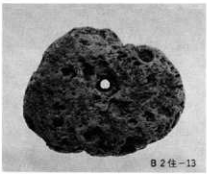
A区28号住居址出土遗物

B 2住－9


B 2住－8

B 2住－3

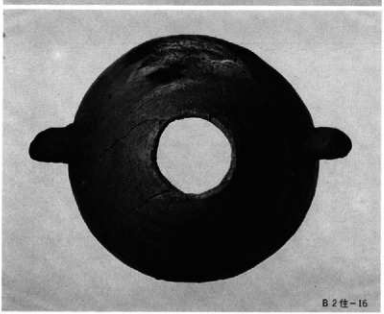
B 2住－1


B 2住－13

B 2住－4

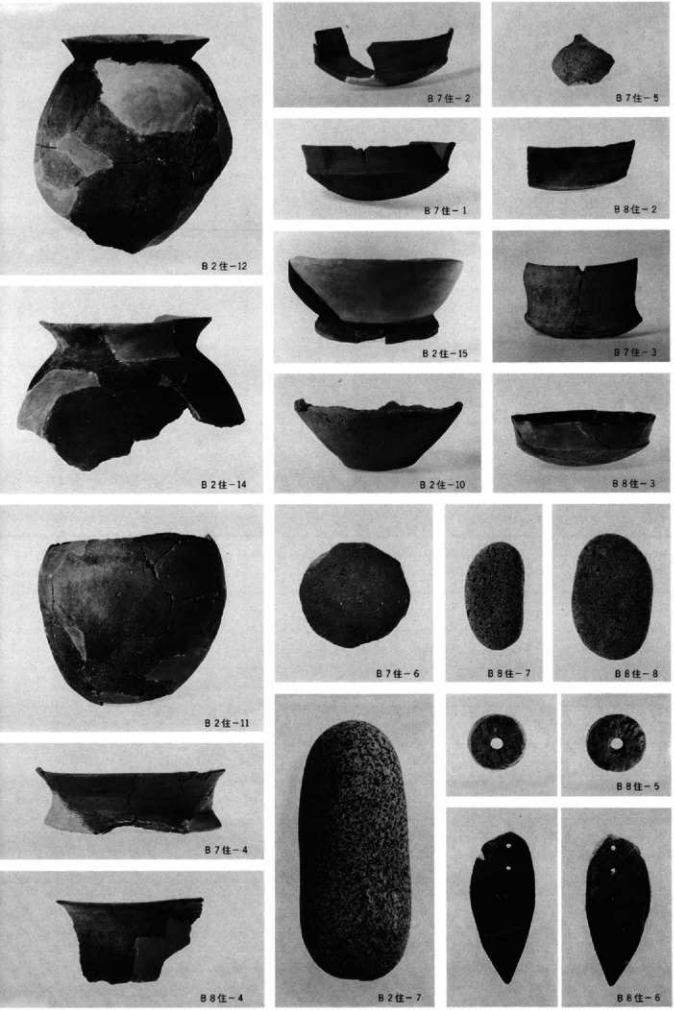
B 2住－6

B 2住－5


B 2住－16

B 2住－17

B区 2号住居址出土遺物

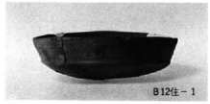


B区2・7・8号住居址出土遺物

B12住－4

B10住－1

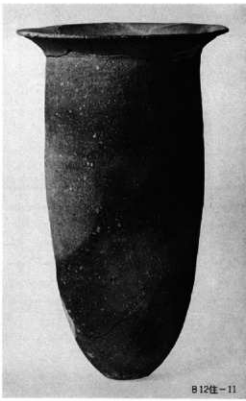
B12住－10


B12住－1

B12住－8

B12住－3

B12住－12


B12住－11

B12住－2

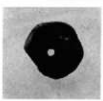
B12住－7

B10住－2

B10住－4

B12住－16

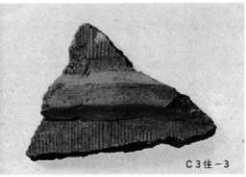
B12住－13



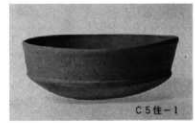
B12住－15

B12住－14

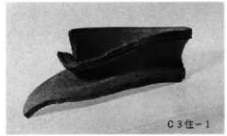
B区10・12号住居址出土遺物

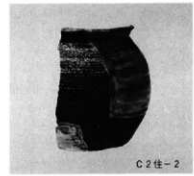

C3住-3

C5住-2


C5住-1

C3住-6


C3住-1


C2住-2

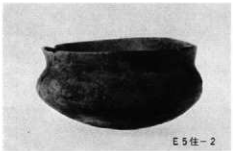
C3住-7

C3住-12

C3住-8

C区3号住居址出土遺物

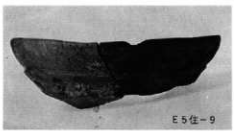
E5住－3


E5住－2

E5住－1

E7住－4

E7住－1


E5住－9

E7住－2

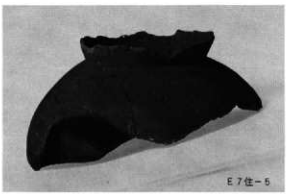
E5住－4

E5住－5

E7住－6

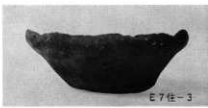
E5住－6

E5住－8


E7住－5

E5住－7

E5住－10


E7住－3

E5住－11

E区5・7号住居址出土遺物

E 9住－5

E 9住－7

E10住－1

E 9住－6

E10住－5

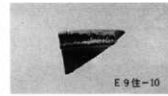
E 9住－11

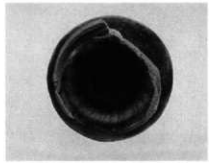
E10住－2

E10住－3

E 9住－13

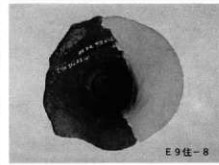
E10住－4


E 9住－10

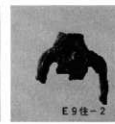


E 9住－1

E 9住－4


E 9住－8

E 9住－3


E 9住－2

E区 9・10号住居址出土遺物